座敷童は懐かない

上葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
座敷童は懐かない

【Ｎコード】
Ｎ１６２８Ｌ

【作者名】
上葵

【あらすじ】
雨の日の昼下がり。何をするでもなく昼寝していた少年のもとに、一昔前のホラー映画のような出会いが訪れます。

1雨の日の座敷童　前

春という季節が過ぎ、夏へと向けて暑くなるジメジメとした梅雨のある日。

雨が降っていた。
外は日本を水浸しにするのが目的だと言わんばかりのバケツをひっくり返したようなどしゃ降りの雨。
そんな日に外に出るのは自殺行為だと判断しているのか一人の少年が気だるそうにアパートの自室で昼寝をしていた。

欠伸を小さくし、微睡みの世界に足を踏み入れようとするその刹那。
ぶぉん
彼の部屋の置物に成り下がっている古ぼけたブラウン管のテレビがスイッチをいじってもいないのに一人でに稼働した。
「？」
古くなってるからかな。
疑問に思いつつも、体を包み込むだるさには勝てそうもない。彼の手はテーブルに置かれたリモコンに伸びることなく、だらんとソファーの上でセイウチのように横たわる体に添えられるだけだった。
ザー　ザー
雨の音とともに、テレビから砂嵐が室内に響き渡っていた。

「……」
音はやまない。雨音を伴って不快なオーケストラを奏でている。
だが、彼の意識はお構いなしに深層へと沈殿していった。
そういえば、こういうアナログテレビの砂嵐をずっと眺めている

と、発狂するとか、未来の恋人が映るとか、…そういうくだらない噂もデジタル化でなくなるんだなぁ。
どういい事で思考を埋没させていれば自然と瞼は重くなる。彼の寝る前の儀式は、そういう手順になっている、ハズ、だった。
ぬっ
思考は分断される。代わりの訪れたのは驚愕。テレビから、長い髪の女がところてんのように飛び出てきたのだ。現れたのは未来の恋人ではなく、ホラー映画のワンシーンであった。
「……」
夢の中の出来事としか思えない摩訶不思議な世界が薄ぼんやりとした視界に広がっているが、彼はまだ完全には寝ていない。
テレビから某ホラー映画の幽霊みたいに半身を出した女は、そのままズルズルと虫が這うように進み出て、スクッと立ち上がった。
「……」
「……」
二人（？）は見つめ合う。やがてソファーに寝っ転がったままの少年が口を開いた。
「テレビからはもう古いぞ」
「なんじゃとこの野郎」

雨は降り止むことなく、世界を濡らし続ける……。

「あんた誰？」
目は覚めていた。強烈なインパクトを与えた登場シーンは眠気と恐怖を奪い、代わりに冷静さを彼に与えていた。
「おかしなことをいうやつよ。もうちょっと普通の反応があるだろうに」
「うるせぇな。質問に答えろ。あんたは誰だよ？警察呼ぶぞ？不法進入だ」
「だから、そういうのとは完っ全規格外じゃろうが。なんで国家権

力に頼ろうとするんよ。せめてゴーストバスターズせぃ」
「あっそ」
彼は無言でポケットの携帯を取り出した。電波状況は良好だ。
「あ、嘘、嘘。謝るからそれだけは勘弁してくれんかの？お上は苦手なんよ」
「んじゃ電気屋に電話する」
「我は確かに存在しとる。３Ｄの飛び出す映像とちゃうわ」
少年はそれに玄関を指差し答えた。
「どうでもいいがついでに外まで出てってくれないか。今なら不問にするからよ」
「そ、そんなこと言って後で後悔しても遅い。なんてったって私は幸福を呼ぶ座敷童じゃからの」
「……」
少年は訝しい瞳で人外の技で登場した彼女を見た。確かに古風な着物を着てはいるが、顔は前に垂らされた長い黒髪に覆われていて見えない。身長は子どもといっちゃそうだが、成人した女性にもそれくらいの高さの人はいる。
「胡散臭え。幸せなんていらないから悪霊退散」
「な、なにを！？我は悪霊と違い幸福を呼ぶ素晴らしき存在ぞ。だ、大体おぬしはおかしい！普通は我を見たら驚くもんじゃろ！」
「……例えば？」
「うわぁ～、幽霊だぁ！ぎゃ～、助けてぇ！とか」
「自分で幽霊って言ってんじゃねぇか」
「我は座敷童じゃ」
目の前には確かにテレビから出てきた謎の女が立っている。それは確かな現実だが、一つ解せないことがあった。
「なんでウチ来たんだよ」
「あー、ほら」
自称座敷童は窓をチラリと見てから、少年の方に向き直り続けた。
「外、雨が降っておるじゃろ。雨宿りさせてくれんかの。ついでに

しばらく住まわせてくれろ」
「死ね。出てけ」
「酷い言いようだのう。何もしてないというに」
「驚かせようとテレビから出てきたんだから有罪だ」
携帯に指をかける。
「あ、ちょっとタンマ！高貴なる座敷童は電波を媒体にするしか移動が出来んのよ！うん、そういうこと！つまりサプライズは副作用なの」
「意味わかんねぇし、だからどうした。さっさと帰れ。塩まくぞ」
そう言い彼は体を起こし台所に行こうと立ち上がった。
「ちょ、止まれ。止まってくれ！客人に塩まくのは失礼だとおもわんのか！？」
彼の手を必死につかむ。さわりと感じた手のひらに温もりなぞ存在せず氷のように冷たかったが、彼はそんなことより塩を取ることに夢中だった。
「だからぁ、無駄な事はやめるんじゃ！」
「うるせぇ、んなこと言って実は塩が怖いだけなんだろうがよ！てめぇ散々座敷童だなんだ言ってて結局ただの浮遊霊なんじゃねぇの？」
「あほな事ぬかすな！我は座敷童じゃし、それに、ほらっ、クリスチャンよっ！だから塩は効かんのじゃ！」
一瞬ポカンとする。
「な、なにがクリスチャンだばか！座敷童の時代にんなもんあるか！」
「おぬしに我の何がわかるっ！座敷童は奥が深い生き物なんよっ！」
「なんも知らねーよ！そもそも生き物じゃねーし」
振り向くと、髪をビロードのように垂らした女の顔がある。しかし深い井戸の底のように表情は伺い知れない。
「全くどうしたら追い出そうとしなくなるんよ…」
「この状況でお前を許容する奴がいたら世界で一番頭のネジが緩ん

でるやつだよ」
「酷い言い草じゃがせめて言い分くらい聞いてくれんかの？」
「あ？」
「あれはそう我という存在が生まれて一年といった時のこと…」
「消えろ！」
彼が放った問答無用の蹴りは、煙を揺らめかすように彼女の体をすり抜け、文字通り空を切った状態になった。
何事もなかったかのように座敷童は続ける。ホログラムのようだが、先ほど少年の歩みを止めるために伸ばした手には確かに実体があった。
「座敷童は幸せを呼ぶけど去れば不幸が訪れる。この法則が私を縛ってることに気づいたんよ」
「がぁぁ！攻撃が通じねぇ！誰か俺にシルフスコープをっ！」
「初めて訪れた佐藤さんちはそうして没落していった…」
「佐藤がどうなろうと知るかっ！」
「次のお宅も栄えたのも一瞬で没落……」
「だったら家を出てかなきゃいいだけの話じゃねぇか！」
「それは出来ん」
「はあ？」
「風が、私を呼ぶのよ…」
彼はいつの間にか座敷童の話に耳を傾けていることに気がついていない。
「意味わからん！お前が一生根無し草でいりゃ不幸なんて起きないだろうが！」
「人肌が、恋しくなるんよ…」
「とんだエゴイストじゃん」
彼は小さく息をついた。
「そんな私は気づいた！そう！1ヶ月くらいなら座敷童オーラは発動されず、幸も不幸もないんですよ！」
「ああ？つまりぃ？」

「1ヶ月ほど、泊まらせてくれんか？」
彼の決断は早かった。
「無理」
「……せめてもう少し考えてくれても」
風と共に雨が窓をたたきつける。その様子をそっと指差して彼女は不服そうに続けた。
「ほら雨も降ってるし。こんな中に女の子を放りだそうだなんてとんだ鬼畜じゃ」
「お前は自称妖怪だろうが。そもそもてめぇリアルにひさしを貸して母屋を奪いそうで怖いんだよ」
「おおっ！なんだかんだで私に恐怖しとるんだな！これでこそ妖怪の本分よ！」
「誰が弱小妖怪にビビるか！さっさと帰れ！雨宿りだけが目的なんじゃないのかよ！」
「我は根無しの渡り鳥、止まり木があれば足を休める…」
「足ねぇだろっ！」
「だから幽霊じゃなくて座敷童だってば！それにほらっ、見て！」
そう言って座敷童は着物の裾を捲りゼリーのように半透明な二本の足を彼に見えるようにアピールする。
彼は照れたように目を逸らした。半透明とはいえ好みの美脚だったのだ。
「？急に黙ってどうした？」
「……いいからさっさと消えろ」
「顔が赤いが……」
誰にも言ったことないが、少年は足フェチだった。
「うるさい！いい加減にしないと大槻教授呼ぶぞ！お前なんてキチガイ扱いだ！」
「う～む、これだけ頭を下げてもダメだとは、頑固なやつじゃ」
「ナマいってんじゃねぇ。一回も下げてないだろ」

「ほら、最初土下座しながら現れたじゃないか」
「あれは土下座だったのかっ！？」
「正確にはワンランク上の土下寝じゃな。這って進むのが大変なんじゃ」
「……」
俺の常識が通じないのは仕方ない、生きている世界が違うんだから、と少年は自らに言い聞かせた。そもそも生きてないし。

「よし、そうじゃ」
ポンと手を叩くと座敷童は朗らかに言い放った。
「我がお主を驚かせたら、１ヶ月だけ泊まられせてくれろ」
「……どこをどういったらそうなるんだよ」
「お化けルールじゃ。なぁに追い出すわけじゃない。共生！若い男女の共同生活！ぬふふ！かわいいあの娘晴れ姿、スイカの名産地ぃ～♪」
「お前何歳だよ…」
「やるの、やらないの？逃げるの？逃げちゃダメでしょ！」

座敷童は質問をスルーした！
「うっせーな、やってみろよ。言っておくがチャチな手品じゃ俺は驚かないぜ」
「その心意気やよし！ゆくぞ！」
「は」
どうせまた、テレビからひょっこりとか、壁をすり抜けるとかそんな大したことないイリュージョンなんだろう、と高をくくって、少年は鼻で笑った。
一方、部屋の中央で座敷童は何も言わずもじもじと身体をくねらせている。

「おい、お前、なにがした――」

「好きですっ！付き合って下さい！」

「え」

超衝撃だった。

雨の日の座敷童　後

室内に響く雨音のラプソディ。電流が駆けめぐるかのように脳内を座敷童という非現実的少女の言葉が埋め尽くす。
「死んだ後、霊になる前のことじゃ、神の声が聞こえたんよ」
「神様とか、いるわけないじゃん」
「無神論者か？まあなんとでもいうがよい。座敷童がおるんじゃ、神も、なまはげも、サンタクロースも存在しとると我は考えとる」
「どちらにせよ自称じゃねぇか。死んだならそのまま天国でも地獄でも好きなところ行けよ。あれば、の話だが」
「まあ黙って聞いてくんろ。神が言うには我は座敷童になるんじゃと」
「ふぅんそりゃよかったな。俺はお前の正体はただの浮遊霊だと思うけど。…まあ幽霊がいるだけ奇跡かな」
「信じる信じないは自由だからの。幽霊にしてもそうでないにせよ、成仏せず妖怪化してしまったんは、きっと心残りがあるからかの」
少しだけ悲しそうに呟いた座敷童の言葉は、彼の耳には届かなかった。
彼が今、必死になって考えているのはどうしたらこの災厄、座敷童から離れられるかということと、先ほどの言葉の真意だ。
「そんなことよりさっきのサプライズなんだよ。心臓に悪いだろうが。もし止まったりしたら俺も晴れてお前の仲間入りだよ」
「でもビックリしたじゃろ？」
誇らしげに彼女は言った。
「ノーカンだ。妖怪なら妖怪らしい方法でびびらせろってんだ。そもそもありゃなんだ…」
「ほら、一度も恋をせずに死んだから。気がついたら口をついていたというか…」

知るか。
「これが心残りみたいな」
心残りッ！？
ピクリと少年の耳が座敷童の言葉に反応する。
なにかを思いついたらしく、温まった油が注ぎこまれるようにだんだん明るい表情になっていく。
「きっとこういうのが思い残したことになるのだろうな」
その言葉で少年の表情は光が立ち込めるように明るくなった。
「でも、確かにお主の言う通りじゃな。驚かすのにこのような仕方はしょうもないというものよ。いくら我が恋愛をしてみたいからと言って――」
「ＯＫですッ！」
「え！？」
一瞬、座敷童が驚きで目を丸くしたが少しも気にせず彼はさらにはっきり告げた。
「付き合いましょう！」
「まじかの！？」
親指をビッと立てかっこよく言い放つ。即断即決だ。
今、彼の脳内にはある一つの話が浮かんでいた。
幽霊というのは未練があるからあの世にいかず、現世に留まっている…。座敷童がこれと同じかはさておき、彼女曰く元は生きた人間だったのだから採用される確率は高いと踏んだのだ。
彼が彼女の申し出を受けたのにはそんな裏があった。
「本当に付き合ってくれるの？」
「イエス」
「でも、あれ、半分冗談みたいな告白、じゃよ…」
「お前の気持ちが偽りなら話を流してくれて構わねーよ」
「あっ、いや、ほ、本気よ！気持ち自体は偽りというわけじゃ、ない、けど……。本当に我みたいな不透明な存在でもいいのかの？」
「ああ、俺は構わねー。お前さえよければな」

それで未練が無くなってこの世からいなくなってくれるならっ！いくらでもっ！
心の声はどこまでも貪欲だった。
「座敷童の我のことを、ほ、骨まで愛してくれるのか？」
「イエス」
骨ねぇだろ。
そう思ったが声に出さない。雰囲気を崩すことは得策でないと判断したのだ。
「ほん、とに。ほんと、付き合って…」
「しつこいヤツだな。いいじゃねぇか、1ヶ月しかないってのは寂しいが、恋愛くらい誰だってしてみたい事だろ」
「……」
相変わらず長い黒髪が顔を隠しているため表情は見えないが、頬がぼんやりと赤く染まっていることが彼にはなんとなくわかった。
「初恋…、そして初カレシ！すごいのじゃ」
夢見心地のように言葉を続ける座敷童を見て、少年はいいことをした、と一人うんうんと頷いている。
「夢か幻か、とにもかくにも我が誰かから愛されるなぞ、絶対にないことだと思っておった」
ぴょんぴょんと楽しそうに飛び跳ねている座敷童は今まで話をしてきた中で一番子供らしい姿だった。
「……あれ？」
本来ならば微笑ましい光景なのだろうが、少年とっては元気に飛び跳ねている彼女の様子は計算外に他ならない。
成仏しないのか？
汗が一筋流れる。それを拭うことなく彼女を観察し続けた。座敷童は部屋中をさながら子供のようにきゃきゃと笑いながら走りまわっている。
俺の計画ではそろそろヤツの身体に迎えの光が射すハズなのに…
「天にも昇る気持ちじゃ～」

「早く昇れ！」
「え！すみません！」
たまらず怒鳴っていた。
反射で謝罪を口にした座敷童だったが、しばらくすると少しだけ不服そうに唇を尖らせて少年に食ってかかった。
「なぜキレとるのだ？」
「それはお前がさっさと未練を断ち切って天に、……ってちょっとまて」
「どうしたのじゃ？」
「お前なんか姿が変わってないか？」
唇を尖らている様子が見えたのだ。
彼女の表情を隠していた長い黒髪はいつの間にか短髪に変わっており、座敷童のイメージ通りのおかっぱ頭になっていた。顔立ちはそれこそ人形のように整っているが、不思議と生気を帯びたふっくらとしたほっぺをしており、彼女がこの世ならざる存在というのを忘れさせる。赤みがかった唇やほっぺたはとても可愛らしく、着物によく映えていた。
髪には花をあしらったかんざしが差しており、髪型によいアクセントを加えている。
「ああ、これな」
彼女はそういうと手にもったカツラを掲げて見せた。
「ウィッグ、というやつじゃ」
「はあ？」
「簡単に言えば付け毛。ようはカツラのことじゃ」
「……ちょっとまて、なんでお前がそんなもの持ってるんだ？」
「そりゃ……お洒落したいお年頃じゃからの」
ごにょごにょと後半部分は消え入るような声で彼女はそう言った。
「セミロングにして何がしたいんだよっ！俺を脅かすためだけにかっ！？」
「憧れだったんじゃ。長髪が」

「自称座敷童がなにほざいてんだ。つうかそのカツラどこで手に入れやがった！」
「……企業秘密」
「なんの企業だよ」
彼の突っ込みは窓を叩きつける雨音に飲まれ、煙のようにたち消えた。
多少気落ちした視線を少女にぶつけ憂鬱な溜め息を殺しながら、再び彼女と向き合う。
「いつのまにか髪留めまでつけてるし……。むしろなんでこのタイミングでカツラを取ったんだ」
「カレシぃ（語尾上がる）にはありのままを受け止めてほしいと思うのが乙女心じゃ」
妖怪は乙女に入らないし、そんな妄言を信じてやってるだけでも相当懐深いだろ、おい。
「それにある人と被っちゃてるってのもあるかのぅ」
自覚あったのかよ。
「やはり人してのアイデンティティは保たないといけんと思ったのじゃ」
「…すでに人じゃないがな」
「それって“人”に対してもの凄く失礼な言い方じゃ」
座敷童はぷくぅ、と自らの怒りを表すかのように頬を膨らませたが、その表情からはハムスターを連想させるだけで特に意味はなかった。
「まあ、」
なんだかドッと疲れた。
非現実的要素を許容する自らのキャパシティに感心しつつも、本来はそんなホラー要素をもとめていないことを思いだし、彼は静かに言葉を続けた。
「俺はお前の心残りを取り除いてやってこの世の未練を断ち切ってやろう、と仮作していたわけだけど」

「ほぅ。なかなか味なことをするではないか」
「お前が天に召されないというなら、意味がない話だったというわけだ。残念だが今回は縁がなかったというわけで」
「むぅ！なんじゃそれ！」
もっとはっきり座敷童なんざについていけないといってやろう。メリハリをつけなくては。
彼の心の中の言葉はいつしかはっきりと表に現れはじめていた。
「前言撤回とは卑怯な男がすることじゃ！なんと脆弱な精神。そんなことしてみろ、一生つきまとってやるからのう！」
なんでこんな一途なやつになってるんだよ！めんどくさいな！
「それは“人”として卑怯だろっ！」
「我はもう人ではない！」
「さっきと言ってることが違う！」
「人の意見とは刻々と流転するものなのよ」
「もうなにがなんだか……」
磨耗しきった良識という名のライフラインは、この瞬間に擦り切れてどこかに行ってしまったようだった。
もう何を言おうと、確定事項は動くことはない。
彼の、彼女いない歴はこうして途絶えたのだった。
それが喜ばしいことなのか、誰にもわからない。

2まにまに

「あのさ、一つ気になってたんだけど」
「なんじゃ？」
床にごろごろ寝っ転がってテレビを見ていた座敷童に少年がケイタイをいじりながら、暇つぶしに会話を選んだように話かけた。
「お前は幸福を呼ぶ座敷童なんだろ。じゃあ宝くじとか当たるわけ？」
「ふむ、我にかかれば楽勝じゃな。運のみのギャンブルだったら、まず負けることはないじゃろう。それはそうと、」
座敷童は寝っ転がった状態のまま振り向きじろりと冷ややかな視線をむけた。
「お主はまだ学生じゃろ。日本では未成年の賭博は禁止されておる。公営競技は１８歳、パチンコパチスロは２０歳」
「宝くじに年齢制限はねーだろ」
きっと自分の能力の穴を見破られるのを恐れているに違いないといった挑発的な口調で彼は言った。
「そういうことが言いたいんじゃなくての」
リモコンでテレビのスイッチを消して立ち上がり、真剣な面もちで彼を見つめた。

「ギャンブルは労せずしてお金が稼げるから、努力することを忘れてしまうんじゃ。キチンと働き稼いだお金でご飯を食べる、それが人として一番大切な生き方じゃ」
「何様だ、てめぇは」
「カノジョ（語尾あがる）からの忠告」
ケイタイを苛立たげにしまって少年は欠伸を小さくした後にだらけたように声を上げた。

「はんっ。ほんとは浮遊霊ってのを誤魔化すための言い訳じゃねぇの」
「むぅぅ、まだ信じておらんのか」
「信じるも信じねぇも……。お前妖怪らしいこともなんにもしてねぇじゃねぇか。このままじゃただの穀潰しだ」
「女の子を妖怪扱いとは失礼なヤツだのう。それに一番はじめテレビから出てきたじゃないか」
「それだけかよ。今お前は俺の想像上の人物なんじゃないかと思って内心ビクビクしてんだからな」
　そこまで深刻に考えてはいないが一抹の不安はある。もしこの少女が自分の中にしか存在しえないというのなら、精神科か眼科に予約の電話をいれなくてはならない。
　もっとも、面倒、という二文字で放置するに違いないが。
「ふっ、案ずるな。我は確かに存在しておる。お主に我のようなキュートな存在がイメージできるとは思えんからのう」
「うっせぇ、クソガキ」
「なんじゃ失礼な！」
「てめぇのが失礼なことほざいてたよっ！さっさと俺の目の届かないところに行ってくれ！」
「住まわせてくれると言うたではないか。それに我とお主は付き合っておるのだろう？」
「憑かれてるの間違いだろうが。ほんと、俺おかしくなっちまったのかなぁ。こんな幻覚みるだなんて……」
　幻覚扱いされてさすがに頭に来たのか小柄な少女はプリプリと頭から湯気を出しながら地団駄をふんだ。
「だから我は幻覚ではなく、きちんとここに存在しておる！見よ、この手のひらを！生きているからここにあるんじゃ」
「そうですか。存在してんならさっさと岩手県に帰ってくれませんかねぇ！そうでなくても塩まいてやる！」
「だから幽霊ではなく座敷童だとあれほど、」

「口ではなんとでも言えるだろ。このちんちくりんっ！」
「ぐぬぅ、……いいじゃろう。しからば証拠を見せてやる」
「はっ、やってみろ！えせ座敷わら、」
□■□■□■ガッ□■□■□■□■□■□■□■□■
「ご、ごめんなさい…」
「わかってくれて嬉しいわ」

彼女、座敷童がテレビからひょこり姿を現した次の日。
一晩考えてみて、夢の中の出来事だと判断していた少年が目を覚ますと、リビングには朗らかな笑顔のおかっぱの少女がトーストを焼いて食べている、という光景が彼の視線の先にいた。
そのあたかも日常風景のような雰囲気に頭をかかえうずくまったが、1ヶ月の辛抱だと考え直し一応の同棲を決意したのだった。

「そういえばまだ主さんの名を知らん」
「…だからどうした」
「彼氏彼女の関係において不自然ではないだろうか」
「たった1ヶ月くらい名前を知らなくても過ごせるだろうよ」
「むぅ。なんでそこまで名乗りたくないんじゃ？」
ほっぺをぷくぅと膨らませた少女を見て少年は少しの間考えた。
こいつ何歳だ？
パッと見、中学生くらいに見えるのだが、妖怪の外見年齢など当てにならないだろう。
しかし年上だとしても、見た目がこんなんではこちらとしては落ち着かない。
この春、無事高校生になった少年の夢は、先輩のお姉さん方とお付き合いすること、だった。
値踏みの視線を彼女の胸部によせ、少年は小さくため息をつく。
「これ、お主！なぜ質問に答えず哀れむような視線を我によこすの

じゃ」
「いや別に。ただ着物って便利だな、って思っただけ」
寸胴体型を誤魔化すのに、日本の民族衣装は一役買っている（独自の意見です）。
「う、むむ？そうかのう。まあ確かに着付けは不便かもしれんが、ファション性は高いかのう」
「見た目なんざ自分しか気にしてねぇよ。白装束の方が雰囲気でるんじゃねぇのか？」
「うん。そうかのう？主さんがそっちがいいと言うならば着替えるが」
「…いや、なんでもねぇ」
経帷子（死に装束）でも着てろ、と皮肉をはいたつもりだったのだが、彼女が微笑みながら着物の裾を掴んでクルリと一回転しているのを見て何も言えずに口を噤んだ。
花柄の着物は人形のような彼女にとても似合っていた。
「それはそうと名前じゃ」
「だから言いたくないって」
「なぜに？」
「……」
少年は瞑想するかのように目を閉じて、彼女とは反対の方向をツーンとわざとらしく向いた。
「ぐぬぬ、なんと無視にでるとは…」
独り言を呟く座敷童など露にも気にせず、そのままソファーに寝転がるような倒れこむ。二度目の睡眠をとることにしたのだ。
「しからば、我も本気を出そう。ふふふ…、ファイナルウェポンと化した我の拷問に口を閉じることが出来るかのう」
色々と言い返したくなったが、グッと言葉を飲み込んで夢の世界へ逃走を開始しようと、スタートラインに意識を立たせる。
眠気を確実に脳みそから分泌しようとした時だった。
「ふぐわっ」

「ふふふ…、どーじゃ？」
「き、貴様、な、なにしやがった！？」
違和感が体を包み込む。まるで太い鎖が体中に巻きついたように身動きがとれない。
「これが座敷童流妖術、金縛りの術！今お主が動かせるのは口だけよ」
「てめーこの化け物！さっさと解放しやがれ！」
「言うにことかいて化け物とは失礼なやつじゃ！まだ力の差を理解しとらんというのか」
睨みつけるように目をあける。金縛りにあっているとはいえ、瞼は自由にあけられた。
「いい加減にしろ！」
「あ」
座敷童がその小さな手を彼の腰に目一杯まわし、ギュッと抱きついていた。
「……」
「ぬかった！瞼をセロハンで止め忘れるだなんて、不覚っ！」
「おい、こら。こりゃどういうことだ」
「……どう、とは？」
「なんでてめー抱きついてんだ？」
「……」
視界の下から上目づかいて言いよどんでいたが、少年の激しい視線に根負けしたのか小さく口を開いた。
「…これが座敷童流金縛りなんよ」
「子泣きじじいの間違いじゃねぇのか」
「あくまで座敷童ですから」
妙に澄ました決め顔で彼女はそう言った。
「にしても地味に凄いな」
「なにがじゃ？」

術を解いて（といっても離れただけだが）、二人並んでソファーに座る。
カップに麦茶を入れ、口を潤してから、彼は続けた。
「いや、ほら感触がなくて、縛られてるって感覚だけがあったからよ」
「ふふふ、エリートの我は質感を自在にコントロールできるんよ」
「ほう、なかなか興味深いな。そういえば一番最初に触られた時ヒヤリとしたがアレはなんだったんだ？」
「ああ、お主の動きを止めるために手をつかんだ時だのう。アレはただ単に物を掴むために一部を実体化したに過ぎない。いわばノーマルバージョンじゃな」
「口が達者な座敷童だこと……」
ちらりと隣の誇らしげな少女を見て呆れたように呟いた。
どうやらこの誉め殺しで、名前の件をすっかり忘却のかなたに押しやったようだ。
「それに本気を出せば、人間と同じように人肌で実体化することも出来るぞ」
「ほう。やってみろよ。正直言うとお前に触られるのなんだかクラゲを相手にしてるみたいでちょっと苦手だったんだ」
「それならそうと言うてくれればよいのに…」
「なんか言い辛いだろ」
「そうじゃの、……」
「……で？」
なぜか無口になった座敷童の方を流し目で見る。キョトンとしていた。
「なんじゃ？」
「いや、だから実体化したのかよ？」
「うむ。完全な人と同じになっておる」
えっへん、と語尾につけくわえふんぞり返っている座敷童をまじまじと観察してみるが、特に変わったところは見受けられない。

「見た目変わんねーな」
「まぁ、普段から体裁は保つようにしてるからのう」
少年は生きてるのか死んでるのかよくわからない存在のくせになぜ見た目にこだわるのか、と疑問に思ったが口にはださない。
「触ってみるが良い。キチンと人肌を感じられるはずよ」
誇らしげに胸をそらし、にっこりと彼女は言った。
「そうか」
一度小さくコクンと頷き、彼は躊躇うことなく、
「ふぃぎっ！？」
その小ぶりな胸に手をかけた。
「うん」
「ぬ、ぬ、ぬぅわにぃをするぅ！」
「たしかに実体化はしてるなぁ」
手を放した彼は呑気にそう呟く。
「おおおお主！なんたることをっ！い、いきなりなにをしとるかわかっとるのか！」
激しく狼狽しつつ両手で胸をかばいながらも少女は訴えかけるような涙目で少年を非難する。
「実体化してるか確かめたんだよ。悪いか」
「悪いよ！バカか！？バカなのか！？それとも天然でやったのか！？」
「確信犯です」
キラリン、歯を灯りに光らせてかっこよく言い放ったその言葉と態度に座敷童は目をカッと見開いて烈火のごとく怒った。
「威張れることではないわぁっー！最低じゃ！鬼畜じゃ！人として終わっとるわ！」
「人じゃないやつに言われたくないな」
「黙れ小僧！ナチュラルにスケベ！まさかお主、実体化した我の体が目的だったのか？」
「おいおい、なに言ってんだ」

一回鼻で笑ってから彼はとても良い笑顔で、
「確かに実体化はしてたけど、質感は再現できてなかったぞ。ありゃ人肌というよりは着物のシワを触っただけだ」
息もつかせず続ける。
「洗濯板みたいだったなぁ」
ブチン、
少年はその時たしかに堪忍袋の緒を切れる音を聞いた。
「ぶっ殺す、」
「キレんなよ、ただのスキンシッ、」
「と、心で思ったなら！その時すでに行動は終わっているんだッ！」
「へ？」
■□■□■□ガッ■□■□■□■□■□■□■□
「ギャァぁぁ〜〜〜〜！！！」
その日、その時、近所中の動物たちが一斉に恐怖を感じたようにけたたましい鳴き声をあげたそうだ。
その鳴き声の中心地には、軽率な行動と迂闊な発言をした、少年の愚かな断末魔があった。

3 It introduces oneself in the park.

「言い辛いかもしれんが答えてくれんか？」
「あん？」
「お主が一人暮らしをしているのは薄々感づいておった」
「そりゃみりゃわかるわな」
男の一人暮らしにしては質素だが、掃除はきちんと行き届いた部屋の真ん中、二人は何故か正座で向きあっていた。
「親の仕送りで暮らしておるのだろう」
「それがどうした」
この春から高校生になった彼は、寮が改築工事をしている間代わりのアパートで一人暮らしをすることになったのだ。
座敷童の言う通り、家賃などの最低の生活費は実家からの仕送りでまかなっている。その他の娯楽費用は春先の短期バイトで稼いだお金でカバーしていた。そこそこ貯金も出来ているので高校生にしては結構リッチな生活を送れている。
「そこに制服がかけられておる。ということはお主は中学か高校の生徒なのだろう」
「高校生だけどな」
真剣な表情を崩さぬまま、ひょんなことから居候を始めた少女はハンガーにかけられた制服を指差して尋ねた。
「ならば学校はどうしたのじゃ？今日は平日じゃろう」
説教を初める親の視線のように、細めた目で彼女は続けた。
「まさか引きこもりというやつか。思えばお主。この2日間一歩も外に出ておらん」
聞きたかったこと、というのはこれのことか、と少年は小さく溜め息をついた。
「2日間外に出なかったのはテメーも同じだろうが。それにただメ

シ食らってるお前の方がさらに始末が悪い。終いには味に文句をつけやがって」
「そりゃカップ麺ばかりでは愚痴もたれるわ！なんだったら我が料理をつくるがのう」
「それじゃ今度からお願いするわ。引きこもりの穀潰し」
「だあぁぁ～、我は座敷童だから仕方ないのよ！って、なにをごまかそうとしておる！キチンと質問に答えるのじゃ！」
床をバンと勢いよく叩きつけ、装いを整えなおすようにと唇を尖らせた。
「うるせぇな。ここんとこテスト休みなんだよ」
「テ、テスト休み？」
期末テストが終わり、成績会議が行われている間、彼の学校の一般生徒は自宅待機ということになっている。もしその会議で成績が芳しくなかった場合は、呼び出し、補講というカタチになるのだ。私立校だからといって進学に力をいれているわけではないくせに、真面目な生徒にしてみれば休日になるこの夏休み前の連休は素直に有り難かった。
その旨を説明すると、ようやく納得したのか、座敷童はこくりと頷きながら安堵したように呟いた。
「なるほどよかった。つまり我のカレシは根暗少年ではなかったのだな。ふむ、一安心じゃ」
そこでぴくりと動きを止め、顎に手を当てて彼女は続けた。
「いや、待て。それでも2日外に出ないのはいただけん」
「雨降ってただろうが。それに自宅待機という名目なんだから休みでも外にでちゃいけねーんだよ」
はなから守る気などない校則だが、外出中に呼び出しの電話が鳴ったら後々面倒である。もっとも先の期末試験で頭を抱えるようなミスは犯していないと自負しているので、補講は受けないとは思うが。
「規則を破るのが学生の義務じゃろうが」

「……昨日ギャンブルの有害性について熱く語ってたくせに」
「それとこれとは話が別じゃ。昨日今日と外出しなかったお主の脳は湿気でカビ臭くなっておるに違いない。よし！天日干しする意味も込めて、お日様の下お散歩しようではないか」
「えー、面倒くせー。買い物はまだしなくて大丈夫だし、外出したきゃ一人で行ってろよ」
「初デートじゃよ！さぁ早く！」
「……尚更行きたくなくなったわ」
だからそんなにキラキラした瞳で見ていたのか。
「そう言わずに」
「うっせぇな！大体座敷童が家を離れていいのかよ！地縛霊じゃねぇのか」
「別にちょこーと家を留守にするくらい平気じゃ。それと我は地縛霊ではない」
「なんにせよ俺はぜってー行かな、…はっ！？」
その時彼は、少女の瞳が昨日の惨劇の寸前のものになっていることに気が付いた。
「……行かせていただきます」
「ふふふ、流石我が見込んだ男よ」
わかりきったようなしたり顔で彼女はニヤついた。

平日昼間の公園は人気はなく、このちっぽけの空間を二人だけで支配しているかのように錯覚させられる。中天にさしかかった太陽は、二人をぽかぽかと包み込んでいた。
「公園デート！全ての乙女憧れの素敵ワードの一つじゃ」
「単に節約しただけだけどな」
「見もふたもない言い方はやめい。むっ、あれは！」
軽やかなステップで入り口をくぐった少女は今にも光を放ちそうな笑顔のまま駆けていった。一つ一つの遊具をじっくりと観察してからブランコに腰をかけ、亀の歩みのようにたらたらとする少年の

ほうにキラキラ光る視線をむけた。
「見よ！これ、ハイジが乗ってたやつじゃ！たしかブラコンとか言うたかのう」
「ブランコだろ。なんでウィッグとか知っててそれ知らないんだよ」
「うるさいのう。少し間違えただけではないか。口笛はなっぜぇ、遠くまで聞こえるのー♪」
上機嫌のまま彼女はブランコを振り子のように揺らし始めた。しかし、それは漕ぐというより地面を何度も蹴って、無理やり動かしているだけだけのようだ。足をつく度にザリザリと地面にこすったような跡をつけ、なんとも見苦しい様である。
少年はその様子を見て、水に落ちてジタバタするアリを思いだした。
「うむぅ、おかしいのう。ちっとも楽しくない。足が疲れただけじゃ」
期待はずれだと言わんばかりに、深い溜め息をついてブランコが動きを静止する。
とろとろと歩いていた少年がようやくブランコまでやって来て周りを囲む柵に腰をおろした。
「素でやってんなら相当天然だぜ？」
「なにがじゃ？」
「そりゃいちいち地面蹴ってたら疲れるだけだろうよ。足を使って漕がなきゃ」
「漕ぐ？ふむ」
「だから足を揃えて、曲げたり伸ばしたりした反動でブランコを動かしゃいいんだ」
少年の指摘に少女は顎に手をつけてコテンと首を傾けた。
「足を曲げたり伸ばしたり…、はて」
「こないだ『足は飾りじゃないのよ。偉い人にはそれがわからんのです』とかワケわからないこと言って俺に見せてきたその両脚の出番じゃねぇか」

「そんなこと言ってないし、微妙に間違っとるわ。それよりブランコを楽しみたいのう。曲げたり伸ばしたり…」
言うやいなや、彼女はブランコを再び動かし始めた。
「おっ、どうじゃ！おっ！なんかっ、スッゴい揺れる！」
タイミングなど関係ないと、がむしゃらに足をピッコピッコと曲げたり伸ばしたりしているが、当然そんな荒いやり方で上手くいくはずがなかった。
「お、おかしい。疲れたのにブランコはちっとも動かん…」
すぐにブランコは止まった。ゼーハーと肩で息をする彼女は何がいけないのかと、鎖にしがみつき落ち込んでいた。
「だから、進んだ時に足を伸ばして、後ろ戻る時に膝を曲げる、また前行くときに足を伸ばして、と勢いつけてやりゃ、止まることねぇんだよ」
「む。なんじゃと？前に進む時に足を…は？」
「足を真っ直ぐ嘴みたいに垂直にして前に進む！後ろ戻る時は亀が頭引っ込めるみたいにする！ようは振り子なんだから、勢いつけりゃいいんだよ！」
「えーと前に…、あ、まってメモとるから」
「だぁぁ、めんどくせぇなぁぁ～」
「ちょっ、なっ、うわぁ」
何を言っても理解してくれない少女に痺れを切らし、背後にまわってどんと背中を押してやった。
当然しがみついている彼女の体を重しとしてブランコは前に進み、また後ろに戻るを繰り返す。
「うわっちょ、こわっ！ハイジこわっ！」
「ハイジのはもっと怖ぇよ！地面があるだけマシだろうが！ほら、そこだ！そこで足を嘴のように尖らせろ！」
「うむ、はにゃ？お？おお～！」
「おら！戻せ！曲げろ！」
初めのうちは彼の補助なしでは漕げなかったブランコもしばらく

やっているうちに慣れてきたのか、ようやく一人でも漕げるようになってきた。
「きゃはははは！」
座敷童はテンションが上がり過ぎて壊れる寸前のテープレコーダーのようにかん高い笑い声をあげながらブランコを狂ったように漕いでいる。
「もっと、もっとじゃぁぁ！強く、強く背中を押すのだ！うおお、空が青いのぅ風が気持ちいいのうー」
やべぇこいつスピード狂だ。
背中を何度も押しているうちに少年は、スピードに乗り過ぎて高くなったブランコに彼女はきっと恐怖するだろうと思っていたのに事実はまるっきり逆だった。
「よいのぅ。よいのぅ。楽しいのう！やはりブランコという乗り物は我が見込んだ通り楽しいものじゃった！」
感極まったのか、あまりの楽しさを全身で表すかの如く彼女は両手を頭上にあげ万歳のカタチをとった。
「ばか！手をはなすな！」
「え？」
言った時にはもう遅い。
ブランコは、乗っていた人物を投石機から放たれる石のように放りだしていた。
「ばっ、」
少年の中の時間はゆっくり経過していく。
眼前は全てスローモーション再生されたビデオのように緩やかに変化していった。
ブランコから、座敷童は何も叫ぶことなく飛ばされていく。目をふさぎたくなったが、刹那の時間がそれを許さない。
そんな彼の心配を包み込むように座敷童は空中で、
後方宙返りを華麗に決めたあと、
重量を無視したかのような二回ひねりを器用に決め、

何事もなかったかのように、地面に着地した。
「……」
「う、ふぅ～」
「……」
目を塞ごうと伸ばした手はいつの間にか、この光景は現実かと、こする役に代わっていた。
座敷童は今は柵の向こうで、体操の締めのポーズを取っている。
何秒かきっちりそのポーズのまま動きを止めていた彼女はやがて満足いったような笑顔で少年の方を振り向き
「やはりブランコは楽しいのう」
感想を短く告げ、
「それでは交代するかのう。今度は我が背中を押せばいいのじゃな？」
「お断りします！」
少年は畏敬の念をもってその申し出はキッパリと断っていた。

It introduces oneself in the park.

午後になり夏の日差しは激しさを増していた。
何をするでもなく噴き出す汗に目眩を感じながらも頭上を見上げる。
滑り台の上で手をふるおかっぱの少女の姿があった。
「ぬしさんも早よう上がってこい～」
「ハズいわ、ボケ。そんな歳じゃねぇんだよ俺は」
「誰も見ておらん。久方ぶりに童心に帰るのも一興ではないか」
「一人で滑ってろ。俺はここで見守っててやるから」
「むぅぅ」
不機嫌そうに喉を鳴らすと少女はツイっと滑り台を滑り少年の横に立ち、
「そんなこと言わずに一緒に楽しもうではないか」
と背中を強く押して無理やり彼を歩かせた。
「やりたくねーって言ってんだろ。しつこい奴は嫌われるぞ」
「カレシであるお主以外に嫌われようと関係ない。それに二人で楽しむのだから、嫌われる要素なぞなにもないではないか」
「あのなぁお前、…あー、めんどくせぇ、なんでもいいよ、もう」
「？おかしなヤツだのう」
これ以上うだうだとダダをこねるより、彼女の要望通り滑り台をスルっと滑るほうが早いと判断した彼は渋々備えつけられた急勾配な階段を上り、遊具の上にたどり着いた。
「なかなかの景色じゃろ。ふむふむ。こんな狭い空間に二人きりというのも悪くない」
「さっさと滑って地上に戻るか」
「冷めたやつだのう」
口ではそう言っていたが、少年は密かに同意していた。

子供むけとはいえ、遊具自体の高さは大人の身長の倍はある。それゆえに見慣れぬ光景と、公園内を支配しているかのような優越感を感じられていた。
視線を隣で目を細くして微笑む少女にずらし少年は口を開いた。
「今は実体があるんだな」
「うむ？ああ、キチンと人肌しておるだろ」
「そうだけど、こんな狭い空間なら幽体のがいいんじゃねぇのか」
「そっちのがいいというなら、構わんが」
「いや、いいんだ。人間みたいの方が話やすいし。それにしても何で実体化してるんだ？幽体のが楽なんじゃねぇのか？」
「うむ。確かに楽ではあるが、何より」
すっ、と彼女は少年に人差し指をたてた。
「好きな人の要望は極力応えなくてはのう」
「はっ」
鼻で笑うが、たんなる照れかくしにしか見えない。
「い、今は狭いし幽体のがいいんだけどな」
「そうかのう」

しばらく二人は木陰から来る涼風を全身で感じていたが、やがて風景にも飽きたらしい少年が口を開いた。
「とりあえず一旦下に戻ろうぜ。気分良くても羞恥心が疼くわ」
「その前に聞いてくんろ。なんだかんだで3日経つのに未だに我はお主の名を知らん」
また始まったよ、心内で静かに思った彼は傾斜に身を委ねようとかがみこんだが、首ねっこを座敷童に捕まれ、逃げ出すことが出来なくなってしまった。
「だから名乗りたくねぇーって言ってんだろうが」
「なぜじゃ。それくらいよろしかろう」
「彼氏の希望は聞くんじゃねぇのかよ」
「それとこれとは話が違うわ。良いではないか名前くらい。減るも

んじゃなし」
けらけらと笑い声を上げる少女のあどけない様子に、妙な苛立ちを感じながら腕を振り払う。
「いやなもんはいやだ！」
「だからなぜに？」
「デス〇ートかなんかで殺す気だろ！」
「死に神ではない！大体我がお主を殺してなんの得があるというのじゃ！？」
「死亡保険金とか」
「この体では受けとれぬわ！」
公園の幼児向けの遊具の上でなんともシビアな会話が続けられたが、ようやく少年が折れたのか、ため息をつきながらつぶやいた。
「はあ、やれやれわかった。とりあえずそこに座れ」
「う、む？」
先ほどまで自分が座っていたステンレスの傾斜部分を指差し少年は言った。疑問に思いながらも彼女は言われた通りにする。
「こうかの、ゥッ！？」
「落ちろ！」
その背中を容赦なく少年は押し出した。
シャー、と先ほどより幾らか速いスピードで少女は滑り、勢い余って地面にべちゃりと顔面から倒れた。
「はっ！誰が名乗るか！知りたきゃ勝手に調べて、ろ…？」
お　お　お　お　お…
不吉を知らせる前触れのように空気が鈍重な負の音を響かせ震え出す。
地面に倒れたままだった座敷童は、空気の振動を気に練り込んでいるようなゆっくりとした動きで少年の方を乱れた髪の隙間から見た。
ゾクっ、
その全てを凍らすかのような視線に鳥肌がたつ。

おおおお…

空気はなおも震えていた。その振動に合わせるように、座敷童はゆっくりとナメクジが這うように、今滑ってきた場所をノロノロと登りはじめる。

周りの雑木林から響いていた鳥の鳴き声は、いつのまにかやんでいて、シンと静まり返っていた。静寂とともに彼女はゆっくり滑り台を逆走している。

「こぇえよ！頼むから普通に登ってこいよ！」

登頂部分にいる少年は恐怖を感じながらもなんとか震える声でそう言うが、彼女は何も言わず、まるではじめて出会った時のような威圧感で距離をつめてきていた。

「だから怖いって！なんとか言ったらどうだよ！」

「……」

「頼む！悪かった、悪かったから！」

彼女が距離をつめる度に空気が張りつめていく。後ろの階段から逃げ出そうにも足が竦んで動けないし、そうはさせないオーラがあった。

「わかった！名乗る！名乗るから命だけは助けてくれっ！」

「ほんとうっ？」

耐えきれなくなった彼が、情報だけ引き出され殺される脇役のようなセリフをはいた。それに待ってましたと言わんばかりの彼女の素敵な笑顔がふりそそいだ。

「それで、名前は？」

滑り台の上に、二人は並んで立っていた。

「……」

「あなたの、お名前、何ですかぁー？」

「……まずお前から名乗れ」

「なんぞ？」
「お前にだって名前があるだろ。まさか戸籍謄本が存在しない座敷童には、名前なんてないってか？」
「いや、名前自体は、あるが……ふむ。良かろう、一理ある」
彼女はコクンと頷いた。
あんのかよ
ないならないで、それを言い訳にごまかそうと考えていた彼の目論見は外れた。
「我の名は、梨子（りこ）という」
「リコ？名前か？名字はないのか？」
「名字でなく名前で呼んでくれ。そっちの方が親しみやすいからのう」
「はいはい。わかりましたよリコさん」
「さんはいらぬ」
「リコ」
「そ、それで良いのじゃ」
「……何赤くなってんだよ」
呼び捨てされて恥ずかしかったのか、微かに頬を赤らめていたが、場をしきりなおすように咳払いを一つした。
「ごほん。さてぬしさんの名前じゃ」
「……はぁ、仕方ねぇな」
心底嫌そうな顔をしてから少年は続けた。
「あい」
「は？」
「俺の名前だよ。あい」
名を聞いたリコは、少しだけ考えるような仕草をしてから、
「……おなごみたいな名前だのう」
「だから名乗りたくなかったんだ」
小さくため息をついた。
「でも良い名ではないか。愛するの愛」

「字は藍色の藍な」
「うむ。その方がぬしさんにはしっくりときていい感じだのう」
「はいはいサンキュー」
てきとうにあしらってから少年は、滑り台をツイっと滑った。

「さて、帰るか」
地面に降り立った二人は公園の出口を目指し歩きだした。
「うむ。まあ満足だのう。いみじくも良いデートだったぞ。カレシとしては及第点といったところじゃ」
「はいはい。帰ったらゲームでもすっかな。久しぶりに外でたら疲れたわ」
「たかだか30分の外出に何を言っておる。……む」
あと数歩歩けば公道にでる、その手前。座敷童ことリコの足がピタリと止まった。
それを見て藍は眉を微妙にひそめる。
「おい、どうした？」
「……これ」
彼女が指をさした先には、忘れられているのかお世辞にもキレイとは言えない赤色のバイクの遊具があった。
下の部分がバネになっていて、それにまたがり体重を移動させて遊ぶ、いささか低年齢向きの遊具である。ちなみに正式名称はスプリング遊具という、そのままな乗り物である。
「これはなんぞ？」
「上に乗って遊ぶもんだ」
「ふむ」
考えていたのは一瞬だった。
「これで遊ぼう」
「いやだ。帰るぞ」
「良いではないか。時間はとらせん。すぐにすむ。そこで待っておれ」

言うやいなやリコは元気いっぱいに駆け出し、その三輪車サイズのバイクにまたがった。
突っ立っているのも、暇なので少年も彼女のあとに仕方なく続く。
なんでこんなクソつまらないもんに興味をもつかな。回転するジャングルジム（正式名称グローブジャングル）とか半球状の穴や石がついてるやつ（俗称プレイスカルプチャー（コンビネーション遊具））はスルーしたくせに。
バイクにまたがったはいいが何もせずボーとしている彼女をみて彼はそう思った。
「……これで終わりかの」
「またかよ」
ブランコの時と同様、遊び方がわからなかったらしい。それにしても下がバネになっているのは丸分かりなのだから気づきそうなものだが。
「それは、体重移動を楽しむ遊具だ。ブランコとさほど変わらん」
「うむ。むむ…、」
力をこめうなっているのは口もとだけで、遊具はなんの変化もしていなかった。
「はぁ、まったく」
しょうがないなぁ、と呟きながら少年は彼女が跨るバイクの隣にある、パンダのスプリング遊具の上に腰を下ろした。なぜパンダとバイクの組み合わせなのだろうとチラリと疑問を感じたが今は無視して彼女に遊び方をレクチャーする方が優先だ。
「いいか、よく見てろよ。こうだ」
ぐぐぐ…
パンダを思いっきり傾け、地面スレスレまで接近させる。黒い模様の塗料がはげシロクマなりかけの愛らしい顔が傾げたみたいに斜めになった。
「おおっ！」
「ほれ、やってみろ」

ばいんばいん、と音をたて、パンダが左右に揺すれた。
「おおー！」
「感心はいいからやってみろって」
「うむ！」
とてもいい返事だが、彼女のバイクが動くことはなかった。
「なぜじゃ！」
「こっちが聞きたいよ。あ、お前が軽過ぎてできないのかも。でもブランコは漕げてたしなぁ。お前体重何キロ？」
「りんご3つぶん」
「真面目に答えろや」
リコはあひる口で続けた。
「乙女に体重を訊くなど、言語道断だとは思わんのか」
「はっ。どちらにせよこの程度の遊具を遊べないとか器が知れるな」
「なんじゃとー！」
挑発されぷりぷりと頭から湯気をだす少女をみて、憎たらしい含み笑いを起こし少年はもの凄く楽しそうに、
「うぉおー！俺の超絶テクニック！」
パンダの遊具を思いっきり動かし始めた。
「凄まじいコーナリング！輝け白黒カラーリング！どんな激しいアールも切り抜ける！」
ネジがサビの軋んだ音を発する。
唖然とした表情をしたあと、その遊具が自分のような幽体では楽しめないと知った彼女は「むぅ！」と悔しそうに唸った。
それを鼓膜で捉えながらも、さらに調子に乗る。
「イグニッション！アクセレレーター！ぐぉぉ～！夜に映える真っ赤なテールランプ！白黒大熊猫のテクニカルな動き、刮目せよ！」
ばるんばるん！
「アクセルターン！うぉぉぉ！俺は風になる！膝擦りパンダ、ぶぅうぅぅ～～～」
「なに、してんの？」

「〜ん……へ？」
バネが揺れる音に混じって、声が響いた。
一瞬、座敷童の声かと思ってそちらをチラ見するが、彼女は無表情で少年の背後を指差すだけだった。
嫌な汗をたらしながら振り返る。
「……」
「公園にいるのが見えたから、寄ってみたんだけど……、あ、えっと、忙しそうだから、ま、またね」
「お、おい、待てっ！」
同じクラスの女子だった。それも割と仲が良い、斜め後ろの席に座る女生徒だ。
いくらテスト休みだからって、同じクラスの生徒に遭遇するだなんてっ！
激しく後悔しながらも必死に彼女に呼びかけるが、
「ごめん、また今度っ！」
そう言って彼女は去っていった。
「……」
首だけ動かし、隣のバイクに腰掛けるリコに向ける。
「我は今、幽体で普通の人に姿が見えぬようになっておる」
「……」
震える唇で呟く。
「うそ、だろ？」
「ほんとう」
公園で、一人遊んでた、変質者……。
あい　は　目の前が　まっ暗に　なった！

4記念日に君と

食卓にはズラリと和食が並んでいた。
いつかの口約通りリコが用意したものだ。彼女の手料理はインスタント食品に慣れた彼の舌を唸らせるものだった。

そんな家庭料理に舌鼓を打った後、2人並んでテレビを見ていた。画面ではお堅い顔したアナウンサーが正午を知らせている。
「あ、チャンネル取って」
「ん」
「サンキュー」
受け取るやいなやチャンネルを変える。この時間帯にしては珍しいバラエティー番組がやっていた。
「わはははは！バカやってら」
「……」
順応という言葉がある。環境に適応するという意味だ。
初めは座敷童という異質な存在に戦々恐々としていたものだが（あれでも）、3日も経てばすっかり慣れたものである。藍にとって座敷童のリコの存在は妖怪でありながら、友達であり、また飯を作ってくれる便利な同居人に格上げしていた。
「のう、」
テレビを指差し腹を抱えて笑う少年に、なにやら痺れを切らしたように座敷童は話かけた。
「我ら、付き合っておるのだろう？」
「んー、じゃねぇーの？」
「互いに恋する仲、で間違いない？」
「そーだな」
視線はテレビ画面に集中していて離れそうもないが、耳は僅かだ

がこちらに向いているらしく適当な返事が返ってくる。
　あからさまな生返事だが、それでも彼女は嬉々として声を荒げた。
「それじゃ彼女にプレゼントとかないのかのう！愛を込めた贈り物みたいなの」
「んー、ああー」
　サンタを待ちわびる子供のように澄んだ瞳をしているリコを藍は見た。
　その表情を確認してから、彼は心底面倒くさそうに呟く。
「プレゼント、ねぇ」
「うむ！男子たるもの、甲斐性はあって然るべきだのう。別に催促しているわけではないが、愛をカタチにするのも愛情表現の一つではないだろうか」
「あーいうのは記念日とかにあげるもんじゃねぇの？誕生月とかクリスマスとか」
「今日で出会って４日記念ではないか」
「毎日がスペシャルなのはいいことだが、いちいち祝ってたらキリがないだろ」
「ああ、ならさっき」
　人差し指をピッと可愛らしく立ててから、それを教鞭のように軽く振るった。
「おぬしが味噌汁が旨いと言うたから、７月１０日はおみおつけ記念日」
「少し黙れ」
「酷い言われようじゃ。
　我の味噌スープ作る手は優しさに溢れておるのに、おぬしの心と懐は寒々しいのう」
「勝手にビンボーって決めつけんな！」
　どこからか取り出したのか、彼は財布を妙な落ち込み方をする彼女に投げつけた。
「なんじゃ」地面に落ちたそれを拾って中を開けて見てみる。

「！」
諭吉がいっぱいいた。
「ななな、なんぞこれ！」
「努力の結晶だ。たまに株なんかで増やしたりするし」
「ギャンブルはよくないぞ！悪銭身に付かず、けしからん！没収じゃ！」
「うるせえバーカ！」
「へぶっ」
かにばさみで彼女を転ばせ強奪されかかっていた財布を取り返し、床にひれ伏す彼女を見下す。
「幸福の座敷童なのに金を欲しがるってなんだよ」
「欲しがってなど、…おらぬ」
ダメージを負った額をさすりながら顔を上げたリコを鼻で笑う。
「嘘つくなよ。目が『¥』マークだったぞ」
「我は大事なことを知っとる！大切なのはお金なんかじゃ、ない！」
「まばたきして目を¥からもとに戻してからほざけ。綺麗ごと言いました、って頭の上に浮かんで見えるぞ」
「う、うむぅ」
唸ってから、二度ほど深呼吸。落ち着きを取り戻してから、
「はぁはぁ、未練がまた一つ増えたわ」
戻ってなどいなかった。
「テメーが成仏しないわけが分かった気がする」
ため息とともにそうぼやいた。

「だ、大体学生の身分でそれだけ金を持つというのは危険極まりない！まったく嘆かわしい！少し分けるのじゃ！」
お金は人（座敷童）を狂わせる。強欲とまではいかないにせよ、さすが妖怪というだけあってなかなか鬼気せまる表情だった。
「本音が出てるぜ」
「ぅ、ぐぬぬ。はぁはぁ。うょし！ダメじゃ、うむぅ！は、はやく

！内なる我を抑えているうちにそれ（財布）をしまうのじゃ！」
「よし分かった、手切れ金だ」
ぴしぴしぴし
「いたっ、いたた、さ、3円じゃ無理！」
デコピンで打ち出されたアルミニウムに少女はたじろぎながら、なんとか口を開いた。
「お金で遊んではならぬ！一銭を笑うものは一銭に泣くのじゃ！」
「なるほど守銭奴は言うことが違う」
「幸福の座敷童は、そのようなセコい存在ではない。守銭奴はおぬしだろう。それだけお金があってプレゼントをせぬのだからな」
「だれもあげないなんて言ってないぜ」
「え、本当？」
「ああ、場合によってはやらんでもない。俺だって初カノジョだし、お前は大切にしたいから」
それを聞いたリコはみるみる耳まで赤くなっていき、恥ずかしそうに俯いた。視線を合わせずらそうにもじもじしているが、彼の言葉を正確にするなら、食料供給元として、である。
「それで何か欲しい物でもあるのか？」
「そ、そうだのう……。例えば指輪とか、そういったアクセサリー」
「アクセサリーか……。んー、あ、ブレスレットなら」
「ブレスレット！欲しい！」
嬉しさを隠すことなく彼女は幸せの息をついた。それから頬を綻ばせ「プレゼント！プレゼント！カレシからのプレゼント～」と変な節をつけ歌いだした。
少年はにこにこしながら立ち上がり、なにやらゴソゴソと押し入れをまさぐり始めた。
「押し入れにあるのかのう」
「ああ。なんだかんだで結構高かったんだ。未開封ではないが、お前によく似合うと思うから勘弁してくれ」
「全然良いよ。むふふ、嬉しいのう。ブレスレット！最初の贈り物

としては上々じゃ。流石は藍、なんだかんだて押さえるところを分かっておる」
「お、あった」
「おおっ！」
「ほらよ」
放りだされたそれを見て彼女は怒鳴った。
「これは数珠ゥゥゥ！」

立ち上がり埃を払いながら少年は彼女の怒りなど露ほども気にしないようすで平坦に言った。
「似たようなもんだろ。数珠もブレスレットも」
「全っ然ちゃうわ！カノジョへの贈り物に法具を贈るバカがどこの世界におる。祓おうとしているのか知らんが、その行為がどれだけ我を傷つけてるかわかっとるのか？」
「っう、悪かったよ」
痛ましい表情の彼女に素直に謝罪を述べていた。
「謝って済む問題ではない、我は著しく気分を害した。よって慰謝料１０００万円を要求する」
「小学生かテメーは！」
謝って損したよ。
「それにしても、こうして見ると数珠もどうしてなかなかキレイだのう」
「だろ？ブレスレットにピッタリじゃないか。去年の法事に使ったきりだったから丁度良いし」
「……女心がわからぬ男よ。いらぬわ、こんなもの」
不機嫌そうに彼女は、ぽいと数珠を投げかえしてきた。
誰かの葬式で使用された物を贈られて喜ぶはずがなかった。
「しょうがねぇなー。だったら欲しくなるような決めセリフを言ってやるよ。愛の告白だぞ」
「ぬ。それなら話は別だ、続けて」

「おう、まず前置きだ」
「うむ」
彼女の頷きを合図として彼はぶつぶつと呟き始めた。
「どうして俺ばかりがこんな目に」
「う、……む？」
「本来テスト休みってのは夏休み前の心のリフレッシュとテスト明けの沈鬱な気分の解消をすべき時間なのにわけわからん妖怪にからまれている間に明日で休みも終わりじゃないか。いくら一週間ほど授業受ければ夏休みだからってこれではあまりに報われない。大体にして座敷童とか言ってるこいつの存在自体がうさんくさい。やはりただの浮遊霊ではないだろうか。だがしかし霊がいただけ奇跡でそれとコンタクトが取れた俺の事を幸運だと、なにも知らぬくせに言うバカもあらわれるだろう。そんな奴に俺は言いたい、なんにせよ俺はまっぴらごめんだと」
「……」
「座敷童は幸運を呼ぶとかいうがこいつが来てから俺は少なくとも不幸だ。風船のようにあちこち彷徨うボヘミアンな友達にあこがれてしまう。キレイなボンキュボンなお姉さんと付き合う夢を断たれた俺がこのアヤカシに数珠というブレスレットとともに贈る言葉は！」
「……」
「ナウマクサマンダバザラダンカン！！」
「愛の告白はっ！？」
不動明王の真言だった。

5怖い映画

日曜日というと一般的には休日とされており、心身を回復させる希望の曜日でもある。

だが、残念なことに藍にとってはテスト休み最終日という憂鬱な日でしかなかった。

休みとしての価値は同じだが、いかんせん、連休最後の日ともなるとその有り難みが薄れる。

また一週間ほど学校にいけば夏休みが待っているとはいえ、その間のカリキュラムがテストの返却というなんともやるせない予定になっているため、朝目が覚めたときから彼の気分は沈みこんでいた。

「気分転換に映画でも借りてくるわ。なんか観たいのあるか？」

レンタルショップのカードを財布に入れながら居間でごろごろする座敷童に話かけた。

昼間から良い身分だな、とは思ったが、彼女にご飯を作ってもらっているため文句は言えない。

彼女は聞くと同時に飛び上がり、彼に一気に詰め寄った。

「我も行く！」

「却下」

あまりの早さで提案が一蹴されたのが気に食わないのか唇を尖らせて、「なぜに」と問う。彼の答えは至ってシンプルだった。

「恥ずい」

「い、意味がわからん……」

口ではそう言いつつも、彼女はその言葉の真意を悟っていた。

「あの公園で俺は誓ったんだ。二度とお前とは外出しない、ってな」

「我は縛られるような生き方はしとうない！日本国民として自由を主張する！」

「そういうのは生きてしっかり納税してるやつのセリフだ！」

座敷童という妖怪がどこに分類されるかは定かではないが、認知されない限り“ヒト”のカテゴリーには入らないだろう。
断固として自分の要求を受け取らないとみた彼女は「ぐむぅ」と昼寝中の猫の腹を押した時のような唸り声をあげた。
「まぁ、あれは悪かったと思うておるし、自重することにしよう。少なくとも反省はしておるんよ」
「意外とものわかりがいいんだな」
「時に身を引くのは乙女の務め。強い包容力が女性には求められとる」
胸はないけどな
「何かいうたか？」
「いや、なんでも。それより何か観たいのはないのか？」
「うむ、我は俗世には疎いから…特にはないのう。藍に任せるよ」
「そうか。あ、ついでに買い物してくるけど欲しいものがあったら言ってみろ」
「そうじゃのー」
そのクエスチョンについての思考時間は一瞬だった。
「バーバリーのスカートやエルメスかアナスイのバック、ああ後ついでにコンビニか本屋寄ってキャスキッドソンのブランドムックを買ってきて」
「俗世にからみまくりじゃねぇか」
「ヴィヴィアンウェストウッドやサマンサタバサも捨てがたいのう」
「俺には不思議な呪文かジョジョ６部の話にしか聞こえねぇよ」
「とにかくブランドならなんでも良いというわけでなくぬしさんが我に似合うと思うものを所望する。数珠とかそう言った無粋なものは除いてのう。そしてそんなブランドよりも、今一番欲しいのは、藍からの愛かのう、なんつって、きゃぁぁ～～！！」
ばたん。彼女の叫び声と玄関扉が閉まるのはほぼ同時だった。
「……」
冷や水をぶっかけられたかのような心持ちになった。

１５分後。

「で？」

「お清めの塩もらって来た」

「だからクリスチャンだって」

帰宅した彼を玄関口で出迎える。藍は夏の暑さで張りついた髪を払いながらサンダルから解放された足の裏をマットにグリグリと押し付けている。

「それで何を借りてきたんじゃ？」

下駄箱の上に置かれたレンタルショップの袋を指差しリコは尋ねた。

「セックスしようとしたらスプラッタにあう話」

「え？」

十三日の金曜日等、有名なホラー映画数本だった。

引ったくるように袋を鷲掴みにすると、彼は浮き足立つような駆け足で居間のテレビにむかった。呆然と立ちすくすリコの横をすり抜ける。

残された彼女は顔を赤くして一人ごちた。

「なんて、ひ、卑猥な」

玄関口の彼女の囁きは、湿った夏の空気に一瞬にしてとけ、誰の耳に届くこともなかった。

「カノジョがおるのにそーゆーのみるかの、普通」

ぶつぶつとソファーに座る彼の後ろで頬を紅くしながら呟く。その問いかけにプレーヤーにディスクをセットしながら藍は面倒くさそうに応えた。

「うるせぇな。小さいころからずっと観たかったんだよ」

「小さなこ、ころから……」

ふらりと意識が朦朧とし後ろに倒れそうになりながらも彼女は「

ま、ませておる……」と呟く。
「よしっ、とセットし終わったぞ。再生っと。……お前も観るか？」
「か、カノジョをそーゆーのに誘うのは、い、いささかいただけんのう」
「そうか。苦手ならあっちで漫画でも読んでな」
「けしからん。まったくけしからん」
口ではそう言いつつも頬を赤らめたまま彼の隣に腰をおろす。その勢いで顔を手で覆ったが、指の隙間からばっちりそのくりくりのビー玉のような瞳が覗いていた。
「結局観るんじゃん」
「い、いや！わ、我はアレじゃ！悶々とした気配に色情霊が寄り付かぬよう注意しとるだけじゃ！」
「あっそ」
彼女の言い訳をよそに映画鑑賞会が始まった。

開始直後、ドキドキと画面を食い入るように観るリコ。洋画とわかった瞬間躊躇いをみせるが特に気にしない。むしろ妙にわくわくと機嫌良さそうに見入っている。
「外人はやっぱり激しいのかのう」
「なんの話だ？」
その好奇心たっぷりの瞳が恐怖で潤むまでそう時間はかからなかった――

終了のエンドロールと同時に停止ボタンを押し、再生機から出てきたディスクをケースに戻す。
「まあまあだったな」
そう感想を述べながら、彼は鑑賞時間で凝り固まった各所の関節を伸ばした。隣には途中恐怖で気を失いかけ、その余韻を未だに引き摺る少女の姿がある。消え入りそうにホラーじゃん…」と呟いた彼女の声に、彼はあっけらかんとした口調で「あれ？言わなかった

っけ」と応えた。
「言うておらん！な、なんじゃこのサプライズ！心臓に悪いではないか」
「お前に心臓あるのかよ」
「そんな言葉尻を捕まえるのはよせ。我は今怒っておるのだぞ」
「はあ、なんで」
怒りで恐怖を誤魔化そうとしているのだが上手く行かず未だに声は震えている。
「そ、それはその、お、おぬしが」
「俺がなんだよ」
「じゃ、じゃかのう。ほら、……な、なんでもないわ。ぼけぇ」
「はあ？意味わからん」
リコは叫ぶと、頭を抱えこんでソファーにうずくまった。
「うぅぅ、夢に出そうじゃ～」
「なんだ。ホラーが苦手だったのか。そりゃ悪い事したな、って――」
「？」
潤んだ瞳で見上げた彼女に向かい藍は精一杯叫んだ。
「てめぇが怖がっちゃダメだろ！！！」
微妙に透けているからか、彼の声が彼女に届いたかどうかはわからない。

「どうしよう……」
「なんだよ」
未だ涙目のまま、この世の終焉を目の当たりにした表情のように彼女は藍に助けを求めた。
「トイレ」
「冷静になって考えてみろ。おかしいから」
そのストレートな物言いに心底を疑問を抱いたように跳ね返す。
「なんで幽体の座敷童がトイレに行きたがるんだよ！大体こないだ

飯食ってる時に『お前の食ったモンはどこに行くんだ？』って聞いたら『アイドルと同じで、天使の羽根になるんよ』って応えたじゃねぇか！」
「……ほら、本屋さん行くと便意を催すじゃろ。それといっしょで心理的にホラーを観ると、のう」
「随分庶民的な妖怪さんだなぁ、おい！おまえ飯は栄養摂取じゃなくて味を楽しんでるだけで、質量は空中分解してるだあーだこーだわけわからん理屈を唱えてたじゃねぇかよ」
　耳に痛い指摘を拒絶するように腕をぶんぶん振って彼女は大きな声で喚いた。
「うぅぅ、そんな理論をこねくり回すより、今は尿意をどうにかするほうが先よ！だ、だけどここから廊下までの道のりが長く険しく感じるんじゃがっ…」
「たかだか１０メートルもねぇだろうが、ガキか？」
「その油断で何人命を落としたと思う。恐怖じゃ。トイレまでの間に化け物が現れそうで……」
「本物の化けモンが何言ってやがる」
「心なしか薄暗く感じる」
「日当たりの問題だ」
　彼の言っている事は確かだ。ちょうどトイレが日陰になるような間取りになっているのである。
「……ついてきて」
「はぁ？」
　小さく消え入りそうな声で彼女はボソボソと呟いた。
　その音の振動をうまくキャッチできなかったらしく、彼は首を傾げながら彼女を見た。
「ついてきて！」
「やだよ」
「後生だから！」
「お前の後生ってなんだよ！？」

突っ込みを無視してリコは続ける。
「ちょっとの間だけ！ドア前でいいから、ねぇ。一生のお願い！」
「一生って……。なぜ俺がそんなガキのお守りみたいなことしなきゃなんねぇんだよ。そもそも妖怪のてめぇがなんでお仲間を怖がるんだって……」
「ついてこい！！！」
□■□■□■□■□■□■□■□■
「ぅ、あ……ぅ、」
彼ははじめて自分の声にならない声というのを聞いた。

藍はWCとかかれた扉の横で、少女が用をたすのをぼんやり壁によりかかりながら待っていた。
力に屈したわけじゃないっ！これは言わば未来への布石！恐怖で俺を支配できると誤った認識をあの化け物（リコ）に与え、油断しきったヤツの喉元にくらいつくための、下準備！

ようはヘタレだった。
自分を励ますように甘い言葉を分泌するのはいいが、これでは肝心の主導権が向こうに握られっぱなしである。
カカア天下ってやつか？いや、尻に敷かれているだけか。
それが彼の悩みだった。
（それにしても、……あいつが用をたす、って……。何を）

「お花を摘みに行ってくる」
「なぜ今更隠語をつかう？」
鼻歌混じりに便所に入る前、こちらをふりかえったリコの「覗くなよ？」と念を押され、「覗かねぇよ！！」と怒鳴り返したはいいが、妖怪座敷童の生理現象が果たしてどのようになっているのか、興味がわかないわけではない。
彼女と過ごしたこの五日、リコは雀のような飲み食いをするもの

の、尿意を訴え便所に足を踏み入れたのはこれがはじめてである。
「……」
のぞくか？
いや、
それをしたら本格的な変態ではないか。
不埒な考えを振り払うように頭をぶんぶん回して、別のことに思考を埋没させることにした。
ホラー映画、
を怖がっていた、座敷童の少女、リコ。
「……ちっ」
癪なことに、肩をガタガタと小動物のように震える彼女を可愛いと思ってしまった自分が少し許せない。
「だいたい怖がるのがおかしいだろ。ホラー映画の題材はあいつら、だってのに」
げすな思いを吹き飛ばすよう、わざわざ呟いた。
「でもまぁ、妖怪の中には誰彼かまわず脅かそうとする無鉄砲なバカがいんのかもしれないなぁ」
おぉ！物事を多角的に見れる俺って大っ人ー！
と、自画自賛した時、
ぬっ、
ドアを開け閉めすることなく投影された光の筋みたいに用を済ませたらしいリコが現れた。
「……」
「おまたせ」
そのイリュージョニストを超えた壁ぬけという超常現象に、
「お前のことだ」と彼はコメントするだけだった。
「何が？」
「なんでもねーよ」
再認識させられた妖怪と人間の狭間に、吐き捨てるようイライラをぶちまけた。

6蛇な死神、来訪者　前

ピン、ポーン

太陽は沈み、夜の始まりの夕闇に玄関チャイムの音がはじけたように鳴り響いた。

トイレの前から居間に戻ろうとしていたそのタイミングでの来訪者。

回覧板かなにかだろうか。

首をひねりながら、催促するように再び鳴らされたチャイムに「はーい」と返事をしながら、玄関に向かう。

「我が出る！」

彼を追い抜きリコが足を早めて扉によった。藍はそれを慌てて止め、引き寄せる。

「まて、バカ。お前が出たらマズいことくらい分かるだろ？」

「むぅぅ」

「大人しく塩でもつまんでろ」

「あれ、塩ってつまむものだっけ？」

彼女の抗議するような視線を無視して、藍は玄関扉を歩みを進めた。

ピン、ポーン

ピンポーン

返事をしているにも関わらずチャイムはしつこく鳴らされていた。音が空気を切り裂く度に、藍はイライラとした気持ちを積もらせ、扉向こうの人物に拳を浴びせたいと思うようになっていく。

ピン――

ドアノブをひねり、戸を開くとともにしつこい催促に対する拳代わりの文句をぶちまけた。

「はい、どちら様でしょうか。何度もチャイムを押されると正直、

迷惑なんス――」
ドアの向こうに、
美女、そう形容するしかないような流れるような長い黒髪の端正な女性が立っていた。
うぉぉぉ！まじで誰だこの人！？こんな美人、今まで見たことないぞっ！し、信じられん！半端ない美女がなんでうちの扉を叩くんだっ！？
リコが現れた時とは比べものにならないほど、彼のテンションは上がっていた。それほど好みの顔立ちをしていたのだ（おもに胸の）。
つうかマジタイプだぞ！どえらい美人じゃん！こんなにスタイルよくてっ、……え？
足フェチらしく視線を彼女の脚部に視線を落とす。そこには本来あるべきものがなく、
大蛇の尻尾のようなものが蜷局を巻いていた。

……な、なに、これ、ば、化け物？
一気に沸点が下がった彼の脳は、その代償にパニック物質を大量に分泌していた。
そんな思いを置いてけぼりにするように、どこか気品漂う仕草で、チャイムのボタンにつけていた人差し指を放し、
――ぽーん、
という音とともに来訪者の人外の美少女は呟いた。
「指を放すとポーンと鳴るの。おもしろいわね」

「どどどどちらさまでしょうか？」
どことなく愛嬌があった座敷童の登場とは比べものにならないほどの恐怖から、つっかえながらもなんとかそう問う。
目の前にいる人物は、眉目秀麗ながらもほぼ間違いなく人外である。仮装でもしてるのかとも思ったがハロウィンでも文化祭でもな

い夏の夕暮れに、下半身だけ３Ｄ映画の怪物のコスプレをする云われはないだろう。
「うるさい、豚。うがいして来てくれないかしら。口臭が酷いわ」
豚っ！？今豚って言われたかっ！？俺！？つうかその後にも随分酷いこと言われたぞ！
切れ長の強い瞳での訴えに混乱を極める彼の横を、さも当然のように現れた蛇の尻尾をもつ少女は、足代わりのそれを波立たせ、優雅に通り過ぎた。
「って、ちょっとまて！なに当然のように家に上がってんだ！」
慌てて彼女の肩を掴む。普通の女性の肩だ。どうやら異質なのは下半身だけらしい。
なんとなくホッとしたがそれも一瞬だった。
「たかだか豚ごときがぜ私の肩に手をおくの？大概にしないと本当にト殺場に連れて行くわよ」
「ぶ、ぶたって、おい！てめぇふざけんなよ！いきなり現れて何様のつもりだ！」
「あなたにいちいち行動の許可を取らなきゃいけない社会になったらこの世界は崩壊するわね。あ、それと顔近づけないで、目が腐る」
「がっ、この、クソアマ…っ！」
怒りに我を忘れて握りしめた拳を彼女に浴びせようかと思案しはじめた時だった。
「あっ、来てくれたの？」
ひょこりと奥に引っ込んだはずのリコがリビングから顔をだした。
「私がリコの頼みを無視するはずないじゃない。どう、うまくやってるの？」
「ぼちぼちかのう」
昔馴染みとの会話に花をさかせるよう、藍を対岸に置き去りにしたまま彼女たちは楽しそうな声をあげた。
「しばらく連絡なかったから心配してたのよ。こまめに報告してって頼んでたじゃない」

「うむぅ。すまない。ついつい忘れて……」
「まあいいわ。ここが今リコが住んでる家？」
「うん。なかなかの住み心地じゃよ」
「おい、ちょっとまて」
すっかり置き去りにされたままだった少年は、玄関の開きっぱなしになっていたドアを閉めながら二人の少女に向き合う。
「誰だよ。そいつ」
バタンとドアが閉じる。
「おお、そうじゃまだ紹介してなかったの」
明るい声をあげ、リコは隣の蛇の尻尾をもつ少女を指差し、彼女の代わりの名前を告げた。
「彼女の名前は　あやめ。我の友達じゃ」
「どうぞよろしくお願いします。あやめと申します」
にっこり。
見るものをとろけさせるようなダイナマイトスマイルにぴったりな丁寧な自己紹介を彼女は告げた。
「……おい、さっきと態度が随分違うな」
散々ブタだなんだと罵倒されてきた彼は、あやめが急に殊勝な敬語に言葉を切り替えたのに、多大な違和感を覚えた。
「何をおっしゃってるのか意味がわかりませんわ」
「とぼけるのか。そーか」
「？」
二人の間に無言の火花が散っているのにリコは気づかぬまま、あやめに向けていた指を今度は藍にむけた。
「そしてこっちが我のカレシぃ（語尾あがる）の藍じゃ」
「まぁ、ウジ虫さんとおっしゃるの！素敵なお名前ね！」
「おいちょっとまて！わざとだろ！ぜったいわざとだろ！それ！」
彼の突っ込みをあっけらかんと無視してリコはあやめにけらけらと伝えた。
「もぉう、藍って名前だってばぁ」

「あら、聞き間違えてしまったみたい」
二人合わせてうふふ、と笑いあっているのを見て、彼は密かに頭を抱えた。

この下半身は蛇の胴体をしたあやめという少女はリコが呼んだ客人らしい。仕方がないのでリビングにあげ、リコを問い質すことにした。
「それで、そのあやめさんがなんで家主の俺の許可なく遊びに来たんだ？」
「だぁてぇ……」
語尾を中途半端に延ばし、質問を受けた座敷童はぼそぼそ続ける。
「一人で寝るのがの、その、……ねぇ、いや、こ、怖くはないんだけど」
「ああ、そう」
チラリとテーブルの上に置きっぱにされたレンタルショップのロゴの入った袋を見て彼は全てを理解した。
ホラー映画みて、まだビビってやがるのか。
「藍に添い寝を頼んで襲われるのも困るしのう」
「襲わねぇよ！」
つうか幽体じゃすかすかして無理だよ！
「一人で居るのも寂しいから、友達を呼んだんじゃ」
「俺の許可なく勝手に客を招いたのは百歩譲って許そう。だが気になることがいくつかある」
ビシっと人差し指を向けて彼は言い放った。
「いつこの女を呼んだんだよ！どうやって呼んだんだよ！テレパシー能力でもあんのか妖怪には」
「そんなものないぞ」
「んじゃどうやってこの蛇を家に呼び寄せた？日が沈んだから口笛でも吹いたのか？」
「違うわ。トイレの中で電話しただけじゃ」

「で、電話っ！？」
予想を斜め上いく答えに我が耳を疑う。
「け、携帯のことか」
「うむ」
頷いて彼女は懐から電卓を取り出し彼に見えるようヒラヒラ揺すった。
「……いや、もういいや、なんでも」
彼女にとっては電卓にしか見えないそれが電波を帯びた携帯電話の代わりらしい。
「いやぁ、とにもかくにもあやめを持てなさなくてはならないのう。ちょっとまってて、今おいしいもの作るから」
「俺はキレていいよな？」
明るく元気にキッチンへとリコは駆けていった。
後には、初対面の二人が残される。微妙に空気が重かった。
「ねぇ豚さん」
「さっき名乗りましたよね？俺の名前は藍です。いいかげんにしねぇと追い出すぞこのやろう」
「あら短気は損気よ。ド低脳のクサレ脳味噌で容量が有り余ってるんだから、そのくらい許容しなさいよ」
「てめぇクソアマ！わざとやってるだろ！」
「口が悪い人ね。顔も悪いし頭も悪い。良いとこを見つけてあげたいんだけど……、ごめんなさい」
「謝るな！」
初対面でズケズケと振るわれる言葉のナイフに血管がブチ切られそうになる。
「それはそうと、藍」
「いきなり呼び捨てかよ」
「ゾウリムシって呼んだ方が良かったかしら？私的にはゾウリムシがベンジョコオロギの二者択一なのだけど」
「藍で」

「そう。藍。部屋は汚い割には綺麗にしてるじゃない」
「どっちだよ」
彼女は一回小さく息を漏らすと、続けた。
「さっきの話に戻るけど、もしリコのか弱い身体を襲ってみなさい？あなたの股間の貧弱なソレをひねり潰してあげるから」
「だから襲わねぇてッ！」
なんなんだよ、この蛇女は！彼のイライラ度はこの数ヶ月で限界点を突破した。ただいま記録更新中だ。

蛇な死神、来訪者　後

リコが用意した夕食を三人で囲み、寿命間近なブラウン管を見ながら藍はこの認めたくない現実に対して口を開いた。
「まさかお前に友達がいるとは……。それでなに、そいつも妖怪なの？」
「ちゃう。あやめは死に神じゃ」
予想を斜め上いくまさかの答えに箸を落としそうになる。
「……し、死に神？あ、あれじゃないんスか？歳とった蛇が妖怪化して蛇女ー、みたいな妖怪」
「えぇ、確かにそう言った存在に近いですね」
二人の会話にわって入るようにあやめが声をあげた。
「私の目的はヒトの魂を狩る死に神ですが、もともとは一介の蛇妖でしかありません。気がついたら死を司る眷属になっていたんです」
「……なに言ってんだかよくわからないや」
「もっと詳しく知りたいですか？知れば二度と戻れなくなりますよ。私としてはそれでもいいんですけどね」
「遠慮しときます……」
「あら、残念」
クスクスと不敵な笑みに藍はぞくりと鳥肌をたてた。
その目は確かに狩人のそれだった。その瞳にたじろぎながらも、明確な意思を持って自分の思いをぶちまける。
「俺としてはよ。おたくらが何しようとどうぞご自由にって考えてんだ。俺に関わらなければいくらでも好き勝手してくれて構わねぇよ」
煮魚の身をほぐり出し、口に運ぶ。ほんとリコは料理だけは上手いな、と思った。
「俺の視界の外で、ならな」

「もぉう、なに言うておるんじゃ藍？おぬしは我のカレシじゃろ」
「都合がいいときだけその設定出すなよ。俺の魂は最後まで俺のモンだ」
「設定、って……。なんだか妙に高尚な話になっておるのう」
ぽりぽりと頭を掻きながら彼女は呟いた。
「うるせぇ。兎にも角にもその蛇女を泊めるのは今日だけだから。それ以上は認めん」
「心の狭い人ね」
「お前こそ帰る家があるんだったらそこにいけ！」
柄にもなく熱くなった言葉が自然と口をつく。
「私に命令しないでくれません。不愉快です」
「宿を貸りる側とは思えんふてぶてしい発言だ」
「敬意は払ってますよ。だから敬語なんです。魂を狩る者としてどんな虫けらでも尊敬の念は持つことにしてるんです。あ、いえ！まさか藍さんが虫けらだとは言ってません！」
「……」
「そんなことしたら一生懸命生きてる虫に失礼ですもの」
「っだと思ったよ！」
オブラートに包まれた言葉は正味、口から火がでるほど激辛だった。

三人で囲む食卓は言葉が絶えることなく（主にあやめから藍への罵倒の言葉だが、リコは無邪気な様子でそれに気づいていないようだった）、終始賑やかではあったが、食事が終わる頃には藍のメンタルはボロボロになっていた。
「それじゃあやめの布団だしてくるのう！」
「なんで自分ちみたいに振る舞ってんだよ……」
藍の呟きを無視してリコは布団がある押し入れに向かった。それを待ってましたとばかりにオブラートがなくなった言葉のナイフが彼に襲いかかる。

「おい豚」
「ついに敬語でもなくなったよ！」
「私だってあなたを敬いたいとは思うんだけど、どこをどう取っても尊敬できる所がないんだから仕方ないじゃない」
「豚ってなんだよ！さっきまでちゃんと名前で呼んでたじゃねぇかよ！」
「あだ名よ。あなたの」
「俺と豚のどこをどうとればあだ名になるんだ！」
「あ、私としたことが身体的特徴をおおっぴらにしすぎたわね。それは失礼したわ。これからはあなたの精神面を考慮して毛ジラミと呼んであげる」
「お断りします！」
もう彼女の揶揄に反論する気がなくなってきていたが、かといって止めれば、それはそれで問題である。
「あなたとリコはほんとに付き合ってるの？」
肩にかかっていた長い黒髪を一回パサリと後ろに払って、彼女はどことなく真剣な表情で藍に尋ねた。
「ああ、らしいぞ」
「らしい、って……。なによ」
「なにと言われても。1ヶ月だけの関係だし、一応恋人とはいえ、そこまで深い関係ではない、というのが正直な話だな」
「調子に乗るなよ。愚図……！」
「っ」
罵倒の言葉が、凝り固まって一つの刃になったかのように、鋭く空気を切り裂いた。
今まで彼女が悪口を言う時、ここまで空気が張り詰めたことはない。
蛇に見こまれた蛙、

彼の脳裏にことわざが掠めた。
「恋人を幸せにする覚悟もない下郎があの子の隣に立つことが許されると思って？」
ビリビリと空気全体が静電気を帯びたみたいに彼の皮膚に突き刺さる。
「し、知るかよ。いきなり告白されて、間違ってＯＫしちまっただけの話だよ。お互い妙に勘違いして納得しちまったが、考えてみればおかしな話だ」
「ミカズキモ、それ以上口を開かないで。光合成も出来ない体にするわよ」
「ハナから出来ねぇよ！！」
「七歩いかぬ内に締め殺してあげようかしら」
あやめは藍の肩に手を回し至近距離で彼を睨みつけた。
つり目がちでとても魅力的な視線なのだが、今は恐怖しか感じられぬ冷たいものだ。
「ぉ、おい」
あやめは耳もとで蠱惑的に囁く。
「下らない劣情でリコを傷物にでもしてみなさい。あなたのつま先から順に輪切りにして額に入れて飾ってやるわ」
「だから出来ねぇって！」
あいつの下半身透けてるだろ！

「な、なにしておる！」
緊迫した空気をほぐしたのは布団を敷き終わったらしい座敷童の少女だった。
「人のカレシに手をつけるなぞ、いくらあやめでも、許されることではない！藍も藍じゃ！女となれば見境もなく手を出すなんて！」
「出してねぇし、出せねぇよ！」
こいつ下半身が蛇だろうが！
「落ち着いて話を聞いて、リコ」

体を藍から離し、先ほどまでとは打ってかわった優しい口調で、あやめはリコにうそぶいた。
「フォークダンスの練習よ」
「え？」
「私がこんなチンケな貧乏面を狙うハズないじゃない。死神界夏の大運動会に備えて訓練してるの」
「藍はチンケでも貧乏でもないぞ」
「あら失礼。言い過ぎたわね。私の趣味は少なくとも平均より上の顔立ちだから、はっきり言って藍さんは好みじゃないの」
その発言はどんなストレートな物言いより地味に彼の心臓を抉った。
「なるほど、それは確かにそうじゃのー」
「そうでしょ」
ウフフと再び声を揃えて笑いだした二人に、藍はさらに傷つけられる。
もう勘弁してくれ……
彼のライフポイントはゼロを突き抜けマイナスに向かおうとしていた。

「と、いうわけでおやすみ」
「おやすみなさい」
「一生目覚めないくらい深い眠りについてください」
「……」
二匹の妖怪と分かれ、肩をぐりぐり回しながら床につく。
ベッドは聖域だ。いかなる不浄のものを寄せ付かない。万年床の免罪符を得た夜船は、下界のアヤカシとの世界に明確な線引きをしてくれる。
少年は瞳を閉じる前、明日の日程を思い出す。休み明けの「起きれるかな」という不安と5日ぶりの友人との再会の期待が胸を包みこんでいる。最後に携帯のアラームが入っているかを確認しなおし、

微睡みの世界に足を突っ込むことにした。
「……」
眠れない。寝返りをうつついでにベッドの端に視線をやる。目を開けたのはたまたまだったが、その偶然に彼の眠気は完全に吹き飛ぶことになった。
「……！」
目を見開く。リコとあやめの顔が、ベッドに顎をのせ並んでいた。
「なっ、なんなんだテメーらっ！」
「あ、バレた」
「撤収ッ！」
毛布をはねのけ、上半身をガバッとあげる。リコとあやめの二人は、部屋から出ていこうと彼に背中を見せていた。
「おいリコ！」
「な、なんじゃ」
慌てて呼びとめる。振り向きはしないが、足は止めてくれた。
「テメーが手に持ってるマジックペンはなんだ？」
「ま、マジック…なんのことかのう」
「とぼけんな」
見えてはいないだろうが、彼女の右手を指差して、背中に向かい声をあげた。
「しっかりペンを握ってんじゃないか」
「こ、これは、その、ま」
まごまご、と呟く。
「ジマックックッジママックジマジック～」
「なんだそれ。そんな変なこと言っとけばごまかせると思うなよ」
「……」
「テメー落書きしようとしてただろ？」
「……」
しばしの沈黙の後、リコは堰を切ったように喋りだした。

「け、けっしてそのようなことはない！友達が泊まりに来て修学旅行のようなテンションになり、つい寝ている人にイタズラしよ～、なんて気持ちになぞなっとりゃせんぞ！」
「ふざけんなよ。俺明日から学校が再開すんだ……もしその顔で登校したらどうするつもりだよ」
「うっ。まあ、ご愛嬌、かのう」
「はぁ。まあ気づいたから良かったけどよ。ちなみに何を書こうとしてたんだ？」
「なぁに大した事はせん。瞼の上に目でも書いて、寝ているけど起きてるよ状態にしようとしただけじゃ」
「まったくなんてベタな……」
頭を軽く抱える。
本当に気づけてよかった。
「うう、すまない。世界まるみえ風に言うと、もう二度とこんなことはしないよー、ってやつだぜ」
「なあんか白々しいなぁー」
「まぁ、ごめんなさいーなのじゃー」
反省の言葉をくるりと振り返りかわいらしく述べたリコにため息は止まらない。
「そっちの人はどうなんだよ」
未だに振り返りらない蛇女こと、あやめに呼びかける。
「私はほっぺに『童貞』と書くつもりでした」
「違う。そんなん聞いてない。謝罪の言葉を寄越せ」
つうかそれ地味にダメージでかいな！
「未然に防止したんだからそれでいいじゃない。心の狭い人ね」
「……もうなんでもいいよ。寝させてくれ」
しっしっ、と追い出すよう手首をぷらぷらさせる。「はーい」と元気に声をあげリコは駆けていった。
「おやすみなさい。藍さん。よい眠りを」
「ッ」

あやめもそれに続く。
手にもった刃物をちらつかせ、部屋から出ていった。光源もないのにキラリと光ったサバイバルナイフに冷や汗が走るよう全身から噴き出す。
「洒落になんねぇよ……」
小さくぼやいて、恐怖を包みこむよう毛布を頭から被る。
あした
すこし早く家をでよう……
今なら目覚ましより早く起きれるだろう、彼はぼんやりそう考えて、微睡みの世界の扉を叩いた。

7朝から

鳥の鳴き声とともに朝日が部屋に差し込んでいた。

テスト明けの成績会議は終わり、今日からはまた何時も通りの日常が始まる。

またすぐに夏期休暇に入るのでしばらくの辛抱であるが、関節に溜まった空気のようなストレスは抜けきっていない。

朝を迎えケータイのアラームを無意識のうちに止めた少年は、

「最悪な目覚めだ……」

まだ眠気が残る目をこすり、上半身を起こした。

身体を包みこんでいた毛布はベッドから落ちていて、

昨日の寝入る前の延長線が、瞼をあけた世界に広がっていた。

「なにしてらっしゃるんですか……？」

「去勢」

「……えーと、蛇女？」

どこから取り出したのか高枝切りばさみが入り口からヌッと伸びていた。藍の秘部にむけ、照準を合わせられている。

それを蹴り飛ばし、転げ落ちるようにベッドから飛び出した。

「なにすんじゃー、貴様ァッー！」

ドアを開け、遠くに転がった高枝切りばさみを引き寄せるあやめに叫ぶ。

近くでやる勇気がなかった彼女は先がハサミになっているそれを利用したのだ。

「だから去勢」

「朝っぱらから恐ろしいこと抜かしてんじゃねぇ！ふざけんな、ギャグになってないじゃないか」

「私はいつでも真面目よ」

「警察沙汰だ！」
「人ではないから法律には縛らない」
「常識には縛られろ！」
祈るような怒鳴り声を無視して、再び向けられた高枝切りばさみをまた蹴り飛ばす。
「なんでそんなことされなくちゃなんねぇんだ！
お前は俺をまるで犬みたいに扱うんだな！」
「そんなことないわ。私犬は好きだもの」
「……」
「出来るだけ楽に逝かせてあげようと寝込みを襲ったのに、目が覚めてしまうだなんて……。残念だわ。痛いけど我慢してね？」
「ナチュラルに殺そうとすんな！」
眠気はすでに彼方へ消えさった。代わりに倦怠感が訪れている。
「別に構わないじゃない。虫ケラ如きがなにゆえもがき生きるのかしら？」
「は？」
「滅びこそ我が喜び、死にゆく者こそ美しい！」
「……」
「さぁ、我が両腕で息絶えればいいわ！」
「まるで大魔王のような風格だ！！」
メドローアの構えを取るあやめに半ば泣きそうになりながら、懇願するように藍は怒鳴りちらした。
「勘弁してくれ！なんでそこまで嫌われなくちゃなんねぇんだ」
「あなたが下賤な人間の……あっ、豚のオスだからよ」
「言い直すな」
「家畜風情がリコと釣り合うはずがない」
至極キッパリと彼女は言い放つ。これにはさすがにカチンときた。
「うるせぇな。当人の勝手だろうが。あの座敷わらしの心を完全に知ってるわけじゃねぇだろ、てめぇも」
「当たり前のことをしたり顔で言うのは止めてくれない？アメリカ

シロヒトリ如き下等生物が高説たれるなんて、ヘソで茶がわくわ」
「蛇にヘソはないだろっ！」
アメリカシロヒトリとは桜の木などにつく蛾（の幼虫）である。外来種で帰化生物だ。害虫と認識されている。
「大体なんでそこまで俺とあいつに構うんだ？友達の情事を邪魔するなんて最悪じゃないか」
「じ、じょーじ…」
顔がカメレオンが擬態を開始したように一気に真っ赤に染まる。飄々としたあやめのイメージとはかけ離れた現象に、彼は驚き言葉をなくした。
「やっぱり身体目当てじゃない！」
限界まで赤くなりおえたらしい彼女は彼の股間をびしっと指差して叫んだ。
「まて言い方が悪かった！情事じなくて恋愛！超プラトニック！」
「黙れ！リコと生殖活動に励めなくなるようにしてやる！」
「だから出来ねぇって！」
何度も言うようだが、彼女は幽体であり通常下半身は透けている。そのまま「しゃきーん、しゃきーん」と目を光らせるあやめと部屋の中をドタバタと追いかけっこが開始した。

「あやめぇー、藍は起きたかのう？」
キッチンから舌足らずな声が響いた。それにあやめはピタリと動きを止め返事をする。危険行動とる一歩手前だった彼女の瞳は少しだけ穏やかになった。
「ええ、今連れてくわー」
「うむ、もうすぐ完成じゃからー」
辺りに朝餉の良い香りが漂っていた。鼻を優しく刺激する匂いから察するに、今日の朝ご飯は和食らしい。
「……飯か」
呟く。藍と目を合わせずスタスタと食卓に向かいながら彼女は言

った。
「リコに感謝して食べなさい」
「もちろんするさ。食材は俺持ちでも作るやつがいなきゃ腐らすだけだからな」
蛇女に対する怒りを空腹でごまかし、リコが用意する食卓についた。

「はい、完成！」
「うぉー、美味そうじゃねぇか」
「むふふ、そーじゃろ、そーじゃろ！料理の本を読むのが趣味じゃたからのう」
「変わった趣味をお持ちで。でも、まっ、腕は認めざるを得ないな」
リコの手料理を前に、手を合わせて「いただきます」と三人で声を合わせる。それからつやつや光るご飯を口に含み、2、3度頷く。
お米を炊けば誰でもご飯を作れると思っていたが、そうではないらしい。作り手によって味は微妙に変わる。現に彼が作ったときは、水分が少なかったのか、固くなってしまった。
調理の際の調整は、素人が何も見ずに出来るものではない。
味に満足しながら、料理人にであるリコを誉めるように視線をチラリとよこした。
「はい、あやめ」
「わぁー、ありがとー」
ん？
あやめはリコから何か白いものを受け取っている。
あれは、卵、……ゆで卵か？
よくよく食卓を見れば料理は藍の丸々一人分とリコの分である料理が少しだけ乗せられた小皿しかない。
妖怪は少食なのか、知らないがあやめは茹で卵だけな、の……

「なっ！？」
あやめは手に持った卵の殻を剥かずにそのまま丸呑みしていた。
連続三個。
「なん……だと……」
「ん、どうしたんじゃ？」
「いや、なんでもない、俺は何も見ていない」
「？」
生卵、……蛇だもんなー。
彼は泣きそうになりながらも、芳しい香り漂う味噌汁をすすった。

「そんじゃ学校行ってくる」
「うむ、いってらっしゃい」
手をふる二人に見送られ、登校への一歩を踏み出す。
このまま遠くに行きたい……
朝から続くメランコリックな気分に変化は訪れなかった。

8梅雨の終わりとクラスメート

「いってらっしゃい」
藍を見送った二人は玄関で顔を見合わせた。世帯主がいなくなり、あとに残されたのは二人の居候である。
「なにして遊ぶかのう？」
両親が不在になり、留守番を楽しむ子供のようにキラキラとした瞳で座敷わらしことリコは死に神あやめに尋ねた。
「そうね」
涼しい顔であやめは靴箱の上に放置された青い袋に視線をやる。
「それは？」
「え…」
レンタルショップの袋だった。中はぎっちり藍好みのホラー映画。
「……」
「……」

鑑賞会スタート！
「ギャァァぁ～」
テレビの前から逃げ出そうとするリコをあやめはがっちりと捕らえ、嬉々とした表情でオープニングを眺めはじめた。

そんな一悶着があることを知らない藍は、学校へと到着していた。からっとした暖かい風が教室に爽快感を運んでくれる。一足早い夏の到来を予感させるそんな長期休暇前の登校日。
授業を受けるため、自分のクラスに足を踏み入れた藍は、見知った顔を見つけ久しぶりの再会に声を弾ませた。
「よう、白江。はよーす」

「おはよう」
「珍しいな。お前が連休明けに真面目に学校来るなんて」
「んー、まぁね」
肩を叩いて友達である白江藤吾（しらえとうご）と朝の挨拶を軽く交わし、彼が座る一つ前自分の座席に腰をおろす。
「うかない顔してどうしたよ？」
鞄を机の側部についているホックに引っ掛けると同時に顔だけを白江の方に向けてそう尋ねた。
友達の彼の表情がやけに曇っているように感じたからだ。
「本当は今日も休みたかったんだ」
「はは、流石だな」
白江藤吾は休みがちな生徒である。見た目の清潔さから、しっかりしたような印象を持たれやすいのだが、その実欠席を繰り返す変わった人物として担任を悩ませていた。
「ところがそうもいかなくなったんだ」
「ん？なんかあったのか」
体を藤吾のほうにひねり尋ねる。
「うん。電話が来てさ」
「……まじで？」
彼は沈鬱そうに一度頷いた。
電話というのは期末試験の成績が悪かった、俗にいう赤点を取ってしまった生徒の自宅に、教師から補講に出るようにと連絡が行くことだ。
「テスト酷かったのかよ」
「いや、試験自体は悪くなかったんだけどさ」
しょんぼりと彼は続けた。
「出席日数がヤバいらしくて」
「あー、なるほど」
「このままじゃ正直危ないって、先生が」
「お前マジで休み過ぎだったもんな。アレで単位をゲットされるん

だったら俺みたいな真面目な生徒はどうなるんだ、って話だ」
「橘だって結構数休んでたじゃないか。はぁ、それにしても面倒なことになったよ」
やれやれと肩をすくめた。漫画の中の表現のようだが、藤吾がやるとやけに様になっている。
「補修には参加したのか？」
詳しい日程はわからないが、赤点をとった生徒を対象とした補修は先日までの試験休みの間に行われる予定だった気がする。もしかしたら7月中だったかもしれないがそこらへんは記憶があやふやだ。
「いや、補修じゃなくて、講習に参加しなくちゃいけないみたい」
「ん？なにが違うんだ？」
「今日あたり連絡があるんじゃないかな。なんでも夏休み中、駅前の塾講師を招いて夏期講習をやるんだってさ。僕はそれに晴れて強制参加ってわけ」
「はは、ご愁傷様」
「自由参加らしいから、橘もいっしょにどう？きっと有意義なモノになると思うけど」
「なんで夏休みまで勉強しなくちゃなんねぇんだよ。宿題だけで充分だっちゅの。そーゆー受験対策は来年からやるって決めてんだ」
中学から高校に上がりようやく受験の呪縛から解放されたのだ。しばらくはのんびりしていたい。
高校一年生である彼の自堕落なスクールスタイルであった。
「いいじゃん別に」
「ヤダよ」
「なんでさ」
「なんでって、」
そんなの面倒くさいからに決まっている。
しかし口に出すのは忍びなかった。
「ダルいからに決まってんだろ」
理由を考える方が面倒だった。

「なんだよその理由ー。やってみようぜ。絶対将来プラスの経験になるって」
「時間の浪費こそ下らないね。どうせ金かかんだろ。それ」
「いやいやなんとっ！」
そういって彼は机をトンと叩いた。
「今なら一科目の参加費用がいつもよりお安くなっております！」
「やっぱ金とんじゃねぇかよ！」
藍は珍しい藤吾のボケにつっこんだのだが、指摘を受けた当の本人はどこかきょとんとした様子になった。
「もしかして予定とかある？」
「ああ？」
「確か7月の夏休み入ってからすぐ夏期講習なんだけど、なんか用事でも重なったのかな、って思って」
「いや、特に……」
言いかけて、咄嗟に言い訳が浮かんだ。このまま藤吾と会話していたらいつの間にか乗せられて講習に参加してしまうかもしれない。彼は口が上手いのだ。
「あ、りょ、旅行に行くわ」
嘘をついた。
藤吾相手ではいつか自分が折れてしまいそうだったし、話を早々に切り上げたかったのだ。
「あ、そうなんだ」
「と、いうわけだから、俺は無理っす」
ってことにしといてくれ、と心の中で付け加える。
「どこいくの？」
「えっ……」
言及してきた。
藍は一瞬だけ思案する。
リコが昼間ゴロゴロと見ていた韓流ドラマが浮かんで来た。
「か、韓国に、ちょっと」

「へー、いいな。橘ってパスポート持ってたんだ」
「お、おうバリバリだぜ！韓流が『かんりゅう』ではなく『はんりゅう』って読むことくらい知ってるぜ！」
「なに言ってんの？暑さで頭がいかれたか」
「失礼なやつだな」
パスポートなぞ持っていない。もしかしたら3歳の時にハワイに行ったと親が言っていたのでその時のがあるかもしれないが、とっくに期限が切れているだろう。
「誰かと一緒に行くの？」
「あ？」
な、なぜ質問責めに合わなくてはならない。
もしや嘘だと気づいたか。
藤吾の瞳をじっと見てみるがそんな感じはしなかった。純粋な興味からだろうか。
「あ、えーとな」
さてなんと答えようか。
一瞬ニコニコ笑う座敷わらしの顔が脳裏を掠めたが、気づいてないフリをした。
「家族とな」
「ふーん」
それきり彼は黙りこんだ。なんとか納得してもらえたらしい。ほっと安堵の息をつく。

「おはよ！」
「わっ」
白江の身体が大きく揺すれ、後ろからひょっこり女の子があらわれた。同じクラスの女子である五十崎柚（いかざきゆず）である。
げっ
心の声が表に出そうになってしまった。いつもなら彼女の整った顔立ちをずっと眺めていたいのだが、今はそんな気持ちになれない

わけがあった。
何を隠そう、公園での珍事を目撃していた同級生は五十崎なのだ。恥ずかしすぎる。
必死に平静を装うが、頭を抱えたいという衝動を止められそうにない。
「あ…」
「お、おう」
「橘も、お、おはよう」
「おはよ……」
「……」
「……」
わいわいと白江と絡んでいた五十崎は、藍と目が合うと気まずそうに言葉を濁した。その反応だけで、少年の羞恥心を煽るのは充分である。
そんな二人に囲まれた白江はきょとんとしながら、二人を交互に見交わした。
「二人ともどうしたの。なんか中途半端なお見合いみたいになってるけど」
「あ、えーと」
藍が必死の言い訳を紡ぎ出そうとする横で
「そうだ白江聞いてよ！橘ってば公園で狐に憑かれたみたいに……」
立て板に水の如く、すらすらと説明を開始していた。
ばか、やめろっ！
と口に出す暇も与えずに続けられたマシンガントークに、藍は終いには、憑いているのは狐でなく座敷わらしだ、と妙な突っ込みを心の中でするだけだった。
「それは、変だね」
「でしょー」
全てを聞き終わった白江は開口一番率直な感想を述べた。

「橘らしくないというか、……ちょっと行動がバカっぽい」
「みなまで言うな、俺だってわかってる」
顔を赤くして、あの時のことを思いだしズゥンと落ち込む。
「橘、この休み中になんかあったの？」
小首を傾げるように、白江の隣の席に座った五十崎柚がそう尋ねてきた。妙な行動には並々ならぬ理由があると踏んだのだろう。
「あー、っと」
いろいろあった。
いろいろあり過ぎて何を言えばいいのか分からない、
だけど、座敷わらし云々を抜いて集約するならば、
「彼女ができた」
こうなるのだろうか。
「「えっ！？」」
後ろの席に座る二人はこの世の終わりを目撃したかのように目を大きく見開いた。

纏めすぎて言葉が足りなくなっているということに彼はまだ気づいていない。

9モーニング

短編だったのか、思ったより早く見終わった恐怖映画は、それでも怖がりのリコをビビらせるのに充分な効果を上げていた。
「やっと見終わった……」
おどろおどろしい始まりとは打ってかわった爽やかなエンディングロール。
物語の完結にホッと息を吐きながら隣で、ハッピーエンドが気にいらなそうな仏頂面のあやめに話かけた。
「あやめー、外に行こうー。爽やかな初夏の風吹く、麗らかな日差しの下へ」
短時間で達観した見方ができるようになった穏やかな心で親友にそう提案する。
「なに寝ぼけたこと言ってるの？」
あやめは冷ややかな視線を手元の袋に移し、ジッパーをツツっと引きながら続けた。
「まだこんなにあるのに」
袋の中には藍が借りてきた大量のホラームービーがその出番を待っていた。
「……」
まだ映画を観てもいないのに、リコの表情は真冬に氷の張った湖で寒中水泳を行ったみたいに真っ青になった。
脳内で緊迫感を引き出させるゴ　ゴ　ゴ…という効果音が響く。

一方学校では、
藍の「彼女がいる」発言が波紋を呼んでいた。当の彼女が死に神に文字通り、魂を狩られそうになっているのを知らずにした発言だが、まさかここまで驚愕の嵐を呼ぶとは予想だにしていなかった。

藍の発言を受け止めたのは二人、友人の白江藤吾とクラスメートの女子である五十崎柚。
それを聞いて白江は呆然とし、隣の五十崎はわなわな震える唇で
「嘘でしょ？」と呪文のように唱えるだけだった。
「嘘言ってどうすんだよ。ほんとだよ」
一応な、と付け加える前に、五十崎はガタンと大きな音をたて椅子をひきぶつぶつと呟く。
「そんなまさか。橘に彼女が出来るなんて、ワンピースが打ち切られることとより、こち亀が最終回を迎えることとより、サザエさんが大団円を迎えることとよりありえないわっ！私より先にっ！」
「おいなんだその酷い言われよう」
「橘がモテ気を迎えるだなんて、地球が２０１２年に滅びることとより、地デジ化が２０１１年に行われることとより、来年世界が一巡することとよりありえない！私より先にっ！」
「お前にとって絶対最後が重要だろっ！」
藍に怒りとともに指さされて、はっと落ち着いた五十崎は口を開いた。
「わ、私だって、友達として祝福してあげたいとは思うんだけど……」
「なんだよ」
「ごめんなさい、こんな時どんな顔したらいいか分からないの」
よく分からないうちに妙にシリアスなシーンになっていた。
「笑えばいいと思うよ」
隣に座る白江がぼそりと囁いた。それを待ってましたと言わんばかりに、にやぁ、と口角を上げてから藍の方を向き直した五十崎は、わざと見下すように仰け反り、
「はっ」
いい音をたて鼻で笑った。正しく表記するなら「Ｈａ！」と言った具合である。
「四択で決定したシチュエーションの話を現実世界に持ち出すのは

止めてくれない」
「おいまて。なんで俺が寂しいやつみたいになってんだ」
「永遠に飛び出すことない幻想を追いかけて孤独死するのが関の山だわ」
「少なくとも現実だぞ、コレは」
と、自分では思っているが実際はどうなのだろうか。
座敷わらしだなんて突拍子もないこと、自分がいかれて想像している幻なのかもしれないと考えなかったわけではないが、少なくとも、あんな危険な蛇女を創り出すほど精神は磨耗してなかったはずだ。
「うぅ」
「おいなぜ涙目になる？」
気丈に振る舞っていた五十崎はまた落ち込みはじめてしまった。
「まさか橘が私より先に良い人を見つけるだなんて全く予想外だったわ。こんなのなにかの間違いよ、夢でも見てるんじゃないかしら、私じゃなくて橘が。うぅ、橘が付き合うなんてほんとに信じらんない、私より先に」
やっぱり自分より先に知り合いが恋人を見つけ出したのが気にくわないのだろう、この机にうなだれる女子は。
「大丈夫だよ、五十崎。君にもいつか良い人が見つかるからさ」
となりに座る白江がぽんぽんと泣き真似をする五十崎の肩を叩いた。
「ありがと白江。もし見つからなかったら、白江が運命の人になってくれる？」
「僕でよければいくらでも手伝うよ」
なにこの茶番。
「ふざけた演技やめろ」
ため息がこぼれた。
「し、しかしあんな短期間の休み中に彼女つくるなんて橘にしては

やるわね」
「家で寛ぎたかったんだけどな。まさかこんな目に合うとは」
「なんだか妙な言い回しね。よかったら馴れ初め聞かせてよ。興味あるわ」
「やだよ、ばーか。なんで他人にカノジョを紹介しなきゃなんねぇんだ」
それに座敷わらしなどという眉唾な存在をカノジョとして伝えるなど、まず信じてもらえないだろう。
「えー、別にいいじゃない。言っておくけどまだ半信半疑だからね。私が山で修行してる間に橘にカノジョができるだなんてありえないんだから」
修行？
一瞬ぽかんとする。なんだ修行って、と尋ねる前に隣の白江が口を開いた。
「修行ってなにするのさ。もしかしてあのわけわからない民族学部の活動？」
「ええそうよ」
偉そうに五十崎はふんぞり返った。忘れていたが彼女は廃部寸前の民族学部員なのだ。
「自然と一体になり、森羅万象を肌で感じるの。目覚めよ、ってね」
「うさんくさいなぁ」
「白江もどう？あなたなら妖怪を祓える才能があるはずだし」
ぴくっ、いやが上にも藍の耳が反応していた。
妖怪を祓う、だと？
クエスチョンが口をつくより先に白江が尋ね返していた。
「何を根拠に」
「白江の実家、神職でしょ？」
「なんで君が知ってるんだ……」
「だからきっと邪気を祓う才能が眠ってるはずなのよね。あとは私に任せてくれれば一瞬で二フラムが唱えられるようになるから」

白江がそんな家系とは初耳だったが、言われてみれば本人も、毎年夏には一族が集まり儀式めいたことをやるとかなんとか言っていたことを思い出した。
ひょっとしたら、ひょっとするかもしれない！？
「だから、ねっ！ちょっと試してみたい術があるの。コドクの陣っていう、壷の中で毒虫を闘わせ生き残ったのが最強の霊能力を得るという、白江なら勝てると思うんだけど」
「そんなデスマッチしたくないよ！」
愉快な会話を弾ませる二人とは裏腹に、藍の脳裏は静かに、しかし確かな集中力である計画を練っていた。
不幸を呼ぶ座敷わらしと、不幸そのままである死に神から縁を切る、その方法を。
「今は君の宗教的な活動の話じゃないだろ。橘に恋人が出来たという話題だよ」
「でも恋愛論って宗教学に通じるものがあると思わない？恋は盲目っていうじゃん。誰かを信仰することはその人に恋焦がれてるとも言えるんじゃないかしら」
「だから今は橘のカノジョの話だってば」
自分の世界に浸ろうとする五十崎に息をついてから白江は視線を藍にやった。
「橘からもなんか言ってあげてよ」
「ん、あ、ああ」
こいつに、霊能力があるとするならば、
あいつらを祓う力もあるということか。
「俺のカノジョを紹介します！」
「「なんでっ！？」」
やっぱり突拍子もない発言になってしまった。

10日々懺悔

チャイムが鳴り、ホームルームを始まる。教壇に立つ担任が丁寧に名簿順に名前を呼びあげていく。
「はい」と返事をする順番がくるまでの暇つぶしと言わんばかりの私語は収まりそうにない。教室は潮騒のように賑やかだった。
「他人の恋人を紹介されるなんてはじめて」
「五十崎が頼んだんじゃん」
「それはそうだけどさ」
後ろに座る五十崎柚と白江藤吾の会話を聞きながら、ぼんやりと橘藍は考える。
（これで、あいつともお別れか……）
気が早いかもしれない、
それでも後ろに座る白江の捉えどころのないオーラは彼の家系が退魔師だという五十崎の主張にどことなく説得力を加えていた。
ひょっとしたら、ひょっとするかもしれない。
座敷童や死に神が存在したのだから霊能者が近くにいてもなんら不思議ではない。
だけど
（だけど、これでいいのか？）
自問自答に対する答えは彼の瞼のスクリーンに、リコという名の座敷童の愛らしい姿を浮かばせる。
笑顔のリコ
料理を楽しそうに運ぶリコ
照れたようにはにかむリコ
……それらが浮かぶ度に綿雪のような後悔が胸を掠める、のだが、
テレビから出てくる化け物
金をせびる妖怪

蛇の死に神
それらの映像が代わりに流れた瞬間
（別にいいな）
と彼の思考はシフトした。

「ぎゃぁぁぁぁぁ！」
「素晴らしい！リコ見て！革新的シナリオの誕生よっ！」
「う、ふぉげぇぇ」
座敷童のリコがこの世のものとは思えない叫び声をあげ、スプラッタが上映されるブラウン管から目を逸らした。
藍が通う高校とは、歩いて15分の位置にある彼のアパート。
そこでは相変わらず映画鑑賞会が開かれており、終わりがない猟奇的シーンの連続にまた幼さが残る嬌声が室内にこだました。
隣のソファーで彼女の首根っこを掴んで離さないあやめの表情は生き生きとして血色に満ちている。
「肉が、骨が、げぇぅぅ」
「見てスゴい！CGがない時代にこのリアリティ！特殊技術のレベルの高さが伺えるわ！それにほら、ただ恐怖を煽るだけじゃなく人肉という近くて遠い存在を観客に知らしめるカメラワーク！脱帽だわ！流石の私もヒクくらいの拷問法ね！」
「やめっ、とめっ、消してっ！」
「なに馬鹿なこと言ってるのリコ！ここからが本番よっ！見て、赤いドロドロが至る所から吹き出してる、人体ってこんな風になるのね、勉強になるわ」
「そんな勉強しとうないわっ！」
普段クールなあやめが嬉々とした表情のまま高説たれるホラー映画鑑賞はまだまだ続きそうだった。
「きゃあぁぁぁ！」
「わ～、まさかそこまでやっちゃう？」
「ぎゃあああぁぁぁぁ！とめって！誰か助けって！ぎゃああ、う

うううぅ！！！」
終わりまでリコの精神と喉がもつか、危ういところだ。
「それでね私すごい疑問に思ってるんだけど」
数学のテストが返却され、思ったより低かった点数にがっくり肩を落とす藍に、励ますような口調で五十崎が語りかけた。
「なんでアンパ〇マンって自分の顔以外のあんパンは常備しないのかな、って」
「心底どうでもいいわ」
その声は力づける為に出されたものではなく、ただ単に雑談なのだということを彼は静かに理解した。
「それにチーズっているじゃない、犬の。チーズは人語が話せないんだけど、あの世界で喋れない動物がいること事態おかしいよね。カバとかゾウとか果てには無生物の食品でさえ普通に立って喋ってるのに、なんでチーズは素っ裸で四足歩行してるの……、あらなんだからエロチック」
「それ言うんだったらドラ〇もんだって裸に首輪じゃねぇか」
「……」
「おい、急に黙ってどうしたよ」
「変態っ！」
「えっ！？」
「橘がそんないかがわしい目でアニメ見る人だとは思わなかった！変態っ！」
「今のは俺が悪いのか！？悪くないだろっ！絶対」
顔を真っ赤にしてバシバシと藍の肩を容赦なく叩く五十崎に辟易しつつ、２つ折りにした回答用紙を机の奥にしまう。
執拗な彼女の攻撃は相変わらず「変態」コールとともに繰り出されていたが、五十崎がオーバーヒートするのはいつものことなので別段気にすることはなかった。
そんな彼女の攻撃を止めたのは、自分の席についてぼんやりとし

ていた白江藤吾の一言だった。
「でもチーズには彼女がいるよね」
「えっ」
ピタリ、動きがその言葉で完全に止まった。彼女は衝撃をうけた表情のまま口を閉ざす。
「知らない？なんかちょっと白っぽいメスの犬で名前が確かレアチーズちゃん。それにチーズは喋ろうとすれば喋べれるらしいよ、ただ単に喋らないだけで」
「嘘だぁー」
にへら、っと強張らせた表情を破顔させ彼女は手首をおばさんのようにくいくいさせて、否定の言葉をはいた。
「いやいや本当だってば。妹が好きだったから見てたんだけど、レアチーズちゃん結構数出てきてるよ」
「……信じないから」
「でも事実だよ」
急に真剣な表情になった彼女に白江は続けた。
「しかもバタコさんとおむすびまんは両思いらしいし」
「……絶対嘘」
「まあ噂で聞いただけだから」
付け加えた一言を聞いても、どことなく五十崎は立ち直れていなかった。疲れたようにグッタリと机にダレている。
「子供向けアニメに恋愛要素が絡むだなんて……」
ぶつぶつと呟いている。
病気か？と尋ねれば、間違いなく反感を買うだろうから黙って藍は席についた。
そして小さくため息をつく。
あいつら、今なにやってんだろ……
白江が恋愛について変な例えを持ちだしたから、なんとなく気になってしまった。

「わぁ」
「……」
「ねぇ、リコ見てよ、これ。すごいわよ！ものすごい血飛沫！」
「……」
「……リコ？黙っちゃってどーしたの？リコ？」
「……」
「っは！死、死んでるっ！？」
藍の部屋で、気を失っていた。

11リトルサマーウォーズ　前

まだ夏と呼ぶには気が早い7月の空の下、藍は後ろに白江藤吾と五十崎柚を引き連れて帰路につく。
生活しているアパート到着し、ドアを開けながら大きな声で「ただいまー」と帰宅を告げた。
静まり返った室内に、自身の声のみがむなしく響く。誰もいないのだろうか。
いちおう遊びに来たことになっている二人は玄関の敷居を跨ぐことなく、アパートの廊下に並んで藍の様子を目を皿のようにして見ていた。
「どうした、早く入れよ」
「あのさ、ひょっとして、……なんだけど」
五十崎が戸惑いを隠すことなく、おどおどを尋ねた。
「ど、同棲してるの？」
「あ？」
冷静になって考えてみれば、世間一般にはそうなるのか。
「うん、まあ一応」
衝撃のカミングアウトに二人は目を見開き、しばらく動けなくなった。
「す、進みすぎだろ」
「……まぁな」
白江の冷静なツッコミに藍は静かに同意した。たしかに高校生のうちからいきなりハードル高いことをやってるなぁ、と客観視したらそうなるけど、いかんせん同棲相手がアレではなにも感じんわ、と自らを無理やり納得させる。
「おかえりなさい」

「あ」
ずっと開けっ放しだったドアからひょっこりと見たくもない顔が現れた。
「てめぇまだ居たのか」
「あら、お客様？」
出てきたのは座敷童のリコではなく、遊びに来ていた彼女の友人のあやめである。
あやめは藍を押しのけるカタチで前に出ると冷ややかな視線を、アパート前でぽけっとする白江と五十崎の二人に向けてから社交辞令のように述べた。
「どうもこんにちは。藍さんのお友達ですか？」
「ちょー美人じゃん……」
「あら、あら！そんな、ありがとうございます。照れてしまいますわ」
思わず呟いた五十崎の言葉にいい意味で豹変し愛想よく振りまきながら、あやめは半分だけ開いていた扉を全開にし「どうぞ汚いところですけど」と二人を部屋に招きいれた。
「あ、お邪魔します」
ぺこぺこお辞儀しながら二人はたたきに上がる。
違和感なく目の前でくり広げられた茶番だが、一つだけ引っかかる場所があった。
「てめぇ足っ！」
今朝まで蛇の化身たるあやめの下半身は神話に出てくる化け物の如く蜷局をまいていたはずなのに、今はたしかに人間の二本の足がついている。
「足？」
もちろんそんなこと知らない白江と五十崎は首をひねった。
「足がどうかしたの？」
「あっそうだ聞いてくれ、このアマうまく化けてはいるが……ッ」
真実を打ち明けようと口を開いたが、続きが出ることはなかった。

二人の後ろにいるあやめがもの凄い形相で藍を睨みつけていたからだ。昼間だというのに、真夜中の猫の瞳のように輝いている。
「あ、いや、その」
「うまく化けて、ってなんの話さ」
「あー、と、ほら足がね」
「ん？」
中途半端に言葉を濁している藍の舌を補うようにあやめがそっと言葉を開いた。
「藍さんは私の足を心配してくれているんですよ」
「え？足どうかされたんですか？」
五十崎が振り返ってあやめに尋ねる。
「えぇ、ついこの間、段差でつまづいてしまい、足首を捻挫してしまったんです。幸いそれほど重いものではなかったので、もう大丈夫なんですが、藍さんは心配性のようですね」
「うひょーい、橘、見かけによらず愛妻家じゃん」
はやし立てるような口調で五十崎がそう言った。どうやら彼女勘違いしているらしい。
「愛妻家って……、おめぇ何言ってんだ」
「だからラブラブってことー」
「少し間違ってるみたいだから言うけど、俺のカノジョはそいつじゃぁ――」
言葉を続けようとした彼にまた、先程感じた悪寒が全身を駆け巡った。何事かと思い、二人の背後を確認すると、あやめがギラギラと瞳を不気味に光らせている。
「いや、なんでもない」
しずしず彼は言葉を打ち切った。
五十崎と白江が靴を脱いでいる隙にあやめが今にも彼を殺さんとする表情で藍に寄ってきて耳元で囁いた。
「これはどういうことよ、豚？」

「そりゃこっちが聞きたいよ、てめぇ蛇足どこにやりやがった」
「これくらいのカムフラージュ私レベルなら容易に出来るわ。気配も人間のそれに限りなく近いようにしてあるし、まず私が人外とバレることはないでしょう。それより質問に答えなさい。耳管に詰まった耳クソが脳味噌にまで回ったのかしら」
「質問の意味がわからねぇから答えようがねぇつぅの」
めんどくさいのでいちいち彼女の暴言を気にするのはやめにした。
「リコをこの愚昧どもに今付き合ってるカノジョとして紹介する気なの？便所コオロギごときが？」
「色々と言いたいことがあるが、……まあそうだな」
彼の言葉にあやめは舌打ちをしてから続けた。
「やっかいなのをウチに入れてくれたわね」
「お？」
「あなたのような0能力者にはわからないだろうけど、そっちの男の方、なかなかのポテンシャルを秘めてるわ」
自分チに誰を招待しようがそれは家主の勝手だが、どうやら、思った以上にうまく事が運んでいるようだ。まさか本当に友人の白江藤吾が漫画の中にでてくるようの力を持っていただなんて。
「それマジか？」
「えぇ、詳しくは相対してみなくちゃわからないけど、かなりの潜在霊力を持ってるわ。まだ覚醒はしてないから危険はないとはいえ、何がトリガーになるかわからない」
高慢な態度のあやめが神妙な面もちで語るので、どうやら白江の力はよっぽどのものらしい。彼女が口にした危険というのは対象物が妖怪などの場合をさすのだろう。
それにしてもトリガーとはなにをどうすればいいのだろう。
メイドインエジプトの矢に射抜かれるとか、坊主頭の親友が宇宙人に目の前で爆発させられるとか、なにかわかりやすい例がほしい。
「ちなみに五十崎のほうは？」
「女の方も詳しく見てみないとわからないけど素質はゼロじゃない

みたいね。鍛錬すればそれなりにはなると思うわ」
「なるほどなるほど」
よかったな五十崎！そのまま修行を続ければいつか霊能者として大成するかもしれないぜ。
「理解したならやつらをリコに近づけないで頂戴。ただでさえ彼女今弱ってるのに」
「あん？どうしたんだ？夏バテか？」
こいつは驚きだ。藍は眉をしかめた。座敷童も環境によって体調を崩すだなんて知らせようものなら五十崎は諸手を上げて奇妙な論文を書き上げることだろう。
「いえ、逆に涼しくさせすぎたみたい」
「？」
彼が借りてきたホラーフィルムが招いた悲劇をよく知らない。
「それでいまあいつどこにいるんだ？姿が見えないが」
「寝室で魂ぬけてるわ」
「ぬけてるもなにも、元から魂むき出しじゃねぇか」
座敷童がなんなのか、いまいちよくわからなくなった。
「まあなんにせよ、あの二匹を寝室には近づかせないことね。リコの身の安全の確保と、敵愾心を抱くかもしれない危険因子は少しでも接近させないほうがいい」
ため息をついてから彼女は続けた。完全にリコを弱らせた原因をつくったことを忘れているように、すっかり他人事だ。
「この状況で追いかえすのは不自然でしょうけど、どうにかしなさい。とにもかくにも絶対ヤツらを寝室には入れないでね」
「よしっ、それじゃ二人とも一旦寝室に行ってゴロゴロしながらボードゲームでもしようぜっ！」
「なっ！？」
しかし、藍の目的はあくまで不浄なるものの成仏だ。つまりあやめが止めてほしいと懇願したことが近道につながると判断した彼のとるべき行動は一つだ。

リコと白江の接触。
それすなわち支配からの解放を意味する。
（よっしゃぁぁ、頑張れ白江ぇ！）
厄介払いを望む、橘藍と
（なにを考えてるのっ！？）
リコを守ろうとする、あやめの
世界一小規模な戦いの火蓋が切って落とされた。

リトルサマーウォーズ　後

靴を脱ぎ終えた一同を、案内しようと藍はにこやかに声をあげた。
「おしっ、荷物は寝室においてきてくれ」
「え、いや、橘がそう言うならそれでいいけど、……なんで寝室？」
「ベッドでゴロゴロしながら遊ぼーじゃねぇーか」
質問を無視し、藍は強引に白江と五十崎の二人を寝室に向かわせようとする。
座敷わらしの退治を目論んでいるからだ。それを阻止しようとしているアヤメは、はりついた仮面のような笑顔を浮かべる藍の肩を掴んで引き寄せた。
「まあまあ、その前に居間に行きましょうよ。おいしい紅茶をいれてあげるわ」
口調は穏やかだが、目はまったく笑っていなかった。その瞳に静かな怒りの炎をゆらゆらと宿している。
「俺が一人で飲もうと密かに企んでいたやつだ」
そもそも紅茶があることをなんでこいつは知っているんだ？
「私は別にどこでもいいよー、アヤメさんとお話できれば」
五十崎柚が手を上げて意見した。彼女たちの目的は、あくまで橘のカノジョ（と勘違いしている）であるアヤメとの恋バナである。
「そうかぁ？んじゃ寝室に行こうぜ」
「なんで橘はそんなに寝室に行きたがるのさ」
「それは……」
そうだ。なにも白江を無理やりリコと逢わせなくても、口で伝えてやればなんとかなるじゃないか。
「実は、」
自然の道理にたどり着いた彼が、友人に助けをもとめるより先に、強烈な痛みが襲いかかった。アヤメが肩に置かれたままにしていた

手に力を込めたからだ。
「なんでもないっす……」
「？」
無言の威圧と、言葉を滑らせようものなら握りつぶすと言わんばかりの握力に、彼は口を閉ざすしかなかった。
口内だけで、ちくしょー、と叫ぶ。
「さぁ、居間に行くわよ。だいたい女性をベッドルームに誘うだなんて人として軸がブレてる。けがらわしい」
その指摘で気がついたのか、さっきまでケロリとしていた五十崎柚（１６）は頬を赤くしてうつむいた。
それをチラリと横目に藍は声を荒げる。
「軸がブレてんのはどっちだ！夏にホットな飲み物飲みたくねぇよ。せめてアイスティーにしやがれ」
「私自らがウスラボケどものために手をかけてやろうというのに命令すんの？最低なブタねっ！」
「え、ウスラ？」
しまった、露骨にその表情になって、アヤメは失言をしどろもどろで訂正しはじめた。
「おいしい紅茶をいれるコツなんです！ティーパックをウッスラぼかすよーにお湯を注ぐのが」
彼女の正体を知らない二人は、腑に落ちない点があるものの納得したように頷いた。
化け物を追い詰めるのは今がチャンスだ！
「はっ、何がおいしい紅茶のいれ方だ。お前にそんな器用なことができるとは思えんな」
藍がここぞとばかりに声高になる。実際蛇が他人のため行動するとは思えなかった。
「なによこのハゲ」
「は、ははハゲてねーよ！根拠に乏しい悪口言うな！」
男は誰もがその罵詈に弱い。たとえ毛根にダメージがなくてもだ。

「髪の毛といっしょに味覚もイカレちゃったから美味しい紅茶かどうか判断もつかないんでしょ」
「失礼な！俺の味覚は半端ないぞ！お前がいれたクソマズい紅茶なんざすぐわかる！」
「なによ。そんなに文句いうならあんたがいれてみなさいよ」
「はん！いいぜ！見せてやるよ！漫画で培った美味しい紅茶の入れ方の技術をな！」
実際インスタントのティーパックにお湯を注ぐだけなのでなんの問題もない。
ただお茶をいれるだけなら誰がやっても大差ないだろう。
「そう、じゃお願いね。私たちは居間で待ってるから」
「はっ！」
気づいたら、アヤメに乗せられていた。

アヤメの作戦通りキッチンに立たされた藍は、ヤカンを火にかけ、戸棚から取り出したティーパックを、マグカップに引っ掛けた。人数分、いちおう奥でダウンしているという座敷わらしの分を含め５つ、並べる。
むしゃくしゃしたのでアヤメの分だけ出涸らしにしてやろうとほくそ笑み、ヤカンの火をぼんやりと見つめていた。
飲み終わったら我らが白江藤吾大先生が魑魅魍魎を南無成仏してくれるはずだから、それまでの我慢だ！
と企んでいた。

一方、藍がお茶を運んでくるのを待っている学生二名と蛇の死に神一名は、
「アヤメさんって美人ですねー」
「そんなことないわ」
「いやいや！見てください、朴念仁で有名な白江藤吾が顔を真っ赤にしてるじゃないですか！」

「ちょ、五十崎！急になに言ってんだよ。僕はそこまで節操ないことはしないぞ」
「でもアヤメさんは美人でしょ？」
「そ、それはそうだけどさ」
わりと楽しく会話していた。
しかしアヤメの脳内は、そんな浮ついた会話とは裏腹に冷え切っていた。冷静にこの先を乗り切る方法を探す。

この野郎（白江）をリコに逢わせるわけにはいかない。
一昔前の私なら危険因子は問答無用で排除していたのに、神となってそういうわけにはいかなくなったことがもどかしいわ。
くっ、思い出に浸るより先にどうするか決めなくちゃ！
「ところで、」
思考をまとめるより先に口を動かしていた。
「ホラー映画は好きかしら？」
「え？」
突然の質問に二人はキョトンとした顔になった。
その場をつなげるためにした、世間話の一つだ。
「私は、けっこう好きですけど……急にどうしたんですか？」
「いえ」
五十崎の答えを聞くとともに、ちらりと白江藤吾に視線をやる。
「白江さんは？」
「僕ですか」
さて、私はほんとに何を言っているのだろう。
「ええ、ホラーはお好き？」
さっき連続で見たから妙に印象に残っていたみたいね。
それよりもリコを守る方法を考えなくてわ。
「うーん、わりかし好きな方です」
白江の返答を「そう」と頷いた瞬間だった。
キッチンからヤカンが沸騰した、サッカーの試合終了を告げるホ

イッスルのような音が響いてきた。お湯が沸いたのだ。
まずい！
時間が残されていない。藍がいては白江たちの行動を思うようにコントロールできなくなってしまう。出来るなら今のうちに二人の行動を縛らなくては。
そうだ！さっき観たホラー映画に、どんなヤツの行動も操るとっておきの一言があったはずだ！
魔法の言葉、セリフ、セリフだ。あれを言えば
「ねぇ、」
自然と猫なで声になっていた。
「さ、」
二人がアヤメに視線をやる。
「先にシャワー浴びてきて」
「え？」
ホラー映画の見過ぎだった。

「あ、あの。き、急にどうしたんですか？」
「おかしいわね。このセリフを吐けば男は喜び勇んでシャワールームに向かったのに……」
「しゃ、しゃわー、って」
五十崎柚がまた頬をほんのりと紅くした。
アヤメさんってば恋人がいるのに、別の人を誘うだなんてっ、と微妙に勘違いしていたからだ。
白江はというと、こめかみから垂れてきた汗の滴を拭い、少しだけどもりながら、目の前の女性に言った。
「そ、そういうのは僕じゃなくて橘に言ってください。冗談でも心臓に悪いですよ」
「冗談なんかじゃないわ」
その端的な切り返しに、白江の横にいる五十崎の方が、完熟トマトのようにさらに真っ赤になった。

「それに藍さんはそんなの（除霊）出来ないですし、あなたは（霊能力が）大きそうだから頼んでるんです」
「はっ？」
ブバッ、白江が混乱するよりも先に、鼻血が噴き出した五十崎が気を失うほうがコンマ数秒早かった。

五十崎柚は純情な少女である。恋に恋する１６歳。
彼女は昔からオカルトめいたものを好み、それゆえ人間心理がよくわかる恋愛に興味を持っていたのだ。
しかし彼女が持っているデータは全てフィクションのもの、彼女は免疫というものがろくに備わっていなかった。

「うーん、お兄ちゃん気をつけて、そいつは妖怪変化だよ」
「どんな寝言だよ」
「はっ！」
まだぼんやりとした世界が、五十崎の視界に広がった。
鼻血を出して気を失ったらしい。
クラクラとする脳で、そう理解するのに時間はかからなかった。
視線を辺りに這わせてみれば、アヤメに橘、白江が寝かされているソファーを覗きこむように囲んでいる。今彼女の寝言に突っ込んだのは、紅茶をいれ終わった、藍のようだ。
五十崎が眉間に手をあてるのを見て白江が小さくため息をついた。
「五十崎、大丈夫？」
「あ、うん、ごめん、急にどうしちゃったんだろうね」
原因は明らかだったがあえて口にしなかった。
五十崎が倒れた後、アヤメと白江は話合いのすえ、どうにかこうにかお互いの誤解を解いていた。
「熱中症かなんかかな。屋内でも油断してたらなるってはなしだし。それで五十崎、もう気分は悪くない？」
「うん大丈夫。寝てたらよくなったみたい」

そう言ってから彼女は上体を起こした。
「今日はもう帰ろうか。早くウチ帰って休んだ方がいいよ」
「そうね。これ以上は橘も迷惑だろうし。でも残念だな、アヤメさんともっとお話ししたかった」
呟いて立ち上がる。アヤメはにこやかに言った。
「私も残念です。今度ゆっくり話をしましょ」

「おじゃましましたぁー」
玄関から出ていった二人を恨めしそうに藍は見送った。
ほんとうに、残念だ。うまく行けば蛇もろとも座敷わらしとお別れできたかもしれないのに。
がっくりと肩を落としてリビングに戻る。
「さて、それじゃ私もそろそろ帰るわね」
帰り支度を整えたらしいアヤメが落ち込む藍にそう告げた。
ここにきてようやくグッドニュースだ。頬をほころばせて藍は笑いながら言った。
「おう、そうかそうか。さっさと帰れ。もう二度と来るなよ」
「あらヒドい言いようね」
すっと近づいて、アヤメは藍の肩に手を回した。
「それにしてもリコを祓おうとするなんて大それたことを考えたわね」
「はっ、1ヶ月の辛抱とはいえ我慢の限界が近づいたんだよ」
「調子に乗るなよゴキブリが」
耳元でささやかれた声はドスの効いた低い声だった。
しゅる、肩をなにかがはう。いや、違う。アヤメの手だ。
「お前なんざ」
藍は恐怖のあまり固まっていた。肩を回されたアヤメの手が、蛇になっていたからだ。
「いつでも始末できるんだよ」

最後そう言い残して、アヤメは去っていった。

「あれ？アヤメは帰ったのかのう」

「あ、ああ」

茫然自失状態でソファーに沈むこむように座っていた藍に、完全回復を遂げたらしいリコが話かけた。

「起こしてくれたらよかったのに」

「それよりも、」

「む？」

友人を見送りすることができなかったことが不服らしく口を尖らせたリコに藍は叫んだ。

「この夏、俺は引きこもるから」

「は？」

「いいか？絶対この家に誰も上げるなよ！友達をよぶな！俺は一歩も外を出ない！」

「な、なぜに」

「今日俺は悟ったんだ！なにか行動を起こすだけ無駄。なら運命に逆らうためにはどうしたらいいか。答えはなにもしないだ！よって俺はこの家から一歩もでない！」

「はあ」

彼の中で変な世界が目覚めた。

12　Ｇｏｏｄ　Ｏｌｄ　Ｆａｓｈｉｏｎｅｄ　Ｌｏｖｅｒ　Ｂｏｙ（前書き

前書きは最初以外書かない、いう前言を撤回して失礼します。
３週間も放置して、すみませんでしたぁ！……たぶんまた放置します……。
さて、そんな久しぶりの投稿がこんな話で、もうなんていうか、……申し訳なさすぎて、涙が……。
ちなみに今回の話は絶対しなければならない物語です（キラリン）。たぶん。

12　Good Old Fashioned Lover Boy

少年は気づいた。気づいてしまった。
ソファの上、体育座りで昼ドラを見る座敷わらしを横目に、彼は静かに怒りの炎を灯らせる。
（ここ最近、エロ成分が足りんッ！）
１５歳、男子高校生の夏休み。
青春くささを感じる前に、不健全さが漂うそんな年頃。
正確には、夏休み前の短縮授業期間なわけだが、せっかくの午前授業も寄り道もせずまっすぐ帰宅した彼にしてみれば、あまり意味のないものになっていた。
それもこれも、全部コイツのせいだっ！
声に出さずおかっぱ頭の少女を糾弾する。
せっかく一人暮らしできるようになったんだから【自主規制】とか【自主規制】とか【自主規制】とかやり放題のはずなのに、リコがいるせいでエンジョイ出来やしない！なんで高一の夏を健全に過ごさないといけないんだよ！
彼は決心した。
（やってやる！やってやるよ！こんなクソガキに邪魔されてたまるか！俺は、俺は漢だ！くにおくん！）
こうして彼は快楽という絶頂を求め、天国への階段（ステアウェイトゥヘブン）へ足を踏み出したのだった。
Ｍｉｓｓｈｏｎ１．一人きりになろう
「よぉ、リコ」

「ん？なんじゃ？」
そのためにはまずこのくそ生意気なガキをどこかにやらなくてはならない、作戦を脳内で固め、テレビに釘付け状態の座敷わらしに話かける。
「悪いが後にしてくれんか。ホストになった康夫が邦子の元に帰ってきて、八重子がどう動くか目が離せんのじゃよ」
「……」
彼女が見ている昼ドラの内容である。
「そんな事よりそろそろ夕飯の買い出しに行く時間じゃないのか？」
「む、そんなこととは失礼な。記憶喪失だった八重子が康夫に告白して泥沼の三角関係なんじゃ。それはそうと今日の料理の材料は昨日の内に冷蔵庫に入れてあるぞ」
「あ、夕飯じゃなくて、ほら、あれだよ。あれ」
しまった。いまの橘家の台所事情はリコに掌握されているのだ。買い物をダシに一人きりになる作戦は失敗だ。
「映画でも見てこいよ。いま話題だろほらジブリの新作」
「……話が随分変わるのう」
「金なら俺が出すからよ。レディースデイだから１０００円な」
「ひょっとしてデート？」
妙にきらきらとした瞳で、画面に向けていた視線を藍に向きなおし、少女は訊いてきた。
「いや、頑張った座敷わらしにご褒美。いつもお世話になってるから俺の奢りだ」
一人になるために千円の出費、……致し方あるまい！
彼の金銭感覚は夏だからか、多少狂っていた。
「むう。どうせなら一緒に行こうではないか。我ら付き合っておるんだし」
「それじゃご褒美になんないだろ。今日はゆっくり羽を休めてくれよ」
テメーはいつもダラダラしてるだけだけどな。と心の中で付け加

える。
「いやしかし映画というものは一人で観るよりみんなで観るほうが、」
「まじアリエナイッティ！誰にも邪魔されず平穏な気持ちで観るのが映画の醍醐味じゃないか」
「見解の相違、というやつかのう」
「いいから俺を気にせず見に行けって、あとで感想聞かせてくれよ！」
親指をぐっと立てる。
「そこまでいうなら好意に甘えさせてもらうかのう。ふふっ、藍も優しいとこあるじゃないか。見直したぞ」
「はは、いいってことよ」
玄関から出ていった座敷わらしを見送り、
（あいつにチケット買えるのかな？）
と疑問に思いながらも、無事一人きりになることに成功したことを祝い、ガッツポーズをしながらほくそ笑んだ。

Ｍｉｓｓｈｏｎ２．邪魔されない環境作り

さて、次に必要なのは気分が盛り上がってきた時に乱入される危険性の排除である。
実家暮らししていた時の事だ。自分の部屋でエロ本眺めている時に限って親がノックもなしに「洗濯物ここにおいとくわよ」と空気も読まず部屋に入ってくるのだ。
その時は恥ずかしさを「か、勝手にはいってくんなよ！」と怒りでごまかしたが（母親の分かりきったようなしたり顔がうざかった）、座敷わらしにソレが通用するとは思えない。
あれからもう二度と同じ轍を踏まい、と誓ったのだ。
彼は拳を固めた。
まず玄関の鍵をしめ、チェーンをかける。リコに怪しまれたら訪

問販売がしつこかったから、という言い訳をしよう。
次に窓をしめ、クーラーのスイッチをいれる。これはただ単に気分だ。誰かに覗かれているかもしれないという気分を紛らわせるため。
そして最後に
「そこにいるんだろ？」
独り言をさも誰かがいるかのように意味深に呟きはじめた。
もっとも警戒すべき相手は妖怪。全身全霊をもって相手しなくては。
「俺相手に未熟な気配遮断は通用しないぜ？出てこいよ」
クーラーの稼働音だけが響く。
「……」
一人では奇行だが、一人だからこそバレるおそれはない。
念の為、声音を変えて叫ぶ。
「お～い、リコ？いるんだろ？サプライズパーティーにはまだはやいぜぇ」
窓の外から蝉時雨があふれてくる。
「ハッピージャムジャムさいこぅ踊ろうよっ！……」
静寂が耳に痛い。エロスと夏の暑さが彼をおかしくしていた。
「へぃ！今から鼻からスッパゲティ啜ってやんぜ！そん次は瞼でピーナッツを噛んでやる！見物はお早めに！
……いないな？誰もいないな？実は見てましたとか止めろよ、マジで」
誰にも返事をされないことで、この部屋にいるのは自分だけと確認した。
「今から俺は【ピィーー】や【ズキュゥン！】を【ドゥン！】しながら【カーン】すんだから邪魔すんなよ！わはははは！！」
放送禁止用語を連発してから、こみ上げてくる笑いを誤魔化すことなく、一人で大笑いした。

Ｍｉｓｓｈｏｎ３．リフレッシュ

ここまでくれば、残されたのは快楽のみである。彼は勇み足で押し入れの奥に封印された「宝箱」を取り出した。

中にあるのは、彼秘蔵のＤＶＤである（内容は言わずもがな）。

念の為、あたりをキョロキョロと見渡してから箱に手をかける。見慣れた自分の部屋があるだけだ。誰の視線を気にする必要はない。

彼は箱の中からお気に入りの一本を手に持ち、きちんと残りを押し入れに戻してから、テレビの前に正座した。

プレーヤーにＤＶＤをセットし、深呼吸する。

先ほどまでアスファルトをのたくるミミズのようなハイテンションを披露した人物だとは思えないほど、冷静で着々とした行動である。

テレビ画面に「なんでこの世界きたの？」と怒鳴りつけたくなるほどの、美人が写しだされる。

ワクワクと高揚した気分で目を皿のようにする藍。

（ちっ、インタビューシーンは飛ばすか）と心の中で舌打ちをし、リモコンに手を伸ばした瞬間だった。

テレビの中の女性の顔に、リコの顔がダブった。いや、出てきたのだ。

「のわぁぁぁぁ！？」

「？」

初登場時と同じシチュエーションなのに、その時には起きなかった叫び声がこだました。

Ｍｉｓｓｈｏｎ４．予期せぬ事態に対応せよ！

「な、な、なにしに戻って来たっ！？」

「む？なにをそんなに驚いておる。はじめてあった時はあんなに落ち着いておったのに」

叫びながらも、テレビの電源を切る。リコは一瞬だけ怪訝そうに眉をひそめたが、怪しんでいるわけではなさそうだった。
そうだった！こいつは妖怪だから部屋を締め切っても無駄なんだった！
彼は吹き出した汗とともに、自らの認識の甘さを悔いた。
「いきなり現れたら誰だって腰を抜かすはボケぇ！それよら質問に答えろ！」
「いやなぁに。映画のついでに買い物を済まそうと思うての。たしかシャンプー切れかかってたろう？」
「あ、ああそうだな！シャンプーがやばかった！お願いするわ！金なら俺が出すから」
「今日は嫌に物わかりが良いね」
首をひねりながら全身をテレビから出す。
「ところで何をしとったんじゃ？」
「べ、別になにも」
「目線が合っとらんが」
藍はここぞという時の嘘が苦手だった。
「テレビ観とったんか？」
「あ、ああ。うんテレビを観てた」
「ふぅん」
藍の端的な対応に彼女は唇を尖らせながら鼻を鳴らした。
「でも消えとるが」
うるせぇよ、しつけぇな。
「しょ、省エネだ。ストップ温暖化だ」
「テレビといえば、康夫はどうなったかのう。さっきは藍がいたわってくれた嬉しさで舞い上がってしまい途中までしか観とらんのじゃ」
「あっ、バカ、止めろ！」
リコは藍が止めるより先にテレビの電源をつけていた。

Ｍｉｓｓｈｏｎ５．泥沼を抜け出せ

テレビの電源を落としても、プレーヤー（再生機）の電源は落ちていないので、画面にはまた動画の続きが写しだされる。
「なんじゃ、これ？」
「あ、あ」
言葉を失いかけた彼の瞳には、未だに冒頭のインタビューシーンが写されていた。
「藍はなにを見ておったんじゃ？これ何チャン？」
いつも、無駄に長いと感じるそのシーンに彼は僥倖とばかりに、渇いた舌で言葉を吐き出す。
「こ、これは」
でも唾は止まらなかった。
「インタビューです」
言い訳が浮かばなかった。
どうやらリコはまだこれがどういったものなのか気がついていないようだ。
あとはどうにかして『行為』に入る前に彼女を部屋から出させるかが鍵である。
「インタビュー？なんの？」
「ヒ、ヒーローインタビュー……」
青少年に夢を与える、という点では、ある意味画面の中の女性は『ヒーロー』だ。
彼自身気づいていないことだが、これらのビデオは、通常１８歳未満の閲覧は禁止されているので、本来なら彼はまだ見ちゃいけないのだった。
「ふぅん。こんな華奢な女性が活躍できるスポーツってなんぞ？」
「……野球」
「嘘ぉ！？それはすごいのう！まさか女性が活躍できるとは」
「うん……」

咄嗟に口を出たスポーツが、メジャーすぎて泣けてくる。
「そ、それより映画みにいけよ。チケット早めに取っとかないと混んじゃうぞ」
「まだ時間あるから大丈夫じゃよ。それより彼女がどんなファインプレーしたか同じ女としてみたいんじゃが」
「も、もう試合は終わったからなぁ～。諦めろって」
試合が始まりそうだから怖いんだよ！
「ハイライトあるじゃろ。それにしても最近のヒーローインタビューは私服でやるんじゃのう」
「……」
テレビ画面では、『初体験はいつ？』なんてプライベートに突っ込んだ質問がされている。女優は恥ずかしそうに『中３の時、先生と』答えているが、彼が思うのは、日本の教師終わってんな、などという感想ではなく、ディスクよ早く壊れろ！という願いだった。
「むぅ、どういう意味じゃ？スポーツはよくわからん」
「バッテリーを組んだのが、先生とだったんだろ」
「ああ、なるほど」
嘘です。この瞬間も嘘になればいいのに。
彼が笑えない冗談を飛ばしている間も、刻一刻とタイムリミットは近づいてきている。
「も、もうなんでもいいから早く外に出てけ！早くしろ！間に合わなくなってもしらんぞ」
彼の中で何かが吹っ切れた。
「え、なに、急にどうしたの？」
「爆弾だ！この部屋に爆弾が仕掛けられている！いいから早く外に避難するんだ！」
「そんなバカな」
「嘘じゃない嘘じゃないぞ！とてつもなくデカい爆弾だ！爆発すれば世界が、」
室内に、テレビの中の女性の嬌声が響いた。

快楽に溺れた、視聴者をいざなう魔の声音。
「……」
「え、なにこれ」
爆弾は、爆発した。
その爆風は、室内の時間を停止させ、真夏を真冬にする、奇跡の爆弾だった。

「なぁに、みとんじゃぁー！」
「うるせぇ！俺だって男だから仕方ないだろ！」
リコの怒りの鉄拳により真っ二つになったＤＶＤの横で二人は町中に響くのではないかという大声で叫びあっていた。
「カノジョがいるのにそんなものを観るなんて最低じゃ！浮気じゃ！裏切りじゃ！」
「うるせぇ！夏だから仕方ねぇんだよ！」
「季節は関係なかろう！」
「俺にはセミの鳴き声が『やらせろー！やらせろー！』にしか聞こえないんだ。そんなん四六時中聞いてたらおかしくもなるわ！」
「おかしいのはおぬしの脳みそじゃ！カノジョ持ちのする行為ではないわ！」
「昼間っから居間でゴロゴロする穀潰しのくせして、今更カノジョ面すんなよ！」
「ば、バカにしおって、私というものがいながらこんなもんに手を出すなんて最低じゃ！」
「その考えが可笑しい！男にとってそういうのは、カレシ居る女がアイドルでキャーキャー言うのと同じレベルのことなんだっつうの」
「わ、私に対して悪いとは思わんのか？」
「その質問事態意味不明だって。明太子食ってるときにスケトウダラに罪悪感感じるヤツはいないだろ。俺は明太子は好きだし、タラもタラで愛している。それを浮気というのは俺は絶対に認めないからなっ！」

「あ、愛してる……」
リコの顔がみるみる薔薇色に染まっていく。
どうやら純情な乙女にはＤＶＤの内容は刺激が強すぎたらしい。
それを見て彼は泡を飛ばし熱論していた自分が恥ずかしくなった。
考えて見れば、年齢不詳とはいえ、年端のいかぬ少女だ。男性に憧れを抱いているといっても過言ではない。そんな少女に現実を見せるのはまだ早すぎたのだ。
「……いや、わりぃ。今回の件は俺が完全に悪かった。ＤＶＤは捨てとくよ……」
男の宝箱を手放す気はないが、一応体裁としてそう言っておく。
素直な謝罪が効いたのか、リコもしょんぼりとつぶやいた。
「いいんじゃ。考えてみれば私も一度も藍に体を許さず、蛇の生殺し状態にしてたから……。健全な男子であれば、性欲が溜まってしまうのは当然のことだったんじゃ」
「ああ、わかってくれればそれでいいんだ」
「すまぬ。私が座敷わらしだから……。で、でも、の」
たどたどしく、耳まで真っ赤になったリコは伏し目がちに続けた。
「じ、実体化、で、できるから。藍の望み、叶えられるから」
「え、それって」
「藍なら、私、いいよ。す、好きにして」
「リコ、お前」
「藍……、は、初めてだから、やさしく、してよね」
そのあと二人は【ズキュゥン！】して【ドジャァン！】して【ポンピロピー！】。

薄れゆく意識の中、彼の神経は現実から目をそらすよう妄想に逃げていた。
ＤＶＤの内容がバレ、それが叩きわられてから食らった強烈なビンタ。飛びかけた意識を繋ぎ止めたのは大切にしてきた彼の宝物が、座敷わらしの驚異の第六感により掘り起こされていたからだった。

「そこ！」
「ああ、俺の団地妻セット…」
机の引き出し。
「そこ！」
「マユちゃん、１６歳…」
官能小説。
「そこぉ！」
「嘘だ、ろ」
押し入れの中の桃源郷。
みな寂しい時、辛い時をともに乗りこえてきた戦友だ。それらが日の目を浴びるなんてあってはならない。
「ふぅ。こんなところかのう」
「リコ、おい、……」
藍はすでに半泣きだった。
「これで全部かのう？」
「……うん」
「……」
「……」
「……そこぉ！」
「ああ、俺のロリータセットがぁッ！」
床にズラリと並ばされた戦友たち。初めは頬を赤くして腫れ物でも触るように指先だけでつまんでいたリコだったが、最後には穴を掘るモグラのように率先してかき分けるようになっていた。
「よくもまぁこれだけ」
「ぅう」
「捨ててきなさい」
「はぁ！？」
それらの処分を言い渡された。
戦友を、殺せというのか！
「なんでだよ！なんで指図されなきゃなんないんだよ！横暴だ！」

「私がおぬしのカノジョだからじゃ」
「だからってやっていいことと悪いことがっ……はっ！」
空気がリコを取り巻いていた。恐怖モードを発動するまえの空気が。
「……はい」
「わかってくれてうれしいのう」
紙袋に戦友をつめ泣きながらゴミ捨て場に向かうことを強要される。
灼熱に焦げたアスファルトに彼の涙が滴った。
「おれに、こいつらを殺すことはできない」
拳は握り過ぎて血が出ている（気がする）。
「避難させてもらおう」
彼はその足で親友の家に向かった。
無理やり押し付けようという魂胆だった。
その後、戦友は無残にも親友の手で不法投棄されることを彼はまだ知らない。

１４　夏のまほろば　前

自堕落な休日の連続で生活リズムを大いに崩す夏期休暇。
そんな学生のビッグイベントを過ごす男子高校生一名は、ソファーに座りながら、せわしく両手を動かす謎の行為に没頭していた。
座敷童の少女リコは首をひねりながらストレートに「なにをしとるんじゃ？」と少年に尋ねた。
「右手と左手を戦わせてるんだ」
「……」
憐れみの視線を露とも気にせず、藍はいそいそと握り拳をぶつけては放す、ぶつけては放すと動かしていた。
殴る、防ぐ、弾き返す……、誰がどっから見ても暇人だった。
「のぅ、暇なら遊びに行こうぞ」
「暇じゃねーよ。見ての通り、いまいいところだから」
「わからぬわ」
「俺のしている行為はただの暇潰しと見せかけて、世界を守る……、そう、魔王との最終決戦なんだ」
「そんな生産性のない不毛な争いに意味があるわけなかろう」
「それを決めるのは俺だ。わぁー、必殺くずりゅーうせん。なんのきくか、かめはめはー。れいがーん。さいこがーん、らせんがーん、どररररー。いまのはメラではない、メラゾーマだ。……逆か」
「……ぬしが幸せならそれでいいがのう」
藍はチラリとリコを見てから、渾身の右ストレートを左手に浴びせて、大きなあくびを一つした。どうやら右手の勝ちらしい。
「終わったのか？」
「ああ、壮大な冒険に終止符を打ったのは右手が抱えた民の思いだったよ」
リコはやれやれといったように肩をすくめた。

「それでは、出かけよう」
「断る、今から俺は一人しりとりを開始するんだ。外出なら一人でしてろ」
頑なにして、ソファーから腰を浮かせる気はないらしい。妙にふんぞり返った彼にリコはジト目で睨みつけた。
「いくら夏休みとはいえ、こんな昼間からゴロゴロしとるとダメ人間になってしまうぞ」
寝っころがってテレビ見るのが趣味のやつに言われたくないし、お前は人間でもないだろ、とチラリと思ったが、口に出さなかったのは彼の一抹の優しさからなのかもしれない。
「りんご、ごりら、らっぱ、ぱせり、りまんかいりゅう、うり、りゅうせい、いかり、りすと、とり、り、り……」
「……なんで『り』で自分追いつめとるんだ？」
一人しりとりを勝手に始めた藍は「り、り…」とぶつぶつ唱えながら、立ち上がり、二度寝しよう寝室に向かいはじめた。それを流し目で見たリコは、ため息をつきながら彼の背中に呼びかけた。
「いっしょに行かぬというなら、ぬしに授業中の暇潰しにボールペン解体してたら中のバネがどこかに飛んでしまって使い物にならなくなる呪いをかけるぞ」
「……なんでそんなにピンポイントなんだよ」
「それが嫌ならプリントの下の消しカスに気づかず、書いてた文字がグニャっとなる呪いじゃ」
「お前の使える呪いはろくなもんがないな」
「若ハゲになる呪いや、銀紙を奥歯で噛んでしまう呪いなんかもあるが」
藍はぴたり、と動きをとめ、ゆっくりと振り返る。少しだけ表情がこわばっていた。
「よし、出かけるか」
こうして、彼のたまった倦怠感を蒸発させるための外出が決定したのだった。

「まず出かけるにしても行き先を決めなくてはならない」
「むぅ、そういうものか。我は新鮮な空気と初夏の爽やかな陽光さえ浴びれればどこでもよいが」
「そのまま太陽光で灼かれて成仏してくれればいいんですがね」
「太陽を克服した究極生命体（アルティメットシイング）の我に不可能はないわ」
「そのまま考えるのをやめてくれればいいのに……」
「うぅ〜」
イジワルを言われて悔しかったのか、ポカポカと藍の背中をうなりながらリコは叩いた。
それをうざったそうに回避しながら、藍はリコの頭をバスケットボールを掴むように抑えつけ、ころりと真面目な顔つきになった。
「目的地も決めずにぶらぶらしてみろ。グダグダになってヘトヘトになってボロボロになるだけだ」
「よいではないか。りこ散歩というか、あい散歩。楽しそうじゃ」
どうやら某番組タイトルを文字ったらしい。語呂が悪かったので気づくのに数秒かかった。
「ああいうのは大まかにプランが決まってんだ。一から全部タレントがやるわけないだろうが。茶番だよ茶番」
「む、わからぬではないか。ぬしがディレクターというわけではあるまいし」
「それはそうだけどよー」
「なら決まりじゃ。昼下がりの優雅な一時、ぶらり街に繰りだそうではないか。久しぶりのデートじゃ」
「いや、お前が一緒ならデートじゃなくて心霊スポットで肝試しみたいなもんだろ」
「ほう、面白い意見だのう。いいのじゃよ？ぬしのご要望通り、背筋も凍る肝試しに変更しても」
「冗談です」
般若という表現がぴったりともえもいわれぬ表情で、静かな怒り

の気配（おそらく妖気）をただよわせる彼女に逆らうことを、ただの男子高校生ができるわけがなかった。

まだ7月とはいえ季節は夏。　売り言葉買い言葉で外に出た彼は、早速自らの早急すぎる甘い判断を悔いていた。

目眩を起こしそうになる殺人的直射日光の下、少年は溶けだしたアイスのようにドロドロと汗を流しながら灼熱のアスファルトをけだるそうに歩く。

音もなく流れる小川のような優雅な風体で隣を歩く座敷童を見てみると、涼しげな表情でまったく汗をかいていなかった。

そりゃ、妖怪だからなぁ。

静かにため息をついて、（このままシャーマンキングでも目指そうかしら）と、彼女に聞こえないように呟いた。

「むっ、なにか言うたか？」

「外ではあまり話かけるなと言っただろリューク。お前の声は他人に聞こえないが僕の声は聞こえるんだ」

「は？リューク？なんじゃ？」

「いや、なんでもない」

お前の知り合いにも死神がいただろうが。

というわかりづらい呟きを残してから、彼は首を回した。

前後左右まんべんなく視線をめぐらせてみたが、人通りは少なく、独り言を呟いていても怪しまれることはないだろう。

それを確認してから藍はリコに話かけた。

「お前は汗をかかないんだな」

「我には温度があってないようなものだからのう」

「変温動物なのか。トカゲみたいだな」

「……まあ、なにも言うまい」

「つう、ことはだ」

ぐっ、と彼女の体側でぶらぶらしていた左手を右手で掴む。

「んなっ！？」

「おおっ、予想通りヒンヤリしてて気持ちいー。夏には持ってこいだな」
「はなななな」
はたから見たら手を繋いでいるようにしか見えないのだが、幸いにして座敷童の少女が他人の目に映ることはない。よって人目を気にせず手を繋ぐ（涼む）ことができる。
右手から伝わる彼女の体温は、冷えた鉄を触っているように彼を涼ませてくれた。
「はなな、ななにをす、するんじゃー！？」
「あ？だって今お前他人には見えないんだろ？」
「それはそうじゃが、いきなりおなごの手を許可なく掴むなど」
「じゃ、いいじゃねぇか。減るもんじゃないし」
「むぅーー」
見る間に赤く染まっていく彼女の頬に、クエスチョンマークを浮かべながら、さらにギュッと彼女の手を握った。
「むにゃ〜〜」
「（冷たくて）気持ちいー」
「あわわわ…」
「あれ、あんま冷たくなくなってきた」
体温が移ったのか、とぼんやり思った彼の中には、座敷童が照れるという概念が存在していなかった。
「ば、ば、ばかものぅ……」
「なんだよ、弱ったような声を出して」
「いきなり握りを強くするものがあるか、こ、このうつけめ」
「はぁ？」
彼にしてみればいきなり文句が言われたのだ。
そうか、そうだよな。
妖怪とはいえ、女の子。彼女の言うとおり、俺の行動がバカだったのかもしれん。
とはいえ、明らかに狼狽する少女に逆ギレを起こすわけでもなく、

藍は素直に反省した。
「いや、悪い。いきなり不純な動機で（涼を得ようと）手をつなぐのは失礼だったな」
「あ……」
少年は言うやいなや彼女の左手から手をはなした。
「ち、ちがう！ちゃうのじゃ！」
「え」
繋いでいた手をはなし、自由にした右手で自らの顔を仰ぐ藍に、リコは顔を真っ赤にして半ば怒鳴るように叫んだ。
「て、手をつなぐときは！のう」
「ん？」
「こ、こうするんじゃ」
彼女は無理やり彼の右手を取って、自らの左手に絡ませた。藍の指の隙間に、リコの指がくるように、……いわゆる恋人繋ぎというやつだ。
「べ、べつに繋ぎ方は、なんでもよいがのう。やはり、こうでなくては。うふふ」
「？」
俺としては彼女にはもう涼がないから、手を繋ぐ必要はないんだが、
と喉まででかかった言葉を彼はぐっと飲み込んだ。
リコが幸せそうに微笑んでいたから、野暮を言う気がなくなったのだ。
彼も彼女につられるように静かに微笑んで、二人同じ歩調でとぼとぼと歩き始めた。
「んで、どこ行く？」
「我は、どこでもよいぞ。今のままでも十分幸せじゃ」
「意味がわかんねーやつだな」
口ではそう言いつつも、リコの言ってる意味が少しわかった気が

した。

夏のまほろば　後

学校周辺は住宅街になっており、遊びたい盛りの学生にとってはいささか辛い立地条件になっていた。だから、生徒の多くは、電車通学じゃなくても、放課後のランデブーを楽しむために、わざわざ栄えた駅前に行くのだ。

ここならば、ゲーセン、カラオケ、ボーリング、とりあえず、若い欲求を満たすことができる。

藍はよく男友達とともに用もなくぶらぶらするその目抜き通りを、今度は自分のカノジョといっしょに歩いていることに多少違和感を感じていた。

腐っても、隣を歩くのは、女の子だ。いくら妖怪だと割り切っていても、気持ちはふわふわと浮ついてしまう。

「アレだな。俺だけ水木しげるロードだな」

「なにを言うとるのかわからんが、バカにされているのはわかった」

自分の口からオート設定で出るようにしている憎まれ口にもキレがない。

調子狂うな。

半ひきこもりにとって夏の日差しは、自分の中の邪な気持ちを蒸発させていく。

「それでどうする？映画？それともカラオケとか」

「映画はさんざん観たし、最近の歌はよくわからんから……。そうさのう」

少女はやがて朗らかな表情で続けた。

「服が欲しい！」

「服？」

「うむ。我はろくな服を持っておらぬゆえ、洋服など、西洋の文化

に触れてみたいんよ」
「大正時代の人かよ」
「近いものはあるやもしれん。サ〇エさんでいうところのフネさんみたいなものじゃし」
「あー、お前着物ばっかだもんな」
リコの着替えはすべてが和服であった。
「じゃから、ぶってぇく（語尾あがる）、とやらに行こうではないか」
「ブティックだろ。なんでカタコトになんだよ。今更カタカナ語が苦手とか変な設定つけんなよ」
「エイゴワカリマセェーン」
「外国人の物真似なら、英語はわかれよ！」
激しく声を荒げながら、彼は往来激しい歩道を行く。
通りすがりのおばあさんが不審者を見るような目でちらりと彼を見た。
「って、そうだよ。今お前他人には見えなくなってんだろ？」
「うむ」
「あー、くそ。どんな理屈だよ。俺だけ薬中みたいになってんじゃん」
「座敷童流妖術熱光学迷彩。名を冠するならスケルトンエフェクト」
「は？」
「空間歪曲によって光の進路を変更させ、空間認識能力を欠如させる。別名カムフラージュシステム。この技術を体得するにはアメリカ海軍並みの体力、山伏なみの精神力、そして生まれもったスキルが必要」
「急になんだ」
「理屈を説明せいと言うから」
「……絶対嘘だろ」
「よくわかったの」
あっけらかんとしながら座敷童は、視線をキョロキョロと動かし、

「おし、藍。あの店にしようではないか」
「うぇ」
少女趣味のファンシーなお店が指差した。看板にはショッキングピンクがふんだんに使われており、容赦なく網膜に刺激を与えてくる。たとえカノジョといっしょでも、男子が入るのははばかられる雰囲気だ。
「おい、俺はお前のショッピングに付き合うとは言っていないぞ」
「なんじゃとこの甲斐性なし！」
「いや別に服の一着や二着なら買ってやらんこともないが……」
あまりの言い草に沸き立つ殺意を抑え、再びリコが指さした店を見やる。
「これはないだろ。見ろ、店の雰囲気が少女漫画みたいじゃないか」
「上等。漫画のようにステキな恋しようではないか」
「……いや、あの」
キラキラと輝かせる彼女の瞳にはショーウィンドウに飾られたクマのぬいぐるみが写り混んでいた。
その他にも、煌びやかな色使いの小物がたくさん並んでいる。
「勘弁してくれ！お前と違って俺は他人の目も気にしなくちゃいけないんだぞ」
「んじゃ、我が実体化でもするかのう」
「違う！あーゆーお店は男子にとっては罰ゲームなんだ。もはや拷問。女性下着コーナーでひとりぼっちという状況とどっこいどっこいだ」
そもそもファンシーショップって、小物を売るとこだから洋服は取り扱ってないだろ、と彼が続ける前に
「ぶぅー。じゃいいもん。一人で見てくるから。藍はここで待ってればよい」
「あ」
唇を尖らせて、不機嫌にそう言い残すと止める間もなく、リコは自動ドアに吸い込まれていった。

「……」
あいつだけじゃなにも買えないし、買い物は見てるだけじゃつまらないだろ。いや、でもしかし、ここは……。
再度看板を見上げる。目眩を起こしそうな鮮やかな彩りがそこにあった。
大人しく待っとくか。
そう心に無理やり言い付けた時だった。

「はい、もしもし」
店から自動ドアをくぐって、ケータイを耳にあてたポニーテールの女の子があわただしく出てきた。
どうやら店内で通話するのはマナー違反と判断したらしく、一旦店の外に出て電話をとったらしい。
「おっ」
思わず声を上げる。
スタイルは幼すぎてあまり良いとはいえないが、脚フェチの彼としては見逃せない美脚の持ち主だったのだ。スカートからひっそりと覗く両脚に見とれる。
（目の保養ですなぁ）
オッサンみたいなことを思いながら、気づけば誘蛾灯に誘われる虫が如く、お店に入るフリして、もっと近くで眺めようと彼は歩みを前に進めていた。
思えばここ最近、透けてたり蛇足とか、ロクなもんを見ていない。久しぶりの外出なんだからリフレッシュしなくちゃな。
「二度と電話してくんなー」
なんだかんだで店の敷居を跨いでしまった彼に、すれ違いざまケータイで通話を続ける少女の声が耳に届いた。
妙にのんびりとした口調だが、内容は穏やかではない。
別れ話でも、してんのか？
ちらりとそう思いながら、関わりあいになるのは得策ではないと

判断した彼は、先に店に入っていった座敷童を探すため視線をめぐらせた。

店内はそこそこ賑わっていた。客層は小中学の女子が大半で、新たに入店してきた男子に、店内の視線は自然と「うわぁ……」と、ぺちゃんこになったカエルの干物でも見るようなものになる。

その状況に耐えきれず、顔を真っ赤にして、店の隅に移動した。

ともかく座敷童を見つけなくちゃ。

首を回して店内をぐるりと見渡す。

「ん？」

座敷童は見つけられなかったが、代わりに知り合いらしき人物を視界に捉えた。

「あれは、たしか」

喉まででかかった名前を考えながら、藍は棚をすりぬけて、その知り合いに話かけた。一人よりも気を楽にするためだ。

「こんにちは」

「……」

話かけられた少女は手に持ったコップから目線をちらりと彼に移し、眉間にシワをよせた。

「誰ですか？」

「あれ、間違ったかな。藤吾の妹さんじゃない？何回か会ったと思うんだけど」

「兄さんの知り合いですか。申し訳ありませんが、記憶に、」

と、言いかけたところでピタリとそのすべての動きを静止した。やがてわなわなと震えながら、

「橘、藍っ…！」

「……はい？」

親のカタキに出会ったみたいに憎々しげに名前を呼ばれた。

白江藤吾の妹、白江桃里。ようやく思い出したその名前を、藍は落ち着かせるようにゆっくりと言った。

「どうした、モモちゃ」
「やめてください」
「は」
「なにを持ってして『モモちゃん』などとふざけた呼称を用いるのですか」
「あ、いや悪い。藤吾がいつもそう呼んでるから、つい。えーと、なんて呼んだらいいかな」
「呼ばなくていいです。私も橘さんのことは『あなた』としか言いませんから」
「あ、そう……」
その態度に毒舌のあやめを思い出しながら、彼女の兄である藤吾の言葉を思い出す。
思春期なのか僕に冷たくあたるんだよね。
どうやらお前にだけ特別冷たい、ってわけじゃなさそうだぜ。
男たるものそういった負の感情を解きほぐせてなんぼのもんじゃい！
将来の美が確約されたも同然の桃里をみて、あわよくば、未来のお嫁さん候補に！という邪な気持ちが完全にないわけではないが、ほとんどが藤吾の友情に対しての感情からである。
「なんだかトゲトゲしいなぁ。もっと和やかに話そうぜ」
「その必要はないと思います。兄さんの友人とはいえ、私の友達ではありませんから」
「まあ、そういうなって。今のうちからコミュニケーションのなれておかないと将来困るぜ」「……そういうものでしょうか」
警戒心よりも敵愾心を感じながら、藍は出来るだけ優しく続けた。
「そうそう。ムスッとしてるだけじゃ世界は広がらないぜ。藤吾も悩んでたみたいだし」
「兄さんが？なんて？」
「ん、いや、妹が、他人に冷たいって」
「……」

しばし無言だったが、桃里は息を小さくついてから言った。
「それは兄さんに対してだけだから安心して、とお伝え下さい」
「……いや、同じ屋根の下暮らしてるんだから、自分で言いなよ。それにモモちゃん、俺にだって冷た」
ギロリと睨みつけられた。どうやらあだ名で呼ばれたのが気にくわないらしい。
「わ、悪い。ま、まぁ俺にも態度が微妙に冷たいしさ」
「それはあなたが前科者だからです」
「前科？」
桃里はコップを棚に戻した。
「随分前ですけど、あなたが兄さんをそそのかして骨折させたことがあったじゃないですか」
小学校の頃だったか。当時同じクラスだった藤吾と藍は、錆びて放置された鉄塔を秘密基地と称し遊び場にしていた。
ある時、なにを思ったか「鉄塔早登り大会」を開催し、負傷者を一名だしてしまったのだ。ひとえに腐食が進んでいたのが原因だったが、言い出しっぺの藍は責任を多少なりとも感じていた。藤吾は危険だからよそうと最後まで反対していたのに。
「あー、あったあった、う～ん懐かしい」
まあ今となってはいい思い出だ。藤吾にはキチンと謝り、病院にも足繁く通った。友情は崩れることなかった。
小学校卒業後、高校で再会した時は、ほんとに嬉しかったし。
「あの時、大変だったよなぁ。君は、おにいちゃんが死んじゃう！死んじゃいやだぁ、ってベットの藤吾に泣きつくし」
「ぐっ」
桃里は過去の思い出が蘇ったのか顔を真っ赤にしながら、
「そ、それで今日はどうしたんです？あなたはどっかに旅行に行ってる、って設定では？」
ごまかすために話題を変えた。
「藤吾から聞いたの？」

こくりと頷く。
そうだった、俺はそう嘘をついたんだった。
「あれ中止になったんだよねー」
「正直に仰ってください。元からそんな予定なかったんでしょ？」
「あー……」
なんでこんなに鋭いんだ。
と、ぼんやり思いながら、図星をつかれ、言い訳する気を失ってしまった。
「実は」
「やっぱり」　納得が言ったようにこくりと頷きながら、桃里はさらに続けた。
「それじゃ、兄さんにアレをあげたというのはどうなんですか？」
「あれ、ってなんぞや」
「あれはあれです。ほら、……あの」
「？」
「汚らわしい、すこしその、アダルトチックな」
急に彼女は蚊の鳴くような声量で、
「えっちビデオ……」
と呟いた。
「あー……」
藤吾のバカっ！家族に見つかってんじゃないっ！
といずこかにいる（おそらく夏期講習中で学校にでもいるのだろう）白江藤吾を心の中で罵倒する。
「あれは、ね」
言い訳しようか、正直に言おうか悩んでいる彼に、
「のう、この童女は誰ぞ」
「ぬおっ」
ひょこりと彼より先に店に入った座敷童が顔をだした。
「質問に答えて下さい。どうなんですか」

板挟みというのはこういう状況のことを言うのか。
桃里はまっすぐ彼を見つめて、次の言葉を待っている。
なんて返事しようか逡巡する彼の横にはリコ。
他人の目に捕らわれることのない座敷童は、あれほど入店を拒んでいた藍がいるのが嬉しいのだろう、笑顔だったが、藍の表情は晴れなかった。
「なんで黙るんです」
「あー、いや、その」
ここで正直に、藤吾にプレゼントしました、とぶっちゃけるのは簡単だ、しかし、
ちらりと横を見る。
桃里と藍とで視線を往復させる座敷童がいた。
こいつに、アレを処分してないのを知られるのは、マズい。あの時の恐怖だけは避けなくてはならない。どうにか誤魔化しながら、白江（妹）を宥めなくては。
「なんのことやらー、さっぱりー」
「本当ですか？兄さんが嘘をついているというんですか？あなたは兄にアレをあげてないとあくまで主張するんですね？」
「は、はい」
勢いに押されるように、彼は首を縦にふった。
やりとりがよくわかっていないリコは小さく首をひねる。
「兄さんにアレをあげてない証拠はないんですか？」
「は、ぁ！？やってないことを証明なんてできるわけないだろ」
嘘だけど。
と、なぜだか、興奮している白江（妹）１００％中の１００％に半ば怒鳴るように諭した。
「疑わしいです。兄を信用するわけではありませんが、あなたの言動は的を得ていない」
「いやだって、お、おれ、付き合ってる人いるし」
しどろもどろになりながら、半分嘘で半分ほんとのことを口から

吐き出した。
その言葉に、リコは嬉しそうに、桃里は少しだけ表情を曇らせた。
「そう、ですか」
「……」
嘘をついた罪悪感が彼につきまとう。
ごめん。と、空に笑顔の白江藤吾の顔を浮かべ敬礼する。
「その隣の方がカノジョさんですか？」
「！」
なにげなく桃里の言った言葉で藍とリコは目を見開いた。
こ、こいつが見えてるのか！？
衝撃でよろけそうになる藍の耳元でリコが囁いた。
「この童女、どうやら霊視できるようじゃの」
「ま、まじか。今のとこ、お、おれおかしな行動とってないよね？」
「大丈夫、大丈夫じゃからパニックになるな。平静としなくてはのう」
「あ、ああそうだ。こういう時は素数を数えて落ち着くんだ！2…4…6…」
「お、落ち着け藍！それは偶数」
「？」
桃里は二人の摩訶不思議のやりとりにクエスチョンマークを浮かべる。
やがて、どうにか落ち着いたらしい藍は平坦に、
「うん一応そう」
「そうですか。美人さんですね」
ロボットのように抑揚なく言って頷いた。桃里は今度はリコを見ながら続けた。
「でも随分と変わったカノジョさんで」
「え、ど、どこが！？誰がどー見てもピチピチギャルではないか！」
「いえ、そういうことではなく……」
も、もしかしてこいつの正体を妖怪だと見破って、

だとしたら白江家の血統は優秀とみえる。
死に神あやめも言っていたではないか！白江藤吾の潜在霊力は半端ない、と。
「だってファンシーショップに着物で入る人なんていませんよ」
「……」
ないかぁー。
「そうかのう。ううむ、言われてみれば、たしかに。もしかしてちょっと浮いてるかも」
「えぇ、少しだけ」
うん、浮いてるよね。
なんか重力から解放されてるよね、君。

藍はがっくりと肩を落とし、静かにため息をついた。
隣では、もう打ち解けたらしい、桃里とリコが仲良く話をしている。
気づけば手持ち無沙汰になっていた彼は、棚に陳列してあった髪留めをひょいと持ち上げ、ためつすがめつした。
（……今更、リコを追い払う意味なんてあるのだろうか。白江家に頼らなくても、どうせ）
ファンシーとはかけ離れた鼈甲色の髪留めは冷房で冷やされ、ひんやりと冷たくなっていた。
リコの冷たい手の平を思い出す。
（どうせ、もうすぐアイツとはお別れだ）
当初彼女と約束した期間は１ヶ月、その期限はあと１０日もすれば切れてしまう。
もとからあってないような繋がりだ。長い人生で考えれば、１ヶ月なんて、短かすぎて記憶にも残らない。
でも、

藍は、会話に花を咲かせるリコと桃里に気づかれないよう、その髪留めをレジに持っていった。
高校生の１ヶ月は、貴重なのだ。
ぼんやりとそう思った。

「それではのう。なかなか参考になったぞ」
「ええ、私も楽しかったです。また会いましょう」
用を済ませたので、出るように促したが、実際にリコが動くのに数分は要した。どうやら桃里とリコのフィーリングはいやにピッタリあっていたらしい。
女はこれだから困るよなぁ、とろくに知らない異性について思いながら、ようやくファンシーな世界から解放された藍は夏の青空を気持ちよく仰いだ。
「桃里ちゃん大変大変！」
表で電話していたポニーテールの女の子と自動ドアですれ違う。どうやら彼女、桃里の知り合いらしい。
ちらりと横目で見ながら、そのまま足を止めることなく、彼は歩みを進めた。

「俺は雰囲気とか読めないからよ」
「急になんぞ」
「早めに渡しとくわ」
彼はにこりと笑って、買ったばかりの髪留めをポケットから取り出した。
プレゼントに気を配るほど細かい性格ではないにせよ、一応は初プレゼント（数珠はノーカン）、なにかしらのシチュエーションを用意すべきだったのかもしれないが、そんなものなくてもリコなら喜んでくれる、と短い付き合いで彼は理解していた。

ちなみにポケットにはもう一つ、白江藤吾にお詫びの為に買った、不細工なキーホルダーが入っている。
トンファーを持ったアルマジロの形容しがたいブサ可愛さを、藤吾が理解できるとは思えなかったが、店のラインナップからわりかしマシなのを選んだ結果なんだから勘弁してくれ、とお空に浮かぶ藤吾に親指をたてる。
桃里ちゃんにいらんこと吹き込んだかもしれんが、許してくれ！アーメン！
この思い、夏期講習を頑張る藤吾にとーどけ！

白江藤吾は

彼の祈りに応えるように、その日なかなか酷い目にあっていた。

15　勇気はあるのか？

朝は何度でもやってくる。
夏休みにはいって一週間、自堕落の生活に体が悲鳴を上げているが、習慣となった夜更かしをやめるなんて簡単にはできやしない。
その日も昼過ぎに目を覚ました藍は居間にいるはずのない人物を見つけて凍りついた。
「な、なんでテメーがここにいるんだ！」
「今頃目を覚ますだなんて、不健全ですね」
「質問に答えろ、もしくは、そのまま消え果てろ」
できることなら二度とお目にかかりたくないと願っていたヘビオンナことアヤメが我が物顔でソーメンをすすっている。
「やっぱり夏と言ったらソーメン。何日も続けば飽きるものだけど、一日目の私にとっては贅沢なごちそうよ」「んなこと聞いてないんだよ！俺はなぜここにいるのか質問したんだ！」
「リコー、麦茶おかわり」
藍の質問なぞ無視してアヤメは空っぽになったコップを、キッチンに向かって高く上げた。
しばらくしてから元気のいい返事とともに、奥からリコが顔を出した。
「おろ、藍、おはよう。だめじゃぞ、夏休みだからと言って不規則な生活は」
「お、おぉ」
「いまおぬしの分のソーメンもってくるからちょっと待っとれ」
リコは平然とそういうとアヤメからコップを受け取ってまた奥に引っ込んだ。
「早めに麦茶量産体勢になることをオススメするわ、今年の夏は暑いから」
アヤメは涼しい顔でキッチンにむかったリコにアドバイスしてい

る。
「って、てめーが何様のつもりだ！」
「なによ。優雅な午後のティータイムを邪魔しようというの？」
文字通り蛇にらみ。麦茶でティータイムとはおかしな話だ、と思った言葉は彼女の冷たい瞳で発する前に殺された。
「それともオレサマとでもこたえてほしいのかしら。いやね、そんな微妙なジョークいう気になれないわ」
「違うわ！テメーが勝手に人んちの敷居をまたいでんのが気に食わないんだよ」
「あらあら・・・」
英国の貴婦人を思わせる優雅な微笑を浮かべながら、アヤメは自身の下半身を指差した。
「私は蛇だから、跨ぐだなんて器用なマネできませんよ」
蛇の尾が蜷局を巻いていた。
「ら、埒があかねぇ！リコ！ソーメンは後でいいからちょっと来てくれ」
のらりくらりと箸を動かすヘビオンナより、料理上手の座敷童のほうが日本語が通じると判断した藍はキッチンに向かい大声を挙げた。
それに応えるように麦茶が入ったコップとひとり分のソーメンの器をもったリコがゆっくりともどってきた。
「そないな大声出さずともきこえておるわ。どうしたんじゃ？」
テーブルにそれらを置いて、夏の暑さにだれるように座りながら、リコは首だけを藍にむけた。
「なんでこいつがいるんだよ」
「む？アヤメから聞いてないのか？」
聞いたけど答えてくれないんだよ、とおいしそうにソーメンを食べているアヤメを睨み付ける。もちろん藍の視線のナイフは、彼女に何のダメージを与えない。
「なんでもアヤメの住処の近くで小学生が肝試しを開くんだそうで、

うるさくて眠れないんだと」
「肝試し？コイツどこにすんでんだよ」
「本人に聞けばよかろう。目の前におるんだから」
それもそうだとアヤメを見やる。食べ終わったらしく小さく手を合わせていた。今なら満腹のご機嫌から質問にも答えてくれるだろうか。
「きいてました？アヤメさん？ヘビには耳がないんでわからなかったですかねぇ」
ここぞとばかりに嫌味を言う。それにすこしムッとした感じにアヤメは答えた。
「鎮守の森よ」
アヤメ対策にヘビに関してネットで引っ張ってきた知識を披露できた藍は満足げに一度だけうなずいた。
「耳がないけど音はちゃんと聞こえるんだ。それでそこはドコにあるんだ？きいたことないが」
「ここから北へ７０西へ８０行ったところにあるわ。迷ったら”おうじょのあい”をつかいなさい」
「俺はロトのしるしがほしいわけじゃない！」
適当なごまかしに冷静につっこまれ、どうすればいいのかわからなくなったアヤメはため息をついてから正直に続けた。
「小学校の裏山のことよ。今じゃすっかり忘れられてるけどあの辺りにはちっちゃいけど神社があるの」
「あー、あのエロ本小屋の」
「？」
一瞬にして空気が重くなったのを感じた藍は即座に話題を変えようと手足をバタつかせた。リコが眉根を寄せてこっちを見ている。
「いやでもあの辺家ないだろ。ゴミ捨て場になってた気がするぞ」
「だからたまったもんじゃないのよ。住んでる私のことを考えてほしいわ」
「……」

「不気味な雰囲気が漂ってるから近所の子供が集まってくるし、ひどい騒音災害だわ」
お手上げといったように肩をすくめアヤメは愚痴を続けた。
「不法投棄を失くす為にパトロールの強化が必要とかなんとか言っちゃって、夜中に納涼会を兼ねた肝試しを行うんだもん、ひどい話よ」
「あのさ、ひょっとして、なんだけど……」
気まずいことを尋ねる自覚があるのか、藍はそっとつぶやくように尋ねた。
「お前、もしかしてホームレスじゃね？」
「……な、なにを根拠に」
「だってあの辺りマジ家ないもん」
空気が固まった。
自覚はあっても、空気は読めない、彼の短所の一つだった。
「鎮守といったでしょ！私があの辺一帯のヌシなのよ！ｈｏｍｅｌｅｓｓとかじゃないわ！」
「アルファベットのかっこよさで誤魔化そうとすんなって。大丈夫、貧乏でも生きてればきっと良いことあるさ。根拠はないけど」
「だから家ならあるって言ってるでしょ？あなたの耳は飾りなの？」
「固定資産税払ってますか？」
「……ルールに縛られるような生き方はしたくないの」
おたくのお友達も似たようなこと言ってたぞ、と座敷童に非難めいた瞳をむける。
「いやでも、ぶっちゃけ家なき子だろ。だからずうずうしくも他人の家に転がり込んでんのか」
「お山の大将がなにを偉そうに……」
「それに家があるったって、どうせ鬼太郎の小屋みたいな昔懐かしの藁葺き式だろ？妖怪ポストにヘビオンナの除霊頼みたいんだけど」
「リコ・・・、悪いことは言わないわ。早くこのネズミ男みたいなヤツとは別れなさい」

横で二人のやり取りをボウと見ていたリコは、生あくびをかみ殺していた。
「俺を愉快な妖怪一家に加えんなよ」
的外れの発言は妖怪二名の心には響かない。
「ともかく」
話に区切りをつけるため短くそういってからアヤメは語気を荒げた。
「昨日は耐えられたけど二日連続はさすがの私でもむりなの。だから今日はお世話になるわね、リコ」
「うい。それにしても2日続けて肝試しとは、最近の子どもは元気じゃな」
こっくり頷いた座敷童に危うくだまされるところだったが彼は肝心のことを思いだしていた。
「ここの家主は俺だよ！」
「じゃ、今夜泊めてもらうわね」
しれっとアヤメは彼を見ずに言った。
「ついでみたいに許可とるなよ！駄目だよ！前に言っただろ、二度と来るなって！」
「お泊り交渉失敗かー」
「おめぇは黙ってろ！」
某番組のナレーションのような声を上げたリコを一喝してから藍は続ける。
「ヘビはヘビらしく墓石に下で丸くなってろ。ぜぇぇぇったいに泊めないからな！」
ナイフを持って寝室に乱入してきたり、高枝切ばさみを平然と振り回すような人物を快く迎えるやつがいたらそれは本物馬鹿だ！
藍は鼻息荒く言い放った。
「それにテメェもバケモンなんだから、脅かしてやりゃいいじゃねぇか」
「前にそれやって怪物大王から怒られたのよ」

「怪物大王？」
「怪物くんのオヤジよ」
からかわれていることに気がついているが、今更相手にするのも疲れた。寝起きからすでに披露困憊である。
「まあ、私の安眠を妨害するというなら死に神の盟約に則って呪殺くらいなら許されるわよね」
「おいちょっとまて、なんの話をしている？」
「私を怒らせたらどうなるか、あのクソガキどもにわからせてあげるわ。楽に死ねると思わないでね。ホラー映画でも夜バカ騒ぎする若者は惨たらしく殺されると相場が決まっているのだから」
「え？は？」
混乱極める藍の耳元でリコがぼそりとささやいた。
「楽しいはずの肝試しがぁ、惨劇の夜になるとはぁ、このとき誰が予想できただろうかぁ」
心霊番組のナレーションのように鼻につくしゃべり方に藍は不機嫌そうに眼がしらを抑えた。
「でも、藍が気にすることはないのじゃ。われらの知らぬところで子供が一人二人、死神に導かれたところで遺族は誰も藍がアヤメを止めなかったからだとは思わぬよ」
「何が言いたい？」
「本日未明、納涼会のイベントの肝試し中に凄惨な事故が起こりました。原因は不明。死者行方不明者はイベントに参加していた小学生十数名。なぜひと夏の思い出がこのような惨劇をもたらしたのか、警察には捜査の進展が求められます」
「おまえは…、だまってろ……」　ニュースキャスター風のリコのつぶやきに、藍はアヤメの宿泊を認めるしか残された道はなかった。

16　秒速0．5センチメートル

お泊まり交渉成立。なんだかんだで藍は自らの意思とは反して、あやめの宿泊を認めることとなった。
まあ1日だけの辛抱だ、と無理やり自分を納得させ、リコのこしらえてくれたソーメンに舌鼓を打つ。
口内に広がる夏の風物詩は、彼の高ぶった気分を鎮めるいい材料となった。
いつもならお昼のニュースを見ながらとる昼食だが、テレビは二人に占領されている。ブラウン管には一昔前のゲームが映しだされていた。
「黄金銃はなしにしようって」
「だったらロケランも禁止にすべきよ」
死に神と座敷童が、テレビゲームに興じるさまは、人畜無害といったところだったが、彼は騙されるものかと、常に気を張っていた。
少なくともこのヘビオンナは油断ならない。
食べおわって箸をおき、手を合わせる。ペロリと平らげた器を流しに置いてから、ソファーで横になろうと居間に戻った彼に、チョップでリコを殺したアヤメが（ゲームの話）画面から目を放さずに言った。
「ポテトチップスが食べたいわ」
「あ？」
「ないの？ポテトチップス？」
「ねぇよ」
こいつが俺にものを頼むなんて珍しいな、と思ったが、残念ながらその望みを叶えることはできない。
「だったら買ってきなさいよ」
「……」

何様だよ、と本日何度目かの質問をグッと飲み込んで彼は自らの意思をキッパリと言い放った。
「断る。なんで俺がそんなことしなくちゃなんないんだ」
「私とリコは手がふさがってるの。だったら暇なあなたがパシ、……お使いに行くのが道理じゃないの？」
「パシリって言おうとしただろ！それにゲームやってるやつは忙しいなんて単語使っちゃだめなんだぜ」
「いいじゃない、お客様をもてなすのは家主の度量の見せどころよ」
それもそうだな、と納得しかけたが、そう簡単に口車に乗るわけにはいかない。
「客人の手土産がないってのも問題だと思うがな」
「あなたがネズミやカエルの死体を欲しいというならいくらでも用意するわよ」
「ヘビ目線で考えるなよ。もっとこうあるだろ、ハムとか」
「あらやだハムじゃ共食いになっちゃうじゃない」
「もうこの話は止めよう、気分が悪くなるだけだ」
無視するようにソファーにごろんと横になる。食ってすぐ寝ると牛になるとはよく言うが、午睡なら許されよう、字的に。
「私はいまポテトチップスが無性に食べたいと言ったのよ。はぐらかさないでちょうだい」
「ゲームやりながらポテチ食ったらコントローラーがベタベタになるだろうがよ」
ロケランをリコに浴びせながら（ゲームの話）アヤメはニヤリと片方を釣り上げた。
「むしろそれが目的よ」
「全国小学生ケンカの原因ナンバーワンをここで発動しようというのか！？」
「注意されたらカーペットで拭くから安心して」
「抜かりないな！」
おやつを要求する死に神の表情は涼しげでいまいち感情がつかめ

ない。
なにを考えてるのかわからなかったが、ここでボーとしてるのも暇だし、たまには彼女の言う男の甲斐性を見せてやろうと財布を持って立ち上がる。
「仕方ねぇから、差し入れ買ってきてやる。感謝しろよ」
「素敵、惚れちゃう」
抑揚もない機械のようにそう言われたが、やっぱり顔はいいので少し照れてしまう。
「あやめ、調子に乗るでないぞ」
「あら、こわい」
自ら仕掛けたモーションセンサー爆弾に引っかかりながら（ゲームの話）リコは頬を膨らませた。
ふん、差し入れするとは言ったが、その買い物のラインナップを俺にまかせたのがテメェらの敗因だ。ほくそ笑みながら玄関から近所のスーパーに向かい歩みを進める。
なんだかんだいってゲームの仲間ハズレという状態が微妙に寂しいのだった。

唯一の人間である藍が出ていった室内には、けたたましい蝉時雨が窓ガラスを透過して響いているのみで、アヤメとリコの間にロクな会話がなかった。
ただ黙々と作業のようにボタンを操作し、画面の中の登場人物を動かすだけだ。
何回かゲームの中で殺し合いをした後、リコは、ゆっくりと、下手したらクーラーの稼働音に負けるのではないかという声量で呟いた。
「限界、か」
テレッテレー、ブラウン管のスピーカーから、死亡時に流れる悲壮な音楽が奏でられた。
リコはリスタートを押さず赤く染まる画面から目をそらした。

「待たせたな」
「随分と時間がかかっておったようじゃが大丈夫だったか」
「はは、心配無用だぜ」
３０分ほどで戻ってきた藍は、スーパーの袋を戦利品のように高く掲げた。ニヤつきながら袋から取り出したポテトチップスをアヤメに放り投げ渡す。
怪訝そうな表情でそれを受け取ったアヤメはパッケージをみて毒づいた。
「しお味ね……。私はコンソメがよかったわ」
「まあ、よいではないか。我はなんの味だろうと好きじゃぞ。藍、ありがとの」
「リコがいいならいいけど」
ヘビ女め、いまに見てろ。自分の苦労をちっとも労わないアヤメに怒りを感じながらも、にやけは収まらない。
続けて袋から塩昆布をとりだす。
「あら、いいツマミね。なかなかのチョイスだわ」
「あとこれ」
おもちゃのカエル。
「？」
カタツムリ。
「なんじゃそ……って、」
塩（１パック）。
「さいご露骨じゃのう」
藍の考える座敷童とヘビの弱点だった。
「なんど言えばわかってくれるのか……。我はあれほどクリスチャンだと」
あきれ顔で塩昆布を咀嚼するリコに、無駄金をはたいてしまったことを悟った。

「ちくしょう。聖水にすべきだったか」
「聖水なんて売ってるわけなかろう。あれはまず教会に行って……」
「いや、そんなことないぞ。その気になれば俺だって精製できるし。ちょっと色つくかもしれないけど」
「ほう、それはすごいのう。藍は司祭の血筋かなにかなのか？」
「いや、なんでもないんだ。忘れてくれ」
微妙な下ネタは、純粋な乙女には通用しないようだった。汚れなき瞳に怯んで、視線をそらした藍は、脂汗をたらしているアヤメと目があった。
爬虫類なのに汗かくなよ、とズレた突っ込みを脳内でした藍に、リコから声がかけられた。
「それでそのカタツムリとカエルの玩具はなんのつもりじゃ？」
「ほら、三竦みっていうだろ。ヘビはカエルに勝って、カエルはナメクジに勝つ、ナメクジはヘビに勝つから、お互い相対したら手を出せなくなるってやつ。ようはジャンケンだよ」
この場合、カエルは玩具、ナメクジはカタツムリ、ヘビはアヤメに変換される。
「よくわからんが、それはカタツムリではないか」
ペットボトルに入れられたカタツムリがうねうねと体をくねらせていた。
「代用品ですよ。ナメクジが見つからなかったんで。まあ、似たようなもんだしいいかな、と」
ペットボトルを揺する。カタツムリは平然と粘膜でひっついたままだ。
「はぁ、呆れたわ。藍がまさかそこまで小さな男だとは」
「なにいってやがる。女とはいえヘビになめられっぱなしは性にあわないんだ」
「元の場所にかえしてきなさい」
「はあ？い、いやだよ。けっこう探すの大変だったんだぞ」
子犬を拾ってきた子どもを諭すようにリコは厳しい口調で続けた。

「かわいそうに、カタツムリ。梅雨が終わり夏を乗り越えるスタミナのペース配分を考える大切な時期に捕まってしまうとは」
「最初はヘビ女を攻撃する手段としか考えてなかったが、苦労したぶんかわいく思えてな。見ろよ、この角、キュートだろ」
「カタツムリのような軟体生物は雑菌の塊みたいなもんじゃし、寄生虫の宝庫じゃぞ」
「め、愛でるだけなら問題ないだろ。俺のことはキサンタ、もしくはツナデと呼んでくれ」
「はぁ、やれやれ」
ため息をつかれても、カタツムリには愛嬌がたっぷりで、すっかり飼う気になっていた。
エサはキャベツでいいかな、と冷蔵庫を確認しにいく前に、固まったまま動かないアヤメに気がつく。
「おい、どうした」
「はぃっ！？」
声をかけられたアヤメは、びくっ、と大きく肩を震わせ、上半身を後ろにのけぞらせた。
「……」
手にもったカタツムリ入りのペットボトルを彼女に近づかせる。
「ひぃ」
小さな悲鳴をあげ、彼女はバネのようにバックステップした。
苦労は報われた！
当初の目的を思いだし、彼は自分が今まで生きてきたなかで一番邪悪な笑みを浮かべる。
「なあ、アヤメ。カタツムリ、かわいくねぇー」
「な、ななにを言ってるの？暑さでイカレたんじゃなくて？」
「ほら、見ろよ。ツムリンって名前つけたんだ」
「せ、センスの欠片もないわね。は、はやくそんなおぞましい生物、捨ててき、きなさいよ」
気丈な態度を保とうと必死になっているアヤメは、誰がどうみて

も、カタツムリが苦手だと分かるものだった。
三竦みは本当だったんだな、と彼は故事に感動したが、冷静に考えれば、カタツムリやナメクジが平気な女子の方が圧倒的に少ない。
「おいおいそんな寂しいこと言うなよ。同じ地球の仲間だろ。ほーらツムリン、ユァーブラザーですよー」
「き、気色悪いこと言わないで！頭おかしいんじゃないの、気持ちわるいカタツムリなんて、そんな、そ」
カタツムリが仲間になりたそうな目でこちらを見ている！
「仲間になれるわけないじゃない！」
全力で拒否られてツムリンはショックを受けたように角を引っ込めた。
「知ってる、ほらー」
「や、やめっ」
眼前にペットボトルが掲げられる。
「カタツムリの進む速度って、秒速０．５センチメートルなんだよ（大体）」
「だからどうしたのよ！」
「ちょっとロマンチックじゃね？」
「死ね！二度死ね！死んでからも死ね！」
三竦みの通り足が動かなくなったアヤメは、涙声で怒鳴りつけた。
完全に調子にのった藍は、尚もニヤけながらペットボトルを嫌がるアヤメに近づかせる。
「ほーらかわいいカタツムリだろ？そんな怖がんなって、サブリミナル効果だって」
パシャ、と封を切られた塩バックがリコの手より投げられ、
「藍、我は幻滅しとるぞ……」
「わぁーツムリーン！ツムリンがぁ！溶けるっ！？」
キラキラと塩の雨が藍とツムリンに降り注いだ。
（※このカタツムリはこの後野に帰されました。）

「まったく非道な男よ。嫌がる女子にあんなことを」
「悪かったと思ってるよ……」
やられっぱなしのイライラがあんな行動に駆り立てたのだ。やり方は最低だが男のプライドは保てた。と、微かな誇りを持って、抜け出た魂が戻り始めたアヤメに謝罪の声をかける。

「まあ、アヤメも許してく、」
「安心してください。あなたの〇〇を××して、【ズキューン】するくらいで勘弁してやるわ」
「ほ、ほんと申し訳、」
「割れた器は二度と元には治らないのよ。蛆虫」
「……ィッ！？」
自分の軽率な生き方を、改めよう。
「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
そう思った夏休みだった。

17　グレゴリー

じっとりとした風が、少年の身体を撫でまわす。熱帯夜と称するに相違ないムシムシとした、暑い夜。
夏の空気に淀んだ月明かりが、辺りを不気味に照らしてくれる。
誰も気がついていない。
こめかみから垂れた汗の珠が、頬を伝って、地面に丸いシミを作った。
少年は横に佇む座敷わらしをちらりと見やる。祭りの前で頬を紅潮させる子どものように彼女はわくわくを積もらせていた。
その楽し気な少女に、緩やかな月明かりが降り注ぐ。

まだ太陽が活発としていて容赦ない殺人光線を街全体に浴びせている時間帯のことだ。
「おまえらはズルい」
雄叫びを轟かせた藍は、涙目でトラウマを引きずりながらも、人心地がついたらしくお得意の憎まれ口を叩いていた。
「ズルいってなにがよ」
「我も含んどるのか？」
いきなりの糾弾に、きょとんとしながら、リコとアヤメは首をひねった。
「人をびびらせるのに、怪物めいた力を使うのはフェアじゃない」
「なにが言いたいのか、さっぱりわからん」
「だからっだ！」
語気を荒げて、目一杯誇張させるように彼は大きく手を上下させた。さながら未成年の主張である。
「今までのパターンを思い出してみろ！てめぇらはいつも化け物パワーで俺を脅すだけじゃねぇか！」

「女の子に化け物なんてデリカシーのない男ね。そんなんだからモテないのよ」
本来ならば足がついている部位にある長い尻尾を機嫌よさそうにふりながらアヤメが口を開いた。
「あんたみたいなでくの坊に血が巡ってるだなんて無駄の極み。何も言わずに献血でも行って、性交経験有無の質問に絶望してるが相応よ」
「化け物め！１８歳以下は献血できねぇよ！ばーか」
語彙もなにもない幼稚な悪口を叫んだ彼に、
「あ？」
彼女から浴びせられたのは不良学生が如く、濁音であった。
「化け物だなんて失礼ね」
アヤメは艶めかしく真っ赤な舌をペロリとだし、唇を舐めた。
一部の男性からは喜ばれるであろうその所作の真の意味を、少年は正しく理解する。
これ威嚇だ……。
「あんまり生意気言ってると、三回みたら死ぬって有名なベクシンスキーの絵をプリントアウトして瞼の裏に縫いつけるわよ」
「そ、そんな脅しに怯むか！今日こそははっきり言うぞ！リコ！」
藍を奮い立たせるように、自らのカノジョの名を呼んだ。それにさして興味なさそうにリコは欠伸混じりに「ふぁーい？」と返事をする。
「お前にも言ってんだかんな！毎回毎回、妖怪オーラでごまかしやがって！たまには自分の力で物事をなし得てみろ」
「おぬしがなに言いたいのか、まだよくわからんのじゃが」
「だから、俺はただの人間でお前らは妖怪なわけだ。この前提で、妖術だか霊能力だか知らんが、非科学的な力で俺を脅すのはフェアじゃねって言ってんだよ！」
少年の主張にリコは、首だけでこくんと頷いた。
「なるほどのう。種族間の能力差が納得できんのか」

「ケツの穴が小さい男ねぇ」
女の子が口にすべきでない下品な例えに顔を真っ赤にした藍は、唾を飛ばさんとする勢いで大きく声をあげた。
「だから不平等だって言ってんだ！ただの人間に非現実的パワーを押し付けんな！等身大の立場を俺は求めてんの！」
「ぷっ」
真剣な彼の言葉に吹き出したのはあやめだった。
「等身大だって。等身大とか。等身大のオレを見てくれ、っていかにも安っぽいセリフ。三流歌謡の歌詞みたい。ださっ」
クスクスと今まで見たことのないとっても良い笑顔で、指さされては、さすがに平静を保っていられなくなる。
「ごごごまかしてんじゃねぇ！お前から妖力を取ったら、ＭＰの切れた魔法使いも同然だかんな！初期ポップより、使えない存在だ！」
「聞き捨てならないわねぇ。悟りの書が読めない遊び人みたいな存在のくせに。私のことをバカにする権利、あなたには無いんだから」
あやめはそう言って、窓を開けた。夏の熱気と蝉時雨を含んだ生暖かい風がクーラーの効いた室内に雪崩れ込む。
クエスチョンマークを浮かべながら、何やら指さす彼女の横に立つ。
「真夏のアスファルトで干からびてるミミズのほうが、この世界じゃよっぽど有益な存在よ」
土がなく逃げ場を失ったミミズが照りつける日差しに灼かれのたくっていた。
「ダメな土嚢を耕し、豊穣な土地を作りだすミミズが死んで、ただ砂を食い、二酸化炭素を吐き出すあなたが生きてる。これって不条理だと思わない？」
「なに哲学っぽくまとめようとしてんだ！そんなんじゃごまかされないぞ！」
ちっ、と舌打ちし、アヤメはピシャリと窓ガラスをしめた。途端、

真夏の騒がしい空気が切り取ったみたいに静まり返る。
「わかったわよ」
「ああ？」
「ようは私やリコが妖力を使わずに、あんたをびびらせればいいんでしょ？」
「は？いや、だから、」
「肝だめし、行くわよ。２日目の今日は、小学生以外も参加できるはずだから」
いきなりのお誘いに、アヤメの住処である森の社で肝試し大会が行われるらしい、という今朝の彼女の愚痴を思い出す。
「話が見えな、」
「どっかの頭悪そうな高校生が、脅かし役として参加してるみたいだし、私が飛び入りしても問題はないわね。大体あそこのヌシは私だし」
「俺はただ単に対等な関係が築きたいと言っているわけで、」
アヤメとの一方通行な会話に混乱を覚えながらも、割り込もうとした彼より先に、嬉々としたリコが楽しそうな声をあげた。
「なかなか粋な提案じゃのう。夏の風物詩じゃ！肝試し！」
「でしょー！リコ、こういうの好きだもんねー。あたしも好きぃー」
お前さっきガキがうるさくてウザいって嫌がってただろ！と、巷の女子高生みたいに黄色い声を上げる彼女たちを怒鳴る、なんてこと彼にはできなかった。

こうして彼は、真夏の夜に肝試し会場となる鎮守の森前の広場に立っていた。なかなか賑わいで、子どもから大人まで、一クラスは優に超える盛況ぶりだ。自分と同じ年代の人も多くいる。
アヤメは「お望み通り、妖術なしでびびらせてあげる」と、仲良くなったらしい脅かし役の高校生たちと共に、自らのホームグラウンドに引っ込んでいったので、今彼の隣にいるのは座敷わらしのリコだけだった。

「アヤメが本気で脅かしにかかるだなんて、少しばかりヘビーな状況じゃの、ぷふっ」
自らの薄ら寒いオヤジギャグに吹き出したリコを流し目で見ながら彼は深く後悔していた。
軽率な生き方を改めようと誓ったばかりじゃないか！それに、
彼はちらりとリコに視線を移す。他人の目にも見える、という状態になっていると言っていた彼女には、月明かりに照らされても影ができていなかった。夜だから目立たないとはいえ、
「すでにフェアじゃない……」
彼は心の中で頭を抱えた。
アヤメが脅かし役でリコと藍が参加者、簡単な構図だが、肝試し参加を拒否することができなかった自分の過ちを、彼はまた悔いるだけだった。
「でもお前怖いの苦手じゃなかったっけ。映画観てブルってたじゃん」
「ああいうのはフィクションだからと、おどろおどろしくし過ぎなんよ。普通の夜の散歩程度の肝試しなぞ怖くもなんともないわ」
よくわからん理屈に、
「まあ、題材はお前らだかんな」
彼はまた頭をかかえた。

18　ホラーハウスショー

くじ引きで順番をきめ、二人一組で肝試しは行われるらしい。相方選びは各自自由なのでリコとペアで肝試しをすることになった。
夏の空気に恐怖を感じるとこなど、どこにもあるはずがない。ただ一つの心配事といえば、恐怖の大王たるヘビ女が意気揚々と脅かし係りに加わったことだ。
「っく、なんという妖気！まるでケツの穴にツララを突っ込まれているような気分だ！」
「いきなり何を言うてんよ。下品じゃの」
流し目でこちらを見ているリコの肩をぽんと叩き、
「人間の勇気の力をあの化け物に思いしらせてやるっ！」
自らの軽率さを吹き飛ばそうと、気合いをいれた。

「大げさじゃのう。あ、そうじゃ、あやめから藍に渡すように頼まれていたもんがあるんじゃが」
「ん？」
リコは懐に手を突っ込み、夜店でよく売っている光るリングを取り出した。
ブレスレットのように藍の手にそれを装着してから、受けとっていた懐中電灯で手紙を照らし声に出して読み上げる。
『拝啓モルボル様。顔面偏差値３２．８、人生がハードモードのあなたにブレスレットをプレゼントします。これを装備していると防御力がマックスまで上がるかわりに常に混乱状態に陥ります』
「はんにゃのめんかよ！」
『でも安心してね。常に頭がパープリンのあなたには効力がないから』
「なら今のくだりいらないだろ！」

森のどっかにいるアヤメに届け、と声を大にする。
「うるさいのぉ。黙って聞いとれ、話が進まんじゃろう。えー、なになに」
朗読に水をさされ、少しだけ不機嫌そうに眉間に皺をよせリコは続けた。
『言い忘れてたけど、もう一つの効果が、肝試しにおけるお化けのレベルがあがることです。脅かし役のみなさんには手加減しないよう伝えてあります』
「富士急かよ！」
『それでは良い悪夢を。ラスボスより愛をこめて。ポーキー』
「やっぱり最後は豚にするんだなっ！」
突っ込みすぎて息をきらしながら、藍はその場にしゃがみこんだ。
「疲れた」
「だろうのぅ。無意味に突っかかるからじゃ。文句なら脅かし役で忙しいあやめに言わないけん」
「ああ、そうだな。がんばんぞ、俺」
森の入り口に睨みつける。
入り口は螺旋のように底知れぬ恐怖が渦巻いており、それらを霞に追いやるためか、少年は自らを激励するように叫んだ。
「無限の彼方へ、さぁゆくぞぉっ！」
「盛り上がっとるところ悪いが、名前を呼ばれとるぞ、藍」
「むっ？」
なんだ、と口を閉じて集中してみると、たしかに自分の名を呼ぶ声がする。
これは……きたる逢魔が時に、誰かが自分の名を呼んでいるのだ。ある種の恐怖がわきおこる。
「誰だ？」
目の前にいるリコとは別の幼さ残る声が闇夜に「橘藍」を繰り返し響かせている。
「もう肝だめしは初まってんのか？」

「なんじゃ藍、びびっておるのか？なさけないのう」
声はどんどん近くなる。どうやら近づいてきているようだ。
「ぼ、」
「ぼ？」
「僕をー、知っているだろぉかー、いつも傍にいるのだけどー、マイネームイズラブー」
「……恐怖のあまり歌い初めおった」
それはごまかしだった。自分の名前と曲名をかけたくだらないダジャレである。俗世には疎い座敷わらしにはイマイチ通じなかったようだ。

ついにすぐ後ろから声をかけられ、それに反応し振り向く。
「やっぱり橘だ」
「お、あれ五十崎」
そこにはあっけらかんと爽やかな笑顔を携えた同級生、五十崎柚が立っていた。どうやら先ほどからしつこく藍の名前を呼んでいたのは彼女のようだ。
「あー、よかったぁ。違ったらどうしようかと思ったよ。それで橘も肝だめし参加するの？」
きょとんと首をかしげる。とても可愛らしい動作だが、狙ってやってるわけでないのだから、天然というのは恐ろしい。
「ああ、一応な。そういうお前もか？なんでまたこんなチャチなお祭りに」
「お兄ちゃんの部活の人が主催だからね、夏休みで暇を持て余すくらいなら、って参加したんだ。それに一種のフィールドワークもかねてるかも。知ってる？ここ蛇神様が祀られてるんだって。人の死を司ってるんだってさ」
「それはもう」
「あら意外。橘ってそういう俗信とか疎そうなのに」
「俺にだって現実を受け止める覚悟くらいあるさ」

フィールドワークとは彼女が所属しているクラブ、民族学部の活動でもさしているのだろう。さして興味のない藍は質問を重ねるでもなく、ポケットから携帯を取り出してサブディスプレイを光らせた。
「つうか、肝だめしってもう始まってんの？時間的にはスタートしてもいい頃だと思うんだけど」
「あ、まだだよ。開会挨拶が部長さんからあるから、それ終わってクジの順番でスタート」
おお、そうか、と納得いったようにこくりと頷いた藍に、
「一人先走らないでよかったのぅ」
後ろから抱きつくようなカタチで、藍の首に腕を回したリコが声をかけた。
「ああ、まったくだ。初参加は勝手がわからないからな」
「アヤメにもっとちゃんと訊いとけばよかったんじゃ。無意味にケンカ腰になるから」
「うるせぇな。いいじゃねぇか。人間にだってプライドがあんだからよ」
ボソボソと会話していた藍だが、リコが衆人の目に捉えられる存在になっていることを思い出し、声量を普通のトーンに戻す。しかし、五十崎柚はなぜかきょとん目を見開いていた。
まさかリコの姿は見えず、独り言みたいになっていただろうか、と焦る彼に彼女は、微笑んで、リコを手のひらを上にして指し示した。
「親戚の子ども？かわいい子だね。怖いの平気かな？」
藍の背中にぴったりのリコは端から見たら、半ばおんぶ状態だ、そう思われても仕方がないかもしれない。リコはその五十崎の質問が気にくわなかったのか、ブーたれながら口を開いた。
「なんじゃこの失礼なおなごは。おぬしなんぞより我の肝っ玉はよっぽど座っておるわい」
「わあ、かわいい！なんかのゲームの影響？でも今の内からそんな

老人みたいな口調してると癖になるから気をつけた方がいいよ」
「むきっー！」
口で怒りの効果音を発するのはそれだけ彼女が、怒髪天で取り乱しているからだろう。
「田舎の中学生みたいに垢抜けん顔しよって！我を幼子扱いできる顔立ちか、おぬし！」
「きゃあ、橘、この子めっちゃかわいいんだけど！今何歳？小学生？」
二人の相性は最悪、というより噛み合っていない。
藍は小さくため息をついた。とてもじゃないが二人の仲を取り持つ気はしなかった。
「ななな、言うに事欠いて我を子女扱いするとは許せぬ暴挙！いくら温厚で有名なリコ様もキレるというもんじゃ」
「あはは、リコちゃんって言うんだ。キュートな名前。着物もスッゴく魅力的だよ！座敷わらしみたい」
「うぬっ、な、なんじゃと、貴様！見抜くとは、ただ者ではないな！さては名のある神職の者とお見受けした！だが我は屈せぬぞ！」
「えー、私はただの高校生だよ。神職に憧れがないわけじゃないけどさぁー」
リコは五十崎の趣味が人を妖怪に喩えることだと知らない。たまたまリコが座敷わらしと言い当てられただけだ。それがわかっている藍は露骨にパニックになるリコが面白く、笑いをこらえるのに必死だった。
「それに我は藍の親戚ではない、恋人じゃ」
「まあ、おませさん！でもダメだよー、藍お兄ちゃんには彼女がいるからね」
五十崎柚は藍の家に遊びに行った時、たまたま出くわしたアヤメを藍の恋人だと勘違いしたままだった。
「ふざけたことを抜かすなよ、五十崎とやら。まさか自分が藍の恋人だと言うのではあるまいな？もしそんな嘘をはいてみろ、貴様の

唇を引き裂いてくれようぞ」
ぞわ、と空気が静かに嘶く。
藍は背中のリコが特有の霊気を発しているのに気が付き身震いした。しかしながら怒りの矛先である五十崎は全く気がついていないようだった。
「違うよー、お姉さんはただの友達。橘のカノジョはアヤメさんっていうスッゴい美人の人」
「「は？」」
リコとシンクロして藍も口をポカンと開け放していた。
なにいってんだこいつ。
「おい、五十崎。お前たぶん勘違いしてっから言うけど、んふぐっ！」
藍がその勘違いを正そうと声を上げようとした瞬間、背後からチョークスリープをかけられる。
「どぉぉいいいう、ことじゃぁあぁ」
「は、はぐ、っう」
「藍よ、返答によってはお主は我らの仲間になるぞ。肉体を失いたくなければ、正直に返事せい」
「あ、あが」
必死に彼女の手にタップする。細腕からは想像ができないくらい技が決まっていた。
「お主の浮気の虫ごと踏み潰してくれようか。よりにもよってアヤメとは、それ相応の覚悟を決めておるのだろ？二秒やる、その間に答えるのじゃ。ウノ、ドゥーエ」
「……」
「ちょっ、リコちゃん！橘マジで小花畑見えちゃってるみたいだよ！」
五十崎の助けにより、三途の川を渡らずにすんだ藍は咳き込みながら、リコとそれから五十崎に文句を言った。
「お前ら、バカだろっ！」
夏の夜風が彼を慰めるように爽やかに吹いた。

「俺のカノジョがあんな毒舌蛇女のわけあるか！スタイルよくてもそんなのこっちから願い下げだ！」
「え、うそ。アヤメさんすっごい美人で性格もいいじゃない」
「アヤメをバカにするのは気に食わんのぅ」
「どないせいっつうねん！」
関東住みなのに関西弁になってしまった。
「ともかく俺とアヤメは付き合ってなんかないからな！勘違いすんなよ！」
「はーい……」
しぶしぶと言ったように五十崎は頷き、それからはたと気が付いたように眉をしかめた。
「ちょっとまって、橘、それじゃあ」
「なんだよ」
「えーと、……」
一瞬の躊躇いを見せてから彼女は続ける。
「橘とリコちゃんが、ほ、ほんとに付き合ってるの？」
「だから、そうだって言って、」
「それってヤバくない？」
「え？」
五十崎の視線は、テスト休み中、公園ではっちゃっけていたときに向けられていたものと、寸分たがわなかった。
「……っは！」
引いている。
「？」
その場できょとんと無垢に首を捻らすのは座敷わらしのリコだけだった。
そう、多めに見ても、彼女の見た目は中学生、普通に見たら小学生。実年齢は発言等から考えて、さほど自分たちと差がないように思える、が、

「ち、違うぞ五十崎誤解すんな！たしかに付き合ってはいるが、」
「え、付き合ってるの？あ、えーと、……年の差なんて愛があれば関係ないよね」
「だから、違うって」
俺はロリコンじゃない！
声を大にする前に、横のリコから回し蹴りを食らう。
「ふげぇっ」
「違うとはなんじゃ違うとは！？あの時の我に囁いた「愛してるぜハニー」は嘘じゃったのかっ！」
「ん、んなこと言った覚えが、」
「その後二人で愛を確かめ合って、ビクビクする我に「天井のシミを数えてる間に終わるよ」と優しく言ったあの言葉も！ぬしさんは、体目当てのゲスだったのか！？」
「どこで覚えたそんなセリフ！」
「ホストになって戻ってきた康夫が八重子に言うておった。意味はよくわからんが、こういう場で使う言葉じゃろ？」
「……」
彼女がよく見ている昼ドラの話である。
「た、橘、それは、は、犯罪だよ……」
「はっ！？」
彼はその後、五十崎の誤解を解くため、リコから回し蹴りを5回食らうはめにあう。

19　少年ナイフ

月にかかった叢雲がどんよりとした闇を森の入り口でたむろする若者たちに落としていた。時刻は２０時、お祭りという名義は、門限を緩く設定してくれていた。

娯楽ラ部とかいうふざけた名前のクラブの部長が、肝試しの開会宣言を行い、辺りはにわかに活気づいていた。ついに待ちに待った肝試しが始まるのだ。しかも小学生むけの子ども騙しじゃない、青年向けの本格的なやつだ。

「可愛いすぎてやばい！あの人なんだよ、これは天が俺に与えてくれたサプライズかっ！？五十崎、お前の知り合いだってさっき言ってたよな！紹介してくれないか？」

これから始まる肝試しに、ドキドキする他の学生たちとは違い、橘藍は別方向にテンションが上がっていた。手作りの台座でふんぞり返って肝試しの説明を続ける娯楽ラ部部長を指さして、彼は隣の五十崎柚に息を荒げて話かけた。

「柿沢さん？うーん、知り合いと言ってもチョロっと話したことがあるくらいだからなぁ。っていうか、あんたにはリコちゃんっていう可愛いカノジョがいるじゃない」

「だからあいつは１ヶ月限定の関係だって言ってるだろ。もちろん誠心誠意心尽くしてはいるが、本来の俺は、年上好きなんだ」

「サイテー。浮気男は悲惨な末路しかないよ」

「へっへっへ、言ってろ。最近、ロクに目の保養してなかったからな」

目尻を垂らして締まりのない表情のまま、壇上の美人を見上げる。

「いいねぇ、スタイルも顔も申し分ない。願わくばお友達になりたいもんだ。うーん、これからあの人は脅かし役で森に引っ込むんだよな。それをうまく利用すれば、ッわッ！」

「ふぅっー」
いつの間にか、遠くでぼんやりしていたはずのリコが人間を超越した素早さで藍の肩によじ登り、息を小さく吐いていた。重さをあまり感じないのは彼女が座敷わらしだろうか。
「おい、急になんだ。俺は今考える事に忙しいんだ。はやく降りろタコ」
「悪しき魂に神の裁きを……」
藍の首に足を胡座を組むように巻きつけ、肩車状態のままリコは
「転蓮華ッッ！」
回転した。
「ほぐぬぅわっ！」
藍の視界も回転するようにブラックアウトする。

……

……

「……痛っ」
「おお、藍、やっと起きたか。開会式はとうに終わったぞ。今一番の人が森に入っていったからそう待たずして我らの番じゃ」
草の上に寝させられていたらしい。寝違えたみたいに痛む首をさすりながら彼は上半身を起こした。
「俺は、気絶してたのか？急に視界が暗くなって……、それで、くっ数分前の記憶がないぞ。一体なにがあったんだ？」
リコは「ニタァァ」と微笑むだけで、なにも答えない。
「首の付け根が、ズキズキする……」
「もういいから、早よう立ち上がれ。五十崎女史は意気軒昂とお化けの格好して入って行ったぞ」
「あいつ、脅かし係だったのかよ……」
妙に事情に詳しいとは思ったがそういうわけだったのか。
藍はリコの手をつかんで、起こしてもらい、辺りを軽く見渡した。
先ほどと比べると人数はずいぶんと減っている。どうやら参加者、

脅かし役、半々くらいの割合だったらしい。
「ああ、立ち眩み……」
「だらしないのう。少し休んでおれ」
原因は明白であるが、素知らぬ顔で彼女は藍の背中をさすった。
ほんと、なんで首が痛いんだろ……思い出そうとすると頭も痛むし、う～ん。
いまだクラクラする視界を戻そうとたまらずしゃがみこんでいた藍の肩をリコが小鳥を相手にしているような優しい手つきでそっと撫でた。
「我らの番じゃ。番号が呼ばれておる」
立ち上がり、森の入り口を睨みつける。
「行くか。なんだかやる気がしおれているが、蛇女の鼻をあかすチャンスだしな」
「うむ。年甲斐にもなく、我も興奮してきたぞ」
だからお前何歳だよ。
思ったことをすぐ口に出さなくなった分、彼は成長したのかもしれない。

肝だめしのルートに照明はなく、暗闇を照らすのは座敷わらしの持つペンライトに毛がはえたような懐中電灯のみだった。微かな湿り気を帯びた赤土の上を、二人連れたって歩きながら、お化け役の気配に二人は微かにびびっていた。
「そ、そろそろだのう」
「ああ、タイミング的にそろそろお化け役が来る頃だ」
藍はちらりと自らの腕に留められた光るリングを視線を落とす。
アヤメの言う通り装着したはいいが本当に難易度があがるとしたら、それなりに覚悟しなくてはならない。
憂鬱をため息でごまかす。それから、口では気丈なことを言いつつビクビクと怯えているのが丸わかりの座敷わらしの肩に手をおいた。

「っひ」
それにびっくりした彼女に多少呆れながらも、なるたけ優しい声で彼は言う。
「……まあ、なんだ。お化けがお化けにびびってどうする、って話はさておき、俺だって男だし、いざとなったら守ってや」「ばあああ！」
「ぎゃぁぁぁあ！出たぁぁぁ！」
茂みから馬のマスクを着けた女が飛び出してきた。
「ばあ！……お化けだぞ！どう？怖い？」
「もうわかったからあっちに行け！おぬし！」
「そうはいかないわよ。こっちだって脅かし役として寂しく待機してたんだからね、ここぞとばかりに脅かせてもらいます！ばあああ！」
「ぎゃあああああ！し、しつこいわ！」
「ふっふっふ、部長から光るリングには手加減するなと言われてるから、わたしも容赦しないわよ！」
「……」
折角のいい雰囲気をぶちこわすエアブレイカーの少女を睨みつける。
プラスチックの馬仮面が彼女の動きにあわせてブニブニ揺れるだけだった。長い髪の毛はマスクに収まりきっておらず、微妙に飛び出ている。
「ななななな、まさか地獄の門番、馬頭がこのような僻地におるとは！？ぐぅ、さすがアヤメ、スタメンが想像以上じゃ！」
「馬並みなのねー、あなたはとってもー」
ぐいぐいと馬女に迫られるリコを細めで見ながら、彼は普段と変わらぬ口調で助け船をだしてあげた。
「いや、それマスクだ。馬のマスク」
「むっ、たしかにゴム臭いとは思ったが」
「ば、ばれたぁ！『みやぶる』をつかえるなんてとんだヨルノズク

だぜぇ！」
彼女はそう言い残し、茂みに帰って言った。
一瞬の間を置いて、辺りは静寂に包まれる。
「……なんであんなにテンション高いんだよ」
「ふ、ふん。座敷わらしをナメんなよ、ってところじゃな！」
勝どきのように片手を天高くあげたリコの頭を軽く叩いて再び歩き出す。
強がりなのかなんだかしらんが、リコはやっぱり怖がりらしい。じゃなきゃあんなギャグみたいな馬マスクにビビるはずがない。
「とりあえず道なりにそって進んではいるが、これであってんのか？」
「しばらく行くと神社があるそうじゃ。そこに置いてあるお札をとれば肝試しは終了。なんともわかりやすいルールじゃろ」
「単純というかなんというか。まあ簡単なのに越したことはないけどよ」
馬マスクが現れた茂みから、しばらく歩いた道の上。非日常に高揚していた気分は落ち着いてきて環境に順応しはじめていた。
怖いというよりただ単に夜の散歩という様相のほうが強い。藍はあくびを噛み殺して、隣を歩くリコをみた。
彼女はいまも怖いのか、多少青い顔をしている。
「イかれた高校生のイかれたイベントだぜ？本物が現れるわけじゃないんだから、もう少し気を楽にしたらどうだ？」
「むっ、我に言うとるのか。ははは、藍よ、何を言うておる。我は常に自然体よ」
「いや、別にいいんだけどよ。まあ唯一の問題と言っちゃプロデュースバイ蛇女ってところなんだがな」
「それはまったく。なにせ相手は『本物』じゃからのう」
おまえもだろう。
思ったことをすぐ口にしなくなった分、彼はこの夏成長したのか

もしれない。
「む」
ぴた、と足を止めてリコが立ち止まった。
「つけられるておる」
「なに？」
隣の少女の顔をうかがう。微妙にこわばっていた。リコは真剣そのものの表情で続ける。
「後ろじゃ。相手は、ふむ2、いや3人かのう」
「まじかよ」
「おっと気づかぬふりをするのじゃ、藍。できるだけ泳がせて」
彼女が忠告するより先に振り向いていた藍は、小さくため息をついて、後ろから小走りで走りよる少女を見た。
「もう橘、早いよー。なんでそうスタスタ行っちゃうわけ」
五十崎柚だった。
隣で刺客は2、3人とかデタラメほざいたリコを流し目で見る。
「いや、一度言うてみたかったんだもん。ハードボイルドっぽいセリフ」
ふけもしない口笛をふくように唇を尖らせたリコは、なんとも珍妙な言い訳をするだけだった。
「はぁはぁ、やっと追いついた。橘、私の説明聞いてないでしょ」
息を切らせて呼吸を整えながら、彼女はそう言った。
「説明？なんの説明だよ」
「この肝試しの注意事項だよ」
五十崎は前屈みから腰を伸ばすようにして、「あー、くるしい」と胸をとんとん叩いた。どうやらこの決して走りやすいとはいえない道を彼女は走ってきたらしい。
「確かにそんなもの聞いてないが、別にいいだろ。つうかお前、それを言うために走ってきたのか？ご苦労なこったな」
「ほんとよ。私一番最初のところで待機してたんだけど、あんたたちすたこら行っちゃうんだもん。普通なら諦めるけど、橘には注意

事項を教えてないの思い出してわざわざ追いかけて来たんだからね」
　ようやく呼吸が整い、いつもと同じ口調に戻った五十崎は小さく息をはいてから続けた。
「リコちゃんもちゃんと聞いてね。言っておくけど、ここ、霊的地場は洒落にならないほど強いから。実際死人も出てるほどよ」
　思わず吹き出しそうになる。お化け屋敷でよくある与太話だ。
「ははは、俺をビビらせようってくだらない話をすんのはよせよ。言っておくが俺の心の耐久性は常人のそれをはるかに凌いでいるからな」
「藍から小者臭がぷんぷんするのう。まるでホラー映画冒頭で死ぬチャラチャラした若者たちのようじゃ」
「……」
　余計なことをほざいたリコを睨みつける。彼女は吹けもしない口笛を「ぴゅーぴゅー」言ってごまかしていた。
「まっ、ともかく注意はしたからね。こっから先は自己責任。なにが起ころうと我々責任者は責任をとらないわよ」
「それ責任者じゃないじゃん」
「まー、ここの土地神である蛇神様を怒らせない限り祟られるなんてことはないだろうけど。ここの神様、すごい力を持ってるらしいから。橘なんて一睨みで昇天しちゃうわよ」
「なっ」
「それじゃ、橘、リコちゃん。頑張ってねー」
　最後に不吉なことを言って五十崎柚はもと来た道を戻っていった。
「……」
　自分の行いを他の参加者たちで鑑みて、口を閉ざしていた藍の肩をポンと叩いたリコがぼそりと囁いた。
「すでに手遅れかもしれんのう」
　まったくもってごもっとも。
　藍は心の中で頭を抱えてうずくまった。

20 under line

道なりに進むと、階段についた。
見上げてみても、黒いヴェールに包まれていて、どれくらいの長さかよくわからない。土をそのまま切り出したような階段からは湿った土の匂いがした。
「のぼれってか？」
「そのようじゃのう」
顔を見合わて溜め息をつく。二人ともインドア派なのだ。体力には自信がない。
「しゃーね。いくぞ」
「む、看板があるのう」
「どうせ観光案内とかだろ。ほっとけ」
「『上りきるまで振り返ってはいけない』。なんじゃこれ」
リコがライトで照らした看板にはそう書かれていた。注意書きらしい。
「つまらん設定だな。いかにも五十崎が考えそうなものだ」
「いや、おそらく違うのう」
少しだけ険しい目つきでリコは夏の空気に言葉を溶かす。
「看板が新しいものではない。肝試し用の急拵えではなさそうよ」
「下を照らせ」
「下？地面？」
言われてリコはライトの頼りない光を看板が刺さっている地面に落とした。
「土を抉った跡が真新しい。看板は古くても、こいつを立てたのはつい最近だ」
棒の周囲だけ草が生えておらず、蟻の巣のようにこんもり丸く盛り上がっていた。

「おおっ、なにやら名探偵のようじゃな」
リコは嬉しそうに賞賛の声をあげる。
「けっ、俺らの相手は蛇女だぜ。注意深くするにこしたことはねぇ。おら、さっさと行くぞ」
階段に足をかけようとした藍の背後でリコが小さく呟いた。
「しかし看板が古いのはなぜじゃろう」
「なに？」
彼女の方を振り向く。『上りきるまで振り返ってはいけない』。ぎりぎり階段に足をかける前だ。
「だってそうじゃろ。看板が古いのは確かじゃ。だけど立てられたのつい最近っておかしくない？」
「む。いわれて見れば……」
「振り向くというのは過去を振り返るという意味を持ち、死者に魂を持っていかれると聞いたことがある」
「見てはいけないだったら、鶴の恩返しとかでよく聞くけど、振り返ってはならないなら鈴美さんとアーノルドしか俺は知らないぜ」
「大宰府天満宮の太鼓橋とか、参拝後渡月橋で振り返ると知恵を落とすと言われなかったか？」
「……さ、のぼるか」
彼は惚けるように階段に足をかけた。なんだか怖くなってきた。

階段といっても大したものではない。傾斜を切り崩してできた段差のようなものだ。それが延々と続いているだけ。しばらく登っていたが、いつまで経っても終わりが見えなかった。
「かあー、退屈だわ。つかれるな、こんな熱帯夜に運動なんて」
「あっ、ふぅ……んっ」
「……リコ？なんだよ急に変な声だして？」
後ろからなまめかしい少女の吐息が聞こえてきた。
「あっ、ダメぇ、そこは」
「おい！リコ大丈夫かっ！？」

慌てて振り向こうとして、看板の注意書きを思い出し、彼は躊躇った。もしかしたら俺を振り向かせるためにリコがワザとやっているのではないか、と疑いながらも、心配の声をかけるだけに留める。
「おい！どうなってるんだ！？大丈夫なのか」
「や、ん、見ないでぇ」
「状況を教えろ！」
「へんな触手……脱がさ、いやぁ」
「脱っ！？」
破廉恥な格好になっているリコを思い浮かべ、彼は赤らんだ。多少不謹慎な想像を膨らませ、彼は振り返るのをぐっとこらえた。
「やぁ、ひゃん」
「お、おい！まてとりあえず落ち着け！もうすぐ階段のぼりきるから！」
それは語りかけるというより、自分に言い聞かせている割合の方が高かった。
囲い込むように存在している木々のトンネルを抜け、ようやく階段をのぼりきる。それと同時に彼は慌ててふりかえった。
「大丈夫か、リコ！」
「む」
そこには至って涼しい顔をしたリコが、平然と立っているだけだった。
「なにがじゃ？」
「いや、お前、触手に脱がされるとか」
「大丈夫じゃないのはおぬしの頭ではないか。なにを気色悪い妄想を垂れ流しておる」
予想外な対応にポカンとしてしまう。
「え？いや、え？」
「触手って、気持ちわるいのう。おぬしがそんな偏執狂だとは思わなんだ」
知らぬ間にそう決めつけられていた。

「もう良いから行こうぞ。後でじっくり話合おうではないか」
「あ、お、おう」
彼女には有無を言わせぬ謎の眼力があった。

しばらく道なりに進むと、茂みから釣り竿でこんにゃくが垂れさがっていた。
「なんじゃこれ」
「さぼりだろ」
よく見ると脅かし役らしい高校男子が、星を見上げてボウとつっ立っている。凛とした立ち姿で、とても様になっていたが非常に面倒くさそうである。どうやら総括があまりうまくいっていないらしい、と藍はそう思った。
「あのっ」
なぜ話かける！？3歳児のように好奇心でキラキラ瞳を輝かせるリコの脇腹を肘でつつく。脅かし役の高校生はイケメンであり、座敷わらしのミーハーさが発揮されたのだろうか。
「なんだ？」
「我らを脅かさなくてよいのか」
「脅かしてほしいのか？」
クールな調子でそう返される。接客としては最悪な態度だ。
「肝だめしなんだから、当たり前じゃろう」
「しょうがないな」
「調子狂うのう。おかしなやつじゃ」
「そうだな。ちょっとまて」
リコに注意を受けた青年はぼんやり物思いにふけるように、上目遣いになった。
そして脈絡もなく語りだした。
「俺の友達にAってのがいるんだが」
「ふむ。怖い話かのう。よかろう。続けよ」
なんでやねん。突っ込みをぐっとこらえて彼の話に耳を傾ける。

「めでたく初カノとの初デートをすることになったって喜んでたんだ。そんでプレゼントでもあげようって話になって」
全く怖い話をする語り口ではない。淡々とした彼の言葉に、リコだけはふんふんと相槌を打って熱心に話を聞いていた。
「女友達に相談したんだと。ただ相談した女が変わり者でさ。珍しくてインパクトがあるものが良いって言って」
「う、うむ」
リコが唾をごくりと飲む音がした。
「大仏のゴムマスクを買わされたんだって。東急ハンズで」
「……」
「なにそれ怖い」
心底どうでもいいッ！
藍は突っ込みの言葉をグッとこらえた。代わりに平静を装いリコの肩にぽんと手をおく。
「……もういいから行こうぜ」
「まあ、まてもう少しじゃ。それで？」
続きを促され彼はキョトンとした。
「いや、これで終わりだけど」
「えぇー、なんじゃそれー」
「でも二人の初めての思い出の品が大仏のゴムマスクって怖くないか？」
「それはそうじゃが……。もうちょっとちゃんとしたオチがほしいのう」
「そうだな、強いて言えば、変わり者の女の方は自分で馬のゴムマスク買ってたな」
入り口にいたアイツかー。
「なんだか箸にも棒にもかからん話じゃな」
「まあ、この話で俺が一番言いたかったことは」
キリッと真剣な目つきで彼は続けた。
「一番怖いのは妖怪や幽霊じゃなく、人間だ、ってこと」

「……」
「……」
「……」
言った本人すら無言になった。どうやらよくあるフレーズでごまかそうとしているらしい。
「……さ、行くか」
「そうじゃのう」
本物の妖怪もどん引きだったという。
彼は少しだけ恥ずかしそうに二人を見送った。

ゴールである神社が見えたのはそれからすぐだった。
「あれじゃねぇか」
「おぉ、違いないのう。我々の旅はついに終点を迎えたわけじゃ。思えば半年くらいさ迷った気がするのう」
「気のせいじゃね？」
気のせいであろう。
「とにもかくにもこれでやっと家に帰れるな」
「うむ。熱帯夜は蒸し暑くて好きになれん。藪蚊に喰われるしのう」
「いやちょっとまて色々おかしいだろ。何で血がないお前が蚊に喰われるんだ」
「酷いのう藍。血も涙もないと言いたいのか？それとも冷血だとか」
「いやもうなんでもいいや」
「ばぁー！」
「……」
「……」
あまりにもタイミング悪く現れたお化け役を二人は無視することにした。
そのままスタスタと先を急ぐ。
「それで結局藍はなにを言いたいのじゃ」
「だから座敷わらしには血も骨もないだろ」

「待ってくださいー」
そんな二人の後をシーツを羽織ったお化けが可愛らしい声を上げて追いかけてきた。藍は声質で女と判断し振り返る。
「なんだ？」
「ああ、やっぱり部長さんが言ってた人ですね。光るリングがその証拠です」
自分の腕にとめられた腕輪を見る。今の今まで忘れていたが、そう言えばそんなものつけていた。
「それをつけてる人に手紙を読むように言われたんです」
「手紙、だと？」
キャピキャピと中の若い女は懐から手紙を取り出しライトで照らしながら、読み上げはじめた。
リコが隣で『ああ薔薇色の人生』のＢＧＭを口ずさむ。だから何歳だよ、と彼は突っ込もうとする腕を抑えた。
『拝啓モルボル様』
「またそのくだりかよ……」
『歪んだ性癖とたぎる情欲を、リコの白い艶やかなる肢体に……』
シーツを羽織った少女の朗読はそこで途切れた。
何事かと覗きこむと、かすかに震えている。心配になって声をかけてみた。
「あのぅ、大丈夫っすか？なんか体調悪そうですけど」
「ははは い。大丈夫ですよー。そ、それより暑いんで脱いでもいいですかね」
「脱っ！？」
一瞬階段でのおかしなリコの発言を思い出し藍は顔を赤くした。
「シーツのことです！シーツ！」
彼女はそう言って羽織っていたシーツを取り払った。中から現れたのは端正な顔立ちの小柄な少女。藍のボルテージが急上昇する。
うぉぉぉぉお！美少女ぉぉ！なにが良いって、童顔なのに巨乳なところぉぉ！

鼻の下が伸びていた藍の尻にリコの蹴りが炸裂する。
「あ、あの、それで、手紙にはなんて？」
「あっ、はい、えーと、く、黒光りし張り詰めた……い、以下省略！」
「省略？ちゃんと続き読んでくださいよ」
「うぅ……」
彼女の朗読がまた途切れたことで藍は確信した。蛇女グッジョブ！
アヤメの性格から考えるにいじりがいがある人材と判断し、官能的な手紙を朗読するように言いつけたのだろう。
「チンパンジーにすら欲情し、土偶にすらぶちまけたいと考えているあなたがこの手紙を読んでいるということは、階段のところで振り返らなかった、ということですね。驚きです」
ちょっとしたフランス書院文庫はもう終了したらしい。藍はがっかりした。
「とにもかくにも、少しだけ見直しました。もっともゾウリムシがワラジムシに判断基準が進化したくらいのことなのであまり気にしないでください」
「ああ、やっぱりあいつは俺を罵倒したいだけなのか」
「まったくアヤメらしいのう」座敷わらしのけらけらとした言葉に彼は頭を痛くした。
「ゴールはもうすぐそこです。適当に頑張ってください。ぶちのめしますから」
藍はめまいを覚えたが、朗読の声のかわいさだけを支えになんとか立っていた。
「そうそう、もし階段のところで振り向いていたら、お客様相談センターにポリンキー三角形の秘密はなに、と電話をかけさせたあと、あなたの股間の貧相な排尿専用器を」
鈴を転がしたような朗読はそこでまた止まった。
「どうかしました？」
エロシーンにはいったな、とほくそ笑む彼とは違い顔を赤くした

彼女は慌てた様子のまま、
「ちょ、ちょっとまってください」
しばらく無言になって手紙を読んでいた。彼女の表情は照れたように赤くなったり、幽霊を見たように青ざめたりし、最後には涙目になって藍を見た。
「あ、あの」
「はい？」
「モルボルさん」
涙の滲む瞳に、藍は勘違いされたままの名前を訂正する気にはなれなかった。
「強く、生きてくださいね！」
「あ、え？なに？」
「これから先、きっと辛いことがたくさん起こると思います。だけど、心を強く、強く保つんですよ！」
「ち、ちょっと手紙になんて書いて……」
「だめです！」
アヤメからの手紙を手にとろうとしたら、先に胸に抱かれ、ふるふると首を横にふられる。
「希望だけは失ってはだめですよ！」
彼女はそう言い残すと、涙を脱ぐって茂みに帰っていった。残された藍は何も言えずに口を結ぶ。
「……」
「頑張っていきましょう、ってことかのう」
「……」
見知らぬ女子高生に心配された彼の前途は多難だった。

21　少年は最初、自由にむかって溜め息をつく

神社の境内に、暇を持て余した神々のような、なんともいえない表情のアヤメが立っていた。
「やっと来たわね。ほんとはカッコ良くスモークたいて、イカすセリフとともに登場しようと思ってたんだけど、そんな気力も失ってしまったわ」
「そりゃ悪いことしたな」
平然と謝った藍を心底憎そうに、アヤメは怒鳴った。
「待ちくたびれたわ！何してたのよっ！？何もしないで立ってるだけの私がスイミングスクールの帰り道みたいにへとへとよっ！」
「藍がサブイベント進めたがるんだもん」
サブイベント＝ほかの話。
「しかし、時間軸的にはおぬしが朝ソーメンをすすってから1日も経っておらんよ」
「え、嘘？3ヶ月くらいここで待ちぼうけしてた気がするんだけど、気のせいだって言うの？」
「気のせいじゃ」
「気のせいだろ」
気のせいであろう。
「ま、まあいいわ。世の中には知らなくてもいい世界はあるものですものね。それよりテヅルモヅル！」
キッとあやめは藍を睨みつけた。その鋭い視線に、多少怖じ気づきながら彼は、悪口を訂正するのも面倒だと
「なんだよ」
とぶっきらぼうに返事した。つうかテヅルモヅルって何？
「今日は、あなたにぃ、言いたいことがありますー」
屋上から呼びかけるみたいな言い方に、隣のリコがノリノリで「

なぁにー？」と返事をした。
古い上にわかりづらいが、いやぁ、ともかく怒りが鎮まったみたいでよかっ、
「死ねぇーーー！」
「鎮まってないっ！？」
いきなりアヤメが襲いかかってきた。

「なな、なにをするんだ、てめぇ！」
「もう下らない前口上はいいわ！私がどれだけ一人で退屈だったと思うの？」
「ぎゃあああー！」
「ほんとは段階ふんでしっかり殺してやろうと思ってたんだけど、ぜぇんぶ面倒になったの」
先制攻撃を避けて安心していた藍の首に、伸びたあやめの細手が絡みついていた。
首筋の血管を通して彼女の手の冷たさが伝わってくる。
「相変わらず二人は仲がよいのう」
お尻の肉を朗らかな嫉妬を口にするリコにつままれる。状況を冷静に見てほしい。
「お、おいまじで締まって」
「許してほしければ、ここで『いきも〇かかり』の『じょ〇ふる』を熱唱しなさい」
「っう、くっ、誰がうたうか！」
「さぁ、はやくしないと、シェフの気まぐれサラダ、血塗れた冥府風の出来上がりよ」
気まぐれで殺されては堪らない。
「く、苦しい、り、リコ、やばい助けてくれ」
リコは「歌えばよいではないか」と首をひねらせている。確かにその通りだがなんだかプライドが許さなかった。
「ウダウダうるさいわね。早くぱぴぷぺぽバブーしないと、蜂蜜塗

りたくって放置するわよ？明日には、虫たちのメインディシュになっちゃうんだから。ほら、歌いなさいよ」
「……う、くっ、キミノコエヲキカセテー、」
プライドより、命をとるのは当然である。
締まっていた首が多少緩まった。

「それじゃ次ね」
「おい、ふざけんなよ。肝試しで命を危険にさらすとは思わなかったぞ！」
「死は常に隣合わせよ」
気管がキュッと圧迫される。彼の小さな呻き声を無視して、あやめは耳もとで濃艶に囁いた。
「ここで一人ショートコント」
「はあ、意味わかんねぇよ！なんで俺がそんなことしなくちゃならねぇんだ！お前は暇を持て余したガキ大将か！？」
「あなた一番最初に五十崎柚にビビったでしょ？いわばその罰。肝試しだからこれくらい当然よね」
首に回された手を必死でどかし、なんとか気道を確保した藍は、苦しまぎれに怒鳴りつけた。
「ビビってねぇよ！つうか見てたのかよ！どんだけ視力いいんだよ！」
「私の名字を教えてなかったわね。日向アヤメよ」
「まさかの血継限界！？きさま白眼の使い手だったのか！？」
「嘘に決まってるでしょ。信じたの？あんたバカでしょ」
「んなこたぁわかってんだよ！」
右足でくりだした蹴りをいとも容易く片手でいなされ、合気道のように地面に転がされる。
「ふん、他愛もないわね。喧嘩のやり方も知らないイトコンニャクが、百戦錬磨の死に神に勝てると思ってるの？あなた頭脳がマヌケ？」

頭痛が痛い、みたいにバカにされて黙っていられるほど、彼は腑抜けではない。怒りのパワーを右腕にチャーグルして殴りかかる。
「貧弱ゥ！貧弱ゥ！あなたは私にとってモンキーなのよ」
「てめぇこのやろう！ぜってぇ泣かす！」
それすらも止められ、もう一度足蹴りを心みるが、やっぱり地面に転がされるだけだった。
「あなたの首肉（コリエ）シュートは完璧じゃないわ。お手本みせてあげ、って私には足がないんだった、ヨホホホホ」
「……」
「笑え」
「は、はは」
少なくとも笑える状況ではない。悔しいが、アヤメはまちがいなく人外である。
「って誰が諦めるかぁっ！」
藍は必殺技、蟹バサミ（寝転んだ状態で立っている敵の腿を両足で挟んで後方に倒す、柔道では禁止技、アライグマくんもよく使う）を発動しようとしたが、
「なっ！」
彼女の両脚部は蛇のようになっていて、足がなかった。
「なによ？」
「いや、なんでもねぇよ」
砂だらけになった彼は、溜め息とともに勝利を諦めた。
「まあ、でもあなたのガッツだけは認めてあげるわ。蝋燭の炎に飛び込む羽虫くらいは根性があるじゃない」
「は、光栄だね」
誉められてるのかよくわからない言葉を背中で受けて、神社にあるというお札を取りにいく。たしか肝試しはお札を取ってくるのが目的だったはずだ。
「ちょっとどこに行くのよ」

「どこって、お札取ってくんだよ。肝試しだろ？忘れんなや」
「そこから先は私を倒してからにしなさい。ふん、めんどうよ。全員相手にしてやるわ」
手についた砂をパンパンと払い落としながら、藍と欠伸をかみ殺しているリコに、アヤメはそう言った。
「なんでラスボスちっくなセリフをはくんだよ！？全員って俺とこいつの二人しかいないわ！」
「ふっふっふ、その傲慢、後悔させてやるのじゃ！」
「お前は乗り気なんだな！？」
横から元気いっぱいのリコが飛び出してアヤメに掴みかかった。
「実力、衰えてはいないようね」
「当たり前じゃ！」
「なんで長年のライバルみたいになってるんだよ！」
もうわけがわからなかった。
夜中に上げるべきではない女性の声が響き渡る。藍は下手したら誤解されてしまうのではないかと頭を悩ませていた。
「ぐはははは、ついに追い詰めたぞ勇者！貴様を蝋人形にしてやろうかぁー」
「ふっ、出来るものならやってみるがよい！くらえ、【絡みつく納豆（ミト・ホーリーホック）】ッ！」
なんだその絶妙にダサい技名は。
「ちょこざいな！地に臥せよ【カシワ・レイソル！】」
「むぅ、効かぬわ！【黄金の鯱（グランパス・エイト）ッ！】」
「あの、」
藍はたまらず声をあげた。
二人の視線が彼を射抜く。
「もう帰ってもいいか？」
「だめじゃ、そこにおれ」
「あなたの始末はあとでするから、ちょっと待ってなさい。……【サガントスッ】」

早く帰って寝たかった。
「今のはメラではない、メラゾーマじゃ！」
「逆よ」
つうか帰らせて欲しかった。
「だあああー！もう耐えきれん。なにが肝試しだ。てめぇらでやってやがれ。俺はもう帰る！」
我慢の限界を迎えた藍は立ち上がり、意味不明な技名を叫びあう二人にそう叫んだ。
アヤメは冷ややかな視線を彼に投げかけ、溜め息とともに呟く。
「やだやだ『待て』も出来ないなんて、ペット失格ね」
「誰が、てめぇのペットだ蛇女！爬虫類のお前の方が飼われる側の立場じゃねぇか！」
「やだ、気持ちわるい……、私をそういう目で見てたの。リコ、悪いことは言わないわ。こんな男、即刻別れなさい。調教する気よ」
「俺はそんなアブノーマルじゃねぇよ！」
彼の叫びはやっぱり無視され、リコとアヤメは二人だけの井戸端会議に花を咲かせている。
「でもたまに良いとこあるんよ」
「騙されてるのよ。むぅー、しょうがないわね。リコが毒牙にかかる前に私があのブタを調教してやるわ。プライドも男性機能もズタズタにしてやれば手をだせなくなるはずだもんね」
「ななな、なにを言うておるアヤメ！藍を調教するのは、我の仕事ぞ」
「私だってほんとはやりたくないわよ。あんな朽ち果てる前の巨神兵、殴ったこっちの手が汚れちゃう」
ブチンと血管が切れる音が耳の奥でしたような気がする。藍は罵詈雑言の嵐に背を向け、お札を手に取り、早々にその場を後にしようとした。
もう全てを背中に置いてけぼりにして、布団にくるまっていびきをかきたい。

「待ちなさいよ。ストップ」
「うるせーばーか」
「もう、わかったわよ。聞き分けのないプーギーね。仕方ないわ、譲歩してあげる」
「あん？どういう意味だ？」
歎息ぎみの呟きに思わず足を止めてアヤメを見てしまう。
「生きてこっから出たければ『ちょっと面白い話』をしなさい」
「ちょっと面白い話？」
なんとも言いようのない提案に彼は首を傾げる。切れ長の目を少しだけ楽しそうにアヤメが声をあげた。
「そうよ。なにもスベらない話を求めてるんじゃないの。適度に私たちが、『はぁ。面白いねぇ』と思える話をしてくれたら合格」
「む、なんだか楽しそうじゃのう。藍よ、ここは一つおぬしの話術のみせどころじゃぞ」
座敷わらしまでキラキラした瞳を藍によこす。
血を流さずに解放されるなら、それに乗らない手はないだろう。
藍は頭をポリポリかいて、なんか良い小咄がないか考えてみたが、ロクなものが浮かばなかった。
最近あった面白い話といえば、親友・白江藤吾に秘蔵のエログッツを託した時のことだ。しかしこれを話せば、俺は人間としての地位を失ってしまうだろう。リコにもぼこられるだろうし。
どうしたものか……
と首をひねらせていた彼に二人分の沈黙が責め立ててくる。とうとうこらえきれなくなり考えながら口を開いた。
「こないだの、……保険体育の授業で」
「ふむふむ」
「椅子に座ったまま視線を正面に首を上下に回す運動が紹介されてわけだ。えーと、こう頭で円を描く感じでな。そんで実際にやってみようって話になって、みんなでグルグルやってたわけよ」
「シュールな画じゃのう」

「だんだんとテンション上がってきた俺たちは、列を作り動きをズラして、首を動かしはじめたんだ」
「？」
「ＥＸＩＬＥ、っぽかったよね……」
「……」
「……」
沈黙が再び夏の夜静けさとともに彼らを包み込んだ。なんとも言えぬモヤモヤ感、滑った、というべきだろう。
「……もう一度チャンスをあげるわ」
アヤメが哀れみの視線を持って、三点リーダーの応酬に終止符を打った。お言葉に甘えることにする。
「えーと、しょ、小学校の時の話なんだけど」
「お、おー。なんだか楽しくなりそうな雰囲気じゃのう」
「保険体育で、男子女子で分かれて授業が行われるわけよ。男子はサッカー、女子は座学みたいな感じでな」
「……」
リコはジト目になっていた。
「当時の俺は証拠もないけど、女子はお菓子を貰ってるもんだと思っていた。つうか今でも疑問だ、彼女たちがなんの授業を受けていたのか」
「で？」
「……永遠の謎だよな。あ、似たような感じだけど、健康そうだった女子が、プールの授業はなぜか見学してんの。あれなんなんだよなー」
「だから？」
「多い日でも安心ってどーゆー意味なんだろうなー」
「おぬし、いいかげんにせいよ」
「……ごめん」
みじんも面白くなる気配がしなかった。
「変態キモブタ野郎、ラストチャンスよ」

アヤメの評価も未だかつてないくらい最低のものになっていた。
「えーと、おれ、」
「む？」
「保険体育は１００点以外とったことない」
「「もういい帰れ」」

こうして彼の、人生初の肝試しは、なんともいえない微妙な感じで幕をおろした。

22　タイム・リミット＋　前

８月にはいって夏の日差しは加減を知らず、最高気温は軒並み真夏日を記録してした。
セミだけがうだるような暑さに負けず、いたるところでスコールを降らせている。
殺人的太陽光線は、グングン気温を上げていき、室内にいても汗が滝のように吹き出した。
そんなある日。
寝苦しさに目を覚ました藍は、唸りながら伸びをした。ぐっしょりと布団は汗で濡れている。まだ午前中だが、耳にガンガンと蝉時雨が貼り付いていた。
「リコ、めしー」
いつものように汗を拭いながらリビングに行く。
座敷わらしという奇妙な同居人がやってきて、彼の食生活は充実していた。
「藍よ」
豪勢な、まるで旅館の朝食にひけをとらない料理がならんでいる。腕がさっぱりの彼では、ここまできれいに食卓を整えることはできないだろう。
「うおっ、今日もうまそうだなぁー。そんじゃいただきまーす」
「藍よ。箸をとめて、話を聞いてくれんか」
「ん、どうした。改まって」
リコは少女のような風貌に似合わぬ真剣な表情で、彼をまっすぐに見つめた。
「思えばおぬしとは色んなところに行った。大昔や宇宙、鏡の世界や夢の国、異次元なんかも冒険したり」
「おいなんの話だ」

「……これは大長編の話じゃったか」
寂しそうに呟くと、リコは静かに目を閉じて、三つ指をついた。
「な、なんで土下座なんだよ？」
「世話になった。言葉では言い表せないほど感謝しとる。１ヶ月限定とはいえ、おぬしはいいカレシじゃった」
「あ」
カレンダーに視線をうつす。日付は彼女がテレビから飛び出してきてちょうど１ヶ月目を迎えていた。
座敷わらしに憑かれた家庭は裕福になるが、去れば没落を迎える。１ヶ月程度ならその危険もなく、座敷わらしは留まることができる。幸せにはならないが、不幸にもならず、彼女は屋根の下で暮らすことができる。
だから橘藍は１ヶ月だけ、彼女との同居を許可したのだ。
「そうか、もうそんなに経つか……」
「うむ。心残りはおぬし一人ではジャイアンにイジメられてしまうのではないか、ということだけじゃ」
「えぇい、なにをふざけてやがる。少しは感傷に浸らせい」
「そこはあの名セリフ、『ぼくが自分一人の力で君に勝たないと、リコが安心して妖怪の国に帰れないんだぁー』じゃろ」
「なんでさっきからドラえもんしばりなんだよ！？」
頭を下げたまま、顔を上げようともしないリコは、藍の声に肩を震わせ小さく呻いた。
「リコ……」
「むふふ」
「……なんで笑ってんだ？」
ガバッと顔をあげた少女は、にんまりととてもいい顔で笑った。
「嬉しいんじゃ。おぬしが感傷に浸ってくれるということは、それだけ我との別れを惜しんでくれているということ」
「な、うっせバーカ、口が滑っただけだよ！」
「くふふ、照れるなよ藍ー。男のツンデレは見苦しいだけじゃぞ」

「デレるかボケ！」
貧相になった彼のボキャブラリーはそう言っていなかった。
「おぬしのようなタイプは卒業文集に大人になった時に見返したら耳まで真っ赤になるようなポエムを書くんじゃ。ほれ、なにか言うてみい」
「バカやろう！先見の明がある俺は文集には無難なことしか書かないってきめ」
「『俺は泣かない。別れはつらいが、次のステージへの旅立ちだと思っているからだ』」
「な、お前、どこでそれを！」
「押し入れー」
リコの手には藍の小学卒業アルバムが握られていた。
「『俺がこの学校で過ごした時は、決して輝いてなんかいなかっ』」
「黙れぇ」
「『夢なんてない。いま、この時を生きている俺が夢をつむぐか』」
「いっそ殺してくれ！」
卒業してからそんなに経っていないのに、彼は耳まで真っ赤になっていた。その場のノリというのは本当に恐ろしい。
「藍は将来の自分に手紙を書いたことがあるかのう？」
「な、なんだよ……」
恥辱のマグマで脳みそまで茹で蛸の藍に、リコはいつもどおりの朗らかな視線をよこした。
「確か卒業の時、タイムカプセルに入れた記憶はあるが、……こ、こっちは無難な手紙だかんな」
「ふむ。我もそういうのやってみたくてのう。押し入れに残してあるんじゃが、我が去ってから目を通してほしい」
「それって普通の手紙じゃん」
「はは、たしかにそうじゃな」
網戸から夏の爽やかな風に運ばれ、室内にセミの鳴き声を運んでいた。

朝からクーラーを使う経済的余裕は高校生の一人暮らしにはない。だからタイマーを夜中までセットし、早起きのリコがタイマーが切れた早朝に窓を網戸にするのだ。
整いだした生活サイクルをやり直さなくてはならないな、と藍はそう思った。
「……寂しくなるな」
「好きじゃぞ。藍。好き好き大好き超愛してる」
「な、き、急になんだよ」
「ふふ、最後じゃから正面切った告白じゃ」
「……お、おれも」
「む、よく聞こえんのう」
ぼそりと囁くような声量で藍を呟いた。
「お前のこと、わりかし嫌いじゃなかったぜ」
「なにそれ。へんなの」
クスクスとリコは笑ってから、
「さて、もう行くかのう」
立ち上がり、玄関ではなく壁にむかってスタスタと歩きはじめた。
「お、おいリコ！」
藍はなんだか寂しくなって、思わず呼び止めてしまう。
リコは返事をせずに立ち止まった。
「次はどこにいくんだ？」
「さあ、しばらく放浪するのもわるくない」
「そうかまた会おうな」
「うむ」
壁を通りぬけてリコはどこかに行ってしまった。
残された藍は、食卓にならぶ色とりどりの料理に箸を運ぶ。租借するたびに、なんだか目頭が熱くなった。
「やっぱうまい。コックとして、残ってもらえば良かったな」
独り言になった彼の言葉は、セミの鳴き声の濁流に流される。騒々しいはずの室内は、鼓膜を切り取ってしまったみたいに静かに感

じられた。

リコが出て行って数時間後、なにをするでもなく大の字で横になっていた彼は、お昼をむかえ、空腹を訴える自分の腹の虫を鎮めるためキッチンに足を運んだ。

レトルトカレーを作る。数分で完成。

「ボンカレーはどう作ってもうまいのだ」

やせ我慢のようなつぶやきはカレーのいい香りとともに空気にゆっくり溶けていった。

「そうだ、手紙」

カレーに口をつけながら、テレビを見ていた彼は別れ際のリコの言葉を思いだした。押し入れに彼女からのメッセージがあるはずだ。

早速、確認してみる。畳まれた布団の真ん中に何やら箱が置いてあった。手を伸ばし取ってみると、ドラえもんが印刷されたお菓子の空き箱のようだった。

「あいつ今日はやけにドラえもんにこだわるな」

ぼそりと呟きながら箱を開ける。

『さよならは言わない。また会おう』

「これは、……俺の中学の卒業文集……」

手紙には、封じこめた中学三年生の彼からの耳が赤くなるような言葉が綴られているだけだった。最後までイタズラかよ、と頬が緩んでしまう。

箱にはその手紙以外にもなにか入っているようだった。ボロボロのレシピ本と、数珠、それから鼈甲色の髪留めがいれてある。『うそ８００』はない。

「どういう、意味だ？」

藍がリコにプレゼントした２つ。

怒りをにじませ、『これはブレスレットではない！』と怒鳴るリコ、初めてのまともなプレゼントに頬を染めていたリコ。その２つの思い出が、箱にしまわれていたのだ。

「それに、これは……」
随分と年期の入ったレシピ本。最後のページをみると発行年が２０年前だ。彼女の私物だろうか。
その本をなんの気なしに裏返して見てみると、黒のマジックペンで名前が綴られていた。
『人形坂梨子』
幼子が書いた文字のようにガタガタだが、確かにそう書かれている。
「にんぎょう、ざか……だと」
声に出して、明かされることのなかったリコの名字を読み上げる。
「まったく聞いたことがないっ！」
少なくとも彼の知り合いにそんな名前の人はいなかった。

彼女の意図が読み取れず首を傾げる藍の耳にピンポーンと来訪者を知らせるチャイムの音が届いた。郵便でも来たのだろう、と立ち上がる。ぴん、ぽーん。ぴん……ぽーん！
しつこく室内に響くチャイムにイライラしながらも、玄関の戸を開ける。近所のガキがイタズラでもやってんのだろうか。
「やっぱり指を離すと『ぽーん』って鳴るのね。面白いわ」
そこには、涼しい顔のアヤメが立っていた。

「てめぇ、なにしに来やがった！？あ、こら、勝手にあがるな！」
「今日のわんこー。今日は千葉浦安１の１（嘘）、リコさん宅の藍ちゃんです。チャイムが鳴ると大はしゃぎで客人を出迎えてくれます。偉いですねー」
「だれがリコのペットだ！それにここは俺のウチじゃぁ！」
彼の叫びをシカトしてアヤメは平然と玄関からリビングに移動した。
「リコー。暑いから涼ませてー。って、あれ？リコー？どこー？……いないわね」

「家主の許可なく勝手に家にあがんなよ！」
「ねぇ、リコはどこ？買い物？」
「リコなら帰ったよ」
「……どういうことよ、豚コレラ」
大声で呼んでも、当然リコからの返事はない。
「どうしたもこうしたも、１ヶ月限定の関係だったからな。お別れしたんだ」
隠す必要性を感じられないので、正直に告げる。ピクピクとアヤメの表情に青筋が浮かんだ。
彼女は一回大きく深呼吸し、藍に向かって怒鳴りつけた。
「バカ！アホ！マヌケ！クズ！ハゲ！チビ！カス！タコ！ブタ！ゴキブリ！ウジ虫！ミトコンドリア！微生物！【ピー】！変態！ロリコン！【ピー】！性犯罪者！白痴！ろくでなし！ひとでなし！【ピー】！【ズキューン】！死ねぇ！」
ありとあらゆる罵倒語がアヤメの口から飛び出し、弾丸すべてが藍につきささる。
「な、なんだよ！急によ。意味わかんねぇぞ！」
「Ｊａｐ！ｈｏｏｋｅｒ！ａｓｓ－ｈｏｌｅ！ｂａｓｔａｒｄ！ｓｏｎｏｆａｂｉｔｃｈ！ｃｈｉｃｋｅｎ！ｃｒａｐ！ｗｉｍｐ！ｔｕｒｋｅｙ！ｎｉｎｎｙ！ｃｒｕｄ！ｃｒｙｂａｂｙ！ｋｎｕｃｋｌｅｈｅａｄ！ｍｏｔｈｅｒｆｕｃｋｅｒ！Ｆｕｃｋ　ｏｆｆ！」
日本語だけじゃ足りなかったらしい。
「お、おい落ち着けって、わけわかんないって！」
「あ、あんたの面を見てると造形的に不安を抱くのよ！あなた絶対将来はげるからね！息くさいのよ！カモメ眉毛！鼻毛！カメムシ！」
根も葉もない悪口に移行しはじめたところで、藍は変に冷静になっていた。
普段なら絶対にしないことだが、冷蔵庫から冷たい麦茶を取り出してアヤメに出してやる。それをグビグビと飲み干してから、アヤメは小さくお礼を言ってため息をついた。

「悪かったわね。少しイラついてしまったみたい」
「あ、いや、いつもの事だからそれは別にいいんだが……」
こいつがあそこまでブチ切れるのは、
「リコが、どうかしたのか？」
リコに関しての事に決まっている。
じっとりと嫌な汗を背中にかく。
「関係ない話よ。あなたには」
アヤメは涼しい顔でそう呟くと、そのまましゃっきりと立ち上がった。
「邪魔したわね」
「待て」
玄関から帰ろうとしていたアヤメを呼びとめる。
様々な想像が脳内を駆け巡った。
「なんであそこまで怒ってたんだ？」
「別に」
興味なくしたおもちゃを見るような冷たい視線を藍にやってアヤメは振り返った。
「答えてくれ、頼む」
「……あなたがリコを止めなかったからよ」
「……」
確かに、俺は、あいつを呼びとめなかった。だけどそれは、最初からそういう約束だったからだ。
声には出さない言い訳が頭に浮かぶ。
「一つだけ、……質問に答えてくれないか？」
「なによ」
前々から考えていたことがある。
五十崎柚から聞いた妖怪の定義、座敷わらしの特徴。宝くじ、ギャンブル。
死に神。
「リコは、ほんとうに座敷わらしなのか？」

「……」
アヤメは口を閉じ、なにかを考えるように天を仰いだ。
「それを知って、あなたはどうしたいの」
「俺は……」
いろんな答えが浮かんでは、花火のように消えていった。

タイム・リミット十　後

『妖怪と幽霊の違いってなんだ？』
授業が始まるまでのわずかな休み時間、なんの気なしに五十崎柚にそう質問した藍は数秒で後悔することとなる。
『いい質問ですねぇ』
『……』
『いまフリップ用意するからちょっと待ってて』
『は？』
彼女は数秒でノートに『妖怪談義』と大きく書き付け、声高だかに講義を開始した。
『柳田国男先生曰く！』
『誰？』
『第一に妖怪は出る場所が決まっているが幽霊は決まっていない。
第二に妖怪は相手を選ばないが幽霊は特定の相手を狙う。
第三に妖怪が常時出現し、霊が出るのは丑三つ時とされている。
もっと単純な説では、妖怪は物や動物が化けてでたもので、人間などの魂が生前の姿で現れたのを幽霊とする、ってのがあるわ。覚えておいてね』
『あ、ああ。……さっぱりだ』
瞳に星が宿りそうなほどきれいなウインクだった。しかし、教えは藍の耳に留まることなく、右から左へと流れていった。
『うーんそうだな、もっと突き詰めていうと、人それぞれの感じ方だから気にすんなってこと』
『身も蓋もねぇな。んじゃ座敷わらしはどっちなんだ？』
マニアックな知識に辟易とする藍に、五十崎は首を傾げながら答えた。
『線引き上は妖怪とされてるね。現象や事象を定義づけたものは妖

怪、ようは枕がなくなったり幸せになるっていう現象自体が『座敷わらし』って呼ばれてるわけ。さっき言ったように特定の場所に現れ、相手を選ばず、出現する。一応妖怪ね。ただ座敷わらしは幽霊が妖怪化したとする説があるから、あんまりアテにならないかも。あやふやな存在なわけ』

『あやふやね』

ウチでゴロゴロしている少女を思い浮かべて藍は苦笑した。

「リコは幽霊よ」

学校での会話を思い出しながらした質問にアヤメは答えを端的に告げた。

リコは本当に座敷わらしなのか？

初めて会った時から、ずっと考えていたその疑問に終止符がうたれる。

内緒でスクラッチクジを３０枚買い、結果が惨敗だった時から、ずっと考えていたのだ。

「じゃなんで座敷わらしだなんて俺に嘘ついたんだ？」

「幸せになりたいのかもね。色々と悲惨な目にあった子だから」

「お前は、死に神、だったよな」

「あんまり詮索するようなら、あなたの魂を食べてあげてもいいのだけど」

「いや、いい、なんでもないんだ」

ゾクリと肌が粟立つ。

リコは、もしかして、成仏しようとしてるんじゃないのか？

「あいつはどこ行った。墓はどこにあるんだ？」

「行き先なんて知らないわ。定期的に連絡をいれるようには言ってるけど、あの子人の話ろくに聞かないんだもん。お墓はそうね、たしか、小学校の前のお寺にあったはずよ」

「リコは、……幽霊になって永いのか？」

アヤメはその質問には答えず、小さく舌打ちをしてから口を開い

た。
「あなた入院したことある？」
「は？入院？……いや、ないはずだけど、……急になんだよ」
「そう。それじゃあ、そうね」
アヤメが考えるように上目づかいになったと同時に藍はぼそりと呟いた。
「ただ、病院なら何回か足を運んだことある」
「ケガでもしたの？」
「いや違う。……お見舞いだ。友人の」
小学校の時、自分のせいで友人にケガをさせてしまったと責任を感じ、足繁く見舞いをしたことを思いだした。
「その時、女の子にあわなかった？」
「女の、子？」
白江藤吾の妹の声がいまでも耳によみがえる。
『おにいちゃん、しんじゃいやだ！』
「桃里ちゃん？」
「その子じゃないわ」
必死に当時の記憶を探る。霞がかっていた記憶がだんだんとカラフルになっていく。
「いた、かもしれないな」
友人にケガをさせてしまった負い目から待合室のソファーで一人うなだれる彼に、声をかけてくれた少女。まだぼんやりしているが、思いだせそうだった。
「おそらくその子がリコよ」
「……」
口を結ぶ。ほんとうにそんな女の子いたのかさえ曖昧だ。仮にいたとして、それがリコだったかなんてわかるはずもない。
「リコが、俺と会ってる？」
人形坂梨子……。アヤメに真実を教えてもらってもやはりピンとこない。

明確な記憶がないのは、俺が無頓着だからだろうか。
「初恋だったって。だからあなたに会いに行ったのよ」
雨の日、テレビから飛び出した少女。頬を赤らめ、冗談という布でくるまれた告白を、俺にした、少女。
「あの雨の日、あいつはそんなことを考えて……ッ」
「リコはほんとにあなたを愛していたのよ」
アヤメの声を最後まで聞くことなく藍は、たまらず玄関から飛び出した。いてもたってもいられなかった。どこに彼女がいるのかなんてわからない、だけどなにかせずにはいられなかった。
「っふ」
アヤメが微笑む音が背中に届いた。

「リコ、お前はっ！」
息切れが激しい。太陽がまぶしく汗が大量に流れる。
アスファルトのジャングルをせかされるように走りぬける。
嫌になるくらい夏だった。
吐き出す二酸化炭素は湧き上がる熱気に混じって、突き抜けるような青空に登っていく。
リコ、お前は！

線香の香り、太陽光を浴びキラキラと輝く花崗岩。
アヤメの言っていた神社についたのは、家を飛び出して数分後のことだった。
お盆にはまだ早い。人なんていない。セミが騒がしいはずなのにあたりは教会のような静謐さに包まれていた。
「リコ！」
墓地で叫ぶほど非常識じゃない。少しだけ大きな声で彼女の名をよぶ。
「やっぱり、いないか……」
座敷わらしの姿はそこにはなかった。

行きは軽かった足取りが重い。自宅に帰ることにした。探せばリコの墓もあるかもしれないが、そんな現実、見たくなかった。

途中、二人で行った商店街を抜けて帰る。

なんだかんだでちゃんとしたデートはここが初めてだった。プレゼントが欲しいとねだったから、髪留めを買ってやったんだ。

だけど、なんで、それを置いていったんだ？

「リコ……」

目頭があつくなった。涙が出そうなったのに自分自身驚く。あんなに追い出したがってたのに、いざ別れてみると寂しいもんなのかな……。

立ち止まって、小さく息をついた。

「どこ行ったんだよ」

震える声で呟く。このままじゃ独り言が増えていきそうだ。

いろんなことがあった。

テレビから出てきて、びっくりしたけど、なんだかんだで付き合うことになって、自己紹介をした。

すべり台で名前を教えてあった時、少し近くなった青空が、俺たちを見守っていたんだ。

「公園……？」

藍はゆっくりとまた歩きだした。

ブランコを知らない女の子がどこにいる？遊具で遊んだことない少女がどこにいる？

アヤメはリコは不幸な子だと言っていた。アヤメはリコと俺は、病院で出会ったのだと言っていた。

彼女は、外を知らぬ入院患者だったのか？

だから、あんなに誰かと一緒に外を歩くことを望んでたんじゃないのか？

それを拒否して、俺は……。

微かな予感が、視界に宿った景色で確信に変わる。
リコはそこにいた。

「リコ」
「およ？藍？」
ブランコに腰掛けたリコはつぶらな瞳を、汗だくになっている藍に向けた。
普段通りの無邪気さで、彼女はにっこり笑った。
「いま次の目的地を考えておるところなんじゃ。アヤメにも連絡せにゃあかんしのう」
「リコ」
泣き出しそうになりながら、いつもと同じようにぶっきらぼうに彼は口を開いた。
「帰ろう」
「は？」
「早く帰って、夕飯の準備をしてくれ」
「な、なにを言うておるん？今朝言うたじゃろう、今日はちょうど1ヶ月目で」
「関係ねぇ！」
自分の声が耳に響く。リコは目をまるくして驚いていた。
「時間なんて関係ない。俺はてめぇと一緒に、この先、幸せになりたいんだよ！」
「な、なにをいうておる！」
リコは頬を赤らめ続けた。
「だ、だめじゃぞ藍。人外の力で得た幸福なぞ所詮まやかし」
「もう既に、お前がいなくなることが、俺にとっての不幸なんだ」
吐き出すようになんとか言ったその言葉にリコは「藍……」と呟き、
「ありがとう」
それからお礼を言った。

「だけどのう」
悔しそうにリコはうつむく。
「我は座敷わらしぞ。口でいくら言うてもこれは変わらぬ。おぬしと我は生きてる世界が違うんよ。なに、ぬしさんならすぐにボンキュボンの彼女が見つかるはず」
「俺は妖怪に恋した」
「にゃ！？」
リコの顔が変な雄叫びとともにさらに赤くなった。
「お前を好きだって言ってんだ。グダグダくだらねぇこと言ってないで、さっさと家に帰るぞ。幸せにしてくれるんだろ？」
「あああ、あぃ～」
ブランコに座ったままリコはボロボロと泣き始めた。
大粒の涙が、地面にまるいシミをつくる。予想外な彼女の涙に藍はうろたえた。
「な、なんで泣くんだよ？」
「だ、だってぇ～……」
へぐへぐと鼻をすすりながら彼女は続けた。
「藍から好きって言ってくれたの初めてなんだもん」
「え？そ、そうだったけな」
照れ隠しに鼻の頭をかく。
相変わらずボロボロと泣き続ける彼女は本当に幸せそうだった。
「これからはいくらでも言ってやるよ。だからもう泣くな」
「本当に？」
「ああ、嘘はつかない。約束だ」
「へへっ、嬉しいのぅ」
リコはそう言いながら笑ったけれど涙の粒は重力にしたがって下に落ちていくだけだった。
「おい、リコっ」
ふとした違和感に気づいた彼は慌てて彼女の名を呼んだ。
リコは鼻をすすって満面の笑みを彼に向けた。

「思い残しがなくなったのう」
足元からリコの体は黄色い光に包まれ順々と、薄くなっていった。
「おい、なにしてんだよ！」
「……藍」
下からみたクラゲが光とともに海に溶けていくように、彼女の存在が透明になっていく。
「我は幸せじゃ」
「待てよ、おい、お前がいなくなったら、おれは！」
「藍なら大丈夫」
消える寸前まで、彼女は歯をのぞかせて微笑んでいた。
「私が好きになった人だもん」
彼女の声はその姿とともに、この世に溶けて無くなってしまった。
「リコ……」
消えてしまった彼女の名前をもう一度呟くけれど返事が返っくることはなかった。ただ夏の太陽が公園を照らすだけだ。
主をなくしたブランコが風もないのに微かに揺れた。

23　ゼロへ

夏の太陽が寂しさをにじませる。別れ、会えたと思ったら、また別れ。

「あんまりだ」という嘆きの言葉が、脳内を埋め尽くしていた。

熱風が、世界を覆いつくしている。

「ただいま……」

避難するよう、公園から真っすぐ帰宅した藍に、今現在まともな思考回路は残っていない。胸にぽっかりと穴が空いたようだった。

呟いた帰宅宣言に答えてくれる少女はもういないのだ。

なんて、

自嘲ぎみに頬を歪ませ、彼はリビングに足を踏み入れる。なにも考えずにソファーに寝転んでいれば、ひと夏の妖怪のことだって忘れられるはずだろう。

「おかえりー」

「……は？」

思考停止。

飛びこんだ視界状況に脳の情報処理が間に合わない。

つけっぱなしにされたテレビ画面には、主婦に人気の昼ドラが放映されている。

「なんだかマンネリで飽きてきたのう。どうせまた八重子が康夫にモーションかけるんじゃろ？」

【邦子のことなんか、忘れさせてあげる】

【八重子……】

「ほらやっぱり」

せんべいを食べながらテレビと会話する少女は、確かに先ほど別れたばかりのリコに他ならなかった。

光に包まれて成仏したはずの、リコが今目の前にいる。

「なんでじゃぁー！」
「うぉ、びっくりした」
気づけば雄叫びをあげていた。
「な、なんじゃ藍、驚かせんでくれ。心臓止まるかと思ったわ！」
「心臓なんてないだろ！じゃなくて」
おいといて、とアクションを刻んで彼は怒鳴った。
「なんでお前がここにいるんじゃー！」
「え？なんでってさっき許可もらったじゃん。今度から無期限になったんじゃろ？」
「あ、いや、確かに、そう言ったけど、よ」
公園でした下手なプロポーズみたいな告白を思いだし、藍の顔は耳まで真っ赤になった。
「そうじゃなくて、お前成仏したんじゃないのかよ！？」
「成仏？ああ、あの光？座敷童流妖術、テレポートじゃぞ。フリーザ倒したあとヤードラット星人に教えてもらったんじゃ」
「雰囲気的にあれは二度とあえない感じだっただろう！それにお前座敷童じゃなかったってアヤメから聞いたぞ！」
「む、なにを言うておる。我は座敷童じゃぞ。最近やっとオーラを抑えられるようになったから勘違いしとるのかもしれんが」
「は？」
「リコー！きいてー超うけるんですけどぉー」
彼が疑問符を浮かべた瞬間、玄関から楽しそうな声をあげ、アヤメが飛びこんできた。
「豚ったらテキトーぶっこいたら顔真っ青にして家飛びだしたのよー。もうほんっと面白くて笑いこらえるの大変だったんだから」
「むふふ、アヤメ、ぐっじょぶじゃぞ。ぐっじょぶ」
「いえー」
もの凄く良い笑顔で居間でやってくると、テンション高めにリコとハイタッチを交わす。その後、呆然と立ち尽くす藍を見て「あら、いたの？」と涼しい顔で呟いた。

「なんだと、てめぇ！どういうことだ！」
「まあいいじゃない過ぎたこと、とやかく言っても意味ないわよ」
アヤメはやれやれと肩をすくめた。
「その通りだのう。む、う、うぉ！そんなまさか！このタイミングで孝文が邦子に迫るとは！予想外じゃ！」
「お前は黙ってろ！」
ワンパターンな昼ドラを楽しそうに視聴するリコを一喝してからアヤメに説明を求める。
普段と変わらぬ表情で彼女は口を開いた。
「私たちのような存在は契約を交わさなくちゃ家に入ることができないの。だからあのままじゃ1ヶ月の期限でリコはほんとにどこかに行っちゃうところだったのよ」
「俺が聞きたいのはテキトーぶっこいたってところだ」
「あなたがリコを最初から止めてれば、私が嘘つくこともなかったのよ」
「どういうことだ？」
「あなたの不甲斐なさに頭きて、私はそれっぽいことを無表情で告げただけ。勝手に勘違いしたのはそっちでしょ？」
「ぐっ」
たしかに一人シリアスな気持ちに浸ってたのは俺だった。
「いやぁ、アヤメにも見せてやりたかったのう。我を抱きしめる藍の力強さ、思わずホロリとしてしまったよ。ぷふ」
「笑ってんじゃねぇ！」
ドラマを見終わったらしいリコはニヤニヤと会話に参加してきた。
「まあ藍よ。安心せい。おぬしの真剣な顔、我は惚れ直したから」
「うるせーー！」
つまり、かつがれたのか？
「そ、それにお前、あれはどういうことだよ？」
「あれとは？」
認めたくない現実を忘れようともがく彼は、押し入れにあった箱

を思い出した。
「押し入れのドラえもんが印刷された箱だよ。俺がプレゼントとしたもんが入ってた」
「ああ、あれ。ターミネータじゃよ」
「は？」
あまりにも有名な映画タイトルが彼女の口から告げられる。筋肉ムキムキのシュワルツェネッガーが彼の脳内を埋めつくす。
「ドラえもんもターミネーターも未来からロボットが救いにくるじゃろ」
「おいちょっとまて。カリフォルニア州知事がなんの関係がある」
「じゃから『さよならは言わない。また会おう』とおぬしからのプレゼントを箱にいれておいただけじゃ」
「んぐ」
恥ずかしい中学生の時の卒業文集を読まれ彼は耳まで赤くなった。隣でアヤメが「なにそれ」とクエスチョンマークを飛ばしているが、シカトだ。
「意味がわからん」
「だから、アイルビーバック」
「……」
必ず戻る。
あまりのくだらなさに反吐が出そうだった。
「に、人形坂は？」
「我の名字じゃが」
「ああ、そう」
まあ普通に考えたらそうだよな。
「つまりに五匹の橘藍が喧嘩をしてもすぐに仲良くなるよチャールストンというわけね」
アヤメは横でわけのわからないことを言ってるし。
「リコ、そういえば聞いてよ！」
「なんじゃ？」

「このゴキブリったら、いきなりリコは座敷童かどうか私に聞いてきたのよ？意味がわかんなかったからテキトーに返事したけど」
「ああ、藍は我が浮遊霊じゃないかと疑っておるんよ。妖怪だろうと幽霊だろうと、そない些末なことどうでもいいのにのう」
「まったくね。橘藍がウジ虫だろうとゴミ虫だろうと、気にするやつはいないのにね」
「まったくじゃ」
「うるせぇーーー！」
青筋浮かべて彼は怒鳴った。
「お前らなんか、だいっきらいだぁーっ！」
藍はそう叫んで、自分の部屋に走って逃げる。
「藍ー、夕飯なにがいい？」
座敷童の問いかけに「冷や奴！」と返事をしてから、藍は真っ赤になった顔を枕うずめてバタバタともがいた。

「ちきしょう」
だけど、彼は笑っていた。

なんだかんだで、これで良かったのだと思う。
非日常が日常になったって別にいいじゃないか。
これから先、どれだけリコといっしょにいられるかわからないが、そんなこと気にする高校生はいない。
「腹、へったな」
彼は呟いて、夕飯までの一時、惰眠をむさぼることにした。

よろしく駄文

うだるような暑さとはよく言ったものだが、目の前が真っ白になるくらい今日の気温は高かった。
「藍は人間と妖怪どっちが好き？」
「人間」
「……」
砂漠のような環境を提供する真夏の太陽の下、二人はボンヤリと公園のベンチに座っていた。
なんやかんやで座敷わらしのリコと付き合うようになって１ヶ月。橘藍は未だに彼女の全容を掴めずにいた。
ほんのりと赤い頬は、照れているのか、それとも本気で悩んでいるのか一見したところでは判断が付けづらい。
「カノジョが妖怪なんじゃから……ノンタイムで答えなくても」
「戸籍がないから結婚できないだろ」
「むにゃ！？」
「変な声だしてどうした？」
「にょほほほ、藍ったらそこまで考えてくれてるのかのう。照れるのう」
うぜぇ。気味が悪い笑い声の少女に藍はそっとデコピンを食らわせた。
「俺としては相手は人間に越したことはないですよ」
「むー、なんでじゃー愛こそあれば、ａｌｌ　ｎｅｅｄ　ｉｓ　ｌｏｖｅ～♪」
「だって、……子孫残せないじゃん」
本音をぶっちゃけそうになったが寸でのとこで卑猥な単語を言わずに思い留まる。
危ねぇ危ねぇ、また殴られるところだった。

おでこを押さえながら、リコは首を傾げた。
「子孫？子作りか？」
なんてこともない表情で宣う座敷わらしの少女に、藍は少し戸惑いながら、続けた。
「うん。やっぱり生物の目的は自分の遺伝子を後世に伝えるってことだし」
うだうだ言い連ねてきたが、結局は【ずきゅ～ん】したいだけだった。なぜなら彼は男子高校生で、未経験者だからだ。
「コウノトリさんに頼めばよかろう」
「……は？」
「妖怪だろうが人間だろうが赤ちゃんは等しくコウノトリさんが運んで来るんじゃぞ」
時々リコが分からなくなる。彼女が卑猥な知識に疎いのか、それともそれ相応な良識を持っているのか。少なくともコウノトリ説を提唱する彼女の目は本気だった。
「むぅ、なんじゃそのバカにしたような目は。そんなことよりぬしさんは子ども何人欲しい？我は二人かのう」
一度は言われてみたいセリフが彼女の口から放たれたが、感動は全くなかった。
脳裏に仙水を評する樹のセリフが蘇る。
『キャベツ畑』や『コウノトリ』を信じている可愛い女の子に無修正のポルノをつきつける時を想像するような下卑た快感さ。
「……」
ついこの間、それに近いモノをつきつけたけど、頬をぶったたかれただけだったよ。
「黙りこくってどうしたんじゃ？」
「あ、いや、……たしかお前親がいたよな」
「うむ。我は元人の子じゃからのう」
「いいか、よく聞けよ……」
そうして彼は語りだした。

愛の神秘を。連綿と受け継がれる儀式を。おしべとめしべを使って分かりやすく。

「う、嘘じゃろ？」

「俺、保体は１００点しか採ったことないんだ」

純粋無垢な少女は、わなわなと唇を震わせ冷や汗を流す。母親を困らせる質問ナンバー1、赤ちゃんはどこから来るの？その完璧な答えを知らされたリコは、半分涙目になって叫んだ。

「パパとママがそんな、穢らわしい！ふ、不潔じゃ！」

「不潔じゃない」

きっぱり、とキメ顔で、

「素敵なことさ」

ほざいた瞬間後ろから頭を叩かれた。

「いてぇー！誰だっ！いきなり何すんだ！」

「それはこっちのセリフよ橘！幼気な女の子になんてことふきこんでんのよっ！」

「げぇ、五十崎！」

関羽のように現れたのは、橘藍の同級生、五十崎柚だった。同じクラスの端正な顔立ちの女の子だ。また見られたくないところを見られてしまった。

「むっ、いつぞやのワラシ！」

「リコちゃん、久しぶりぃ」

肝だめし以来の再会ではあるが、あまり会いたい人物ではなかった。五十崎にはいろいろと知られたくないことを知られている。

「そうじゃお主に質問があるのじゃ」

「あら夏休みの宿題？」

「ちゃうわい。聞くところによると、お主民族学研究倶楽部とやらで妖怪の生態に詳しいそうじゃな」

いや妖怪生きてないから。

「そうだね。そんじょそこらのにわかオタクには負けないよ」
五十崎も充分にわかオタクだから。
「そうと見越して聞きたいことがあるのじゃ」
「見越し入道の弱点はねぇ、見越し入道見越したと言いながら……」
「話を最後まできけぇい！」
「んー」
「妖怪が人間になる方法を知らぬか？」
リコのした質問に藍を目を円くし、真剣な面持ちの彼女の顔を見る。
そうまでして、お前……、彼の胸に感動に似た慈愛が去来する。
「妖怪を人間に……うーん、状況が掴めないなぁ」
「異種間を超えて結ばれる方法でも良いぞ」
「妖怪が人間に恋しちゃったのね、それって素敵！ん？どうしてそんなこと知りたがるの？」
「えぇい！いいから答えい！妖怪を人間にする方法！」
人差し指を顎にあてながら、質問の答えを考えていた五十崎は、なんとなしに呟いた。
「そうねぇ。逆なら知ってんだけどな」
「む。逆とな」
「うん。だから人間を妖怪にする方法」
「なんじゃと」
リコは振り返りキラキラと「藍！」と期待に満ち溢れた瞳を彼に向けた。
「断る！」
「……なんの話？」
「あ、いや何でもねぇ。ちなみに参考までに訊くがそれってどんな方法なんだ？」
「たしか妖怪１００匹の血を浴びるって最遊記に書いてあった」
「……漫画仕込みかよ……」
藍とリコが付き合っていることを知っている五十崎だが、リコが

妖怪だとは知らない。
「不甲斐なくてゴメン。ちょっと待っててくれたら調べてくるけど……」
両手を顔の前であわせて五十崎柚はリコに頭を下げた。
「すまぬ。是非お願いするのじゃ」
対してリコはぺこりと可愛いらしくお辞儀した。
「でも妖怪が人間にって異類成婚譚よね。雪女の例を考えれば無理して人間にならなくても、掟さえ守れば」
「よぅし、五十崎！頑張って調べてきてくれ！わかり次第電話くれよな！それじゃあな！」
この夏で物事の雲行きを敏感に察知できるようになった彼は、リコを小脇に抱え、逃げるように公園を後にした。

こもった熱気を外に出すため窓をあける。電気代が勿体無いからクーラーは付けなかった。リコが「暑い暑い」とうるさかったので涼もうと図書館に行ったのだが、閉館していて仕方なく公園で涼むことになったのだ。
結局、また家に帰ってきたのだけど。
「藍よっ！一つ良いことを思いついたのじゃ」
「ほう、なんだ？」
「我は霊になる前に神の声に導かれて座敷童になったんじゃ、ここまでは良いな？」
「そういや初対面の時にんなこと言ってたな。で？」
世迷い言だと思ってたけど。
「つまり我は元人間、しからば！」
ふんぞり返って無い胸をそらしながら彼女は鼻息を荒くした。
「生き返ればいいのじゃ」
「……」
彼女の発言に藍は数秒思考を停止させた。どちらにせよ不可能に違いなかった。

「座敷童がゾンビになるだけじゃん」
「違わい。プリティーチャーミーな新生リコがぬしさんのハートを鷲掴み、なのじゃ」
「はぁ、妖怪が人間とか、生き返ろうとか無理に決まってんだろ。そんな簡単にザオリクできたら、世界中腐った死体で溢れかえるっつうの」
「えー、キリストだって死んでから生き返ったし、ドラゴンボールさえあれば」
「漫画みたいに単純にいくわけないだろ」
「じゃがドラえもんでもデスノート（読み切り）でも、」
「やっぱり漫画じゃねぇか」
ため息をつく。そんな簡単に人が生き返ってたまるか。
「そもそもお前なんで死んだんだよ」
超プライベートな質問を浴びせる藍には、思いやりが欠けていた。だからモテないのだ（友人談）。
「……」
言ってから、しまった、と思った。目の前でプルプル震える座敷童の目尻には微かに光るものがあった。
「あ、すまん。無理して言わなくても」
藍が謝罪の声をあげる前に、リコは戸惑いながらもやがて決心がついたらしく、深呼吸をしてから続けた。
「交通事故じゃ」
いまも忘れないあの暑い夏の日。
「事故？」
「だから今思いついたんだけど」
一転彼女は明るく言い放った。
「時間を戻せばいいのでは？」
「はあ？」
彼女の瞳は輝いている。
「うむ！これはいいアイデアじゃ。時間を戻して事故を無くせばパ

パもママも悲しまないし」
「いやいやいやまてまて、落ち着け、馬鹿かお前は！？馬鹿なのか！？過ぎた時は戻らないっつうの！」
「いやしかし、ドラえもんでもドラゴンボールでもタイムマシンは出てくるし」
「またその２つかよ！」
「時速１４０キロを出せればタイムトラベルは出来るってドクが言ってた」
「プルトニウム入りのデロリアンにしか無理だ、レギュラーガソリンじゃ不可能」
「ふむぅ。文句が多いのぅ」
少し苛立たげに彼女はため息をついた。
「んじゃある日目を覚ましたら時間跳躍能力が藍に備わる、このパターンで行こう」
「なに勝手に決めてんだタコ！俺を超能力バトルの世界に引きずりこむな！」
「矢に撃たれてレクイエム状態になる方が良いのかのう？アナザーワンバイチャ・ダスト藍！」
「そこで区切ると俺がゴミみたいになるだろ！」
「もしくはセレビィを捕まえるか、航時機を発明して見つけてよドリームするか」
「もっと現実みよう！失った時間は帰らないの！」
と叫んだところで着信を知らせるアラームが鳴り響いた。眉間にシワを寄せながら携帯電話を取り出す。案の定発信者は五十崎柚だった。
流石五十崎さん行動が早い、とスピーカー機能をオンにしてから通話ボタンを押す。
『もしもし橘？リコちゃんに頼まれた妖怪を人間にする方法を調べてみたんだけど』
「あーはいはい、いやぁ悪いね」

リコの瞳がプレゼントを前にした子供のように再び輝く。
『手元にある資料をざっと見た限りでは、そういった情報は載ってないね』
「そうか、あんがとな」
隣では、プレゼントの中身が『偉い人の本』だった時のようにリコががっくりと肩を落とした。
『まだ調べてみるから、わかり次第また連絡するね』
「おお、悪いな。いやぁ無理すんなよ、ほんとそこまで頑張ってくれなくていいから」
『趣味みたいなもんだから気にしないで。それにしても難しい質問だよ。幽霊を人間に、だったらまだなんとかなるのに』
「ほう。例えば？」
リコの表情が光明が差したみたいにぱあっと明るくなる。座敷童は不浄霊の延長みたいなもんだからだろうか。
『生き返ればいいんだもん』
「いやそういうのは求めてない」
『または時間を遡って』
「まじでそんな話はしていない」
『あとは、そうだなぁ。他の人間に取り憑くとか』
「なに！？」
『ドラゴンボールが七つ揃えば簡単に復活できるしね』
「いまなんつった！？」
『え？ドラゴンボールが……』
「違う！その前だ！」
助手の一言でピンときた名探偵のようなやり取りを終え、「そうか参考になった。それじゃまた」と電話を切り、おもむろに立ち上がった。
「どうしたんじゃ？」
「……」
ごそごそと本棚をいじりだした藍に、リコは首を捻る。やがて手

に何冊か雑誌を持って居間に戻って来た彼は朗らか表情でテーブルにそれらを広げた。
「リコ！彼女達から一人選んで乗り移っちゃいなよ」
「なぬ？」
煌びやかなアイドル達が花咲くような笑顔でプリントされている。アイドルと付き合いたいという邪な思いが具象化した藍の下卑た笑顔に、リコは本気で引いていた。
「俺としては、この子がオススメかな。童顔なんだけど豊満なボディしてるし、なにより足がいい」
「……」
「いやしかし、彼女も捨てがたいな。見ろよこの胸！なにより眼力があるよね」
「藍」
「ん？」
「最低。この豚野郎」
「……え、今なんて？」
「もうまったく藍ったら。あんまり冗談が過ぎると、沈めちゃうぞ」
「……」
座敷童のさめざめとした表情に、藍は知り合いの蛇女を見た気がした。
直接殴られるより深く、その暴言は彼の心を抉った。

よろしく駄文2

あまりの暑さに蕩けるように腹這いになっている藍の背中に、どしんとリコがのしかかってきた。
「ぐふっ」
「ゴロゴロするなー！なしてそないなまけるかー？」
「暑いし、眠い、それ以外に理由があるか？」
真夏は活動意欲を根こそぎ奪っていく。手付かずの宿題が、彼のやる気スイッチＯＦＦを物語っていた。
「そんなことより、我の相談事の解決案を練るのじゃ」
「まだ続けんのかよ」
溜め息をつきつつ、床のひんやりとした冷気を全身に浴びようとする。
夏休みに入り、怠け癖に拍車がかかっていた。
「ん？お前、軽いな。それにそこはかと　なく涼しいような」
「霊体だから質量操作はお手のものじゃ」
「よし、そのまま上にいることを許可する。俺は昼寝すっから、ウォーターベッドのように身体を冷やしてくれ」
リコは無言で藍の肩にエルボーを浴びせた。
「ぬぐわっ！」
「早く起きて、考える！いち！にー！さーん！」
背中で跨がる彼女は、カウントごとに重くなっていった。
「こなきじじいじゃんか！」
「ははは、急がぬとストレッチパワーが背中に溜まっていくぞ！」
「重くなったら起き上がれないだろ！」
「あ、ふむ。確かに」
てへっ、と舌を出した彼女はしずしずと背中から降り、それを憎々しげに睨み付けながら、仕方なく身体を起きあがらせた。

「大体お前は俺に意見を強要できる身分か？人の提案シカトしといてよ」
提案とは名ばかり、自分好みのアイドルにとり憑いてもらいイチャイチャするという空しさ１２０％のエゴイズムだ。
「でもなんだかんだでやっぱアイドルは可愛いよなー、あんな子がカノジョだったら最高なのに」
「死に急ぎかや？われが死出の旅の水先案内人になってやってもよいぞ」
水溜まりにおちた蟻を観察する子どものような純粋な笑顔で、どす黒い一言が放たれた。
「とまぁ、冗談はさておき、真剣に考えるとしますか」
俺はチキンではない、命が惜しいだけだ。
「ひとまず話を纏めると、目的は『リコが人間になる』、おーけー？」
「もしくは藍が妖怪になる」
「断る！断固拒否！」
心の底からの叫びだった。
「妖怪効率的じゃぞ、病気にならないし、歳もとらない」
「ん？まぁ。特に不利益はないわな」
ならなんで、妖怪になりたくないのだろう？倫理的に？それともただ面倒だから？
「じゃろ？どれ、我と契約すれば永遠の命と世界の半分と惜しみ無い愛情を約束しよう」
一瞬考えてみたが明確な答えは出なかった。
「別に人間でも不利益ないのに無理して妖怪になる必要はないわな。不老不死とか疲れそうだし」
「なんという草食系な意見、権力者の最終目標をそのような一言で片付けるとは、達観的な……くくく、藍はすでに妖怪なのかもしれんな」
「ほう」

リコの含み笑いに軽く頭を抱える。
「妖怪、穀潰し！」
「そりゃおまえだ」
「……」
素早い切り返しにリコは言葉を失った。
「話を戻すぞ。挙がったアイデアのなかでは『アイドルに取り憑く』が一番実現性が高いわけだ」
「そうじゃのー、最近アレやってなかったから身体がなまっとるかもしれんの、どれ、いっちょやってみるか」
「？なんだ」
肩をグリグリまわしながら、朗らかな笑顔で彼女は答えた。
「妖力をフル活用した、脅は……、もといお願いじゃよ」
「うん、いま、脅迫って言おうとしたね、謝る、俺ちょっと調子のってたよ、だからあれだけはやめてくれないかな、ね、まじわるかったから」
途端に卑屈になったのはそれだけ彼に深いトラウマが存在しているからだった。
「しょうがないのー」
「で、だ。ろくな意見がでないんだから、今回でこの話はおしまいでいいじゃん」
「ううむ、そうはいっても」
納得がいかないらしくリコは唇を尖らせる。
「いやはや、なにか手が無いものか」
「そんなに悩んでるなら第三者に相談でもしたらどうだ」
「はにゃ？」と首を捻る彼女の横で携帯電話のラジオ機能を呼び出し、音量をマックスまであげる。
スピーカーから聞こえてきたのは『子ども電話相談室』だった。
「夏休みだし、混じってもわかんないって」
「なしてわれが子どもにまじって相談せにゃいかんのじゃ。しかもラジオって、Ｇｏｏｇｌｅ検索のほうがよっぽど効率がよいわ」

「見も蓋もねぇこというな。ちょいシミュレーションしてみっか」
こほんと咳を一回してから藍は声を低めに続けた。
「お名前はなんて言うのかな」
ポカンと呆けていたリコだが彼の意図がわかったらしく渋々そのごっこ遊びに付き合ってあげることにした。
「人形坂梨子と申します」
「リコちゃんこんにちは。何年生かな」
「女性に歳を訊ねるのは無粋極わりないです。黙秘権を行使させていただきます」
「は、はい、じゃあ今日はどんな相談かな？」
「あやかしを人にする方法を知りたいのですが」
「あー、成る程、これは難しい質問だね。今日質問に答えてくれるのは妖怪博士こと××大学の水道橋教授だよ」
「……」
「はい、水道橋です」
声のトーンを変えて藍は続けた。
「こんにちは。リコちゃんはアレかな、妖怪が好きなのかな」
「あの、そういう世間話は良いので結論だけ教えていただけませんか？」
「……」
「答えてください、妖怪を人間にする方法、あるんですか？ないんですか？ないなら時間の無駄なんで」
「んー、そ、そうだね。あることにはあるよ。それはね、うんちゃらかんちゃら」
「へぇ。それは恐れ入り谷の鬼子母神です」
「カッーーート！」
「む」
あまりのクールっぷりに藍はたまらず声を揚げた。
「なんでてめー普段とキャラが違うんだよ！恐れ入り谷の鬼子母神ってなんだよ！？」

「いや、だってダルいし」
「ぶっとばすぞてめー！」
ダルいは俺の専売特許だ！
いつになく荒々しい藍に、リコは涼しげに言った。
「われは身のある意見を求めておる。お分かり？」
舌打ちをして数秒、直ぐに新たな考えが頭を掠める。
「そうだな、そんなら『こころの電話』とか」
「お主、人の話聞いてないじゃろ」
「どんな質問にも真摯に答えてくれるぜ。一人で悩むより健全だろ」
「あったこともない人に相談事なんてできるはずがないわ。ぬしはかけたことあるのか？」
「バカだな。俺がかけたら即刻メンタルクリニックのご案内になるだろ」
「なして？」
「いや……」
他人には見えないカノジョが人間になりたいと騒ぐんです！……誰がどう考えても暑さに頭がやられた人だった。
「むー、でも確かにいろんな人に意見を聞くというのはナイスアイディアじゃな」
「折衷案のつもりか？」
「よし決めた！」
大きくリコは声をあげ、手のひらで片方のこぶしをぽんと打ち付けた。
「アヤメに相談しよっと」
「きゃーーーか！！！！！！」
大声コンテストがあったら優勝をかっさらうレベルの声だった。
残響が室内にこだまする。
「む、なんじゃうるさいのう」
「なんで、ここで蛇女の名前が出るんだよ！！絶対家に呼ぶなよ絶対だぞ！！」

「静まりたまえ静まりたまえー、なぜそのようにあらぶるのかー」
「今までの経験を経て、アヤメと付き合うやつはキングオブドMだぞ！わかりか？MのなかのMのドMのキング！ビックリマンチョコならヘッドレベルのレア度だぞ！」
「……何言うておるのかさっぱりじゃ」
「だからお前は相談できる友達一人しかいないのかよ！」
正直自分でもなにを言っているのかわからなかったが、ともかくアヤメにだけは会いたくない一心だった。
「な、なにを、我にだって信頼出来る友の一人や二人……」
リコの声はじょじょに小さくなっていく。
「まず、アヤメじゃろ」
「もう蛇女かよ」
「それから、藍に」
「ほう」
沈黙が室内を支配した。
「終わりか？」
「……」
「お前友達いない子だったんだな」
「……あっ、桃ちゃん」
「こないだ会ってちょろっと話しただけだろ論外」
「五十崎柚」
「俺の友達はなしね」
「……」
リコはプルプルと震え自身の着物の裾をぎゅっと握っていたがやがてテンション高めに声をあらげた。
「あ、おった。おるぞ！」
「ほう誰だ」
「山田じゃ！」
まじで誰だ。
「そうじゃ忘れておったわ、ふむふむ、久方あっておらぬからのう」

「いや、誰だよ」
「む？山田・メテオール・ヴィオレットじゃよ」
「いや、しらんわそんな人」
「山田は人ではない、悪魔じゃ」
しれっと良い放たれた詳細に呆けるより先に、
「いいか、山田に俺を絶対に紹介するなよ」
身の安全を図ることが最優先に行われた。どっからともなく、死神めいた香りがしてくるプロフィールだ。
「あの性格も長らく会わんと懐かしくなるもんじゃな。よしっ、呼んでみるか」
「人の話をきけぇい」
藍は必死だった。これ以上妖怪ファミリーを増やすわけにはいかない。アヤメとリコだけで手一杯なのだ。
「山田の都合も考えろよ！つうか悪魔ってなんだよ、冗談だろ」
「自分で悪魔ゆうとるんだからそうなんじゃろ？詳しくは知らぬ。本人に訊いてみ」
「頭沸いてる人じゃんか。そんなやつとお知り合いになんてなりたくないからな」
鳥の雛のようにけたたましく山田なる人物との邂逅を拒否する藍を無視してリコはスックと立ち上がった。
そのままスタスタと台所まで行くと冷蔵庫のドアを開け、生肉を取りだし、居間に戻ってきた。
「本当は子羊の新鮮なお肉じゃなきゃいかんのじゃが、まぁこれで良いじゃろ」
「おい、お前まさか」
「あとは鏡と……」
皿に載せたお肉の前に卓上ミラーをくみたて、リコはその前に正座した。
「不思議な呪文じゃったっけ？」
「……」

「なんか、足りん気がするのう」
「もしお前が悪魔を呼び出そうとしてるならこれほどがっかりなことはない」
何がしたいのかよくわからない光景だった。
「なんじゃ藍。文句あるのか？」
「仮にも悪魔を呼び出そうとしてるくせに雰囲気もへったくれもないな」
「む。雰囲気のう。とりあえずドライアイスに水でもかけるか。あとは藍がオルガン弾きながら讃美歌でも歌ってくれりゃ雰囲気もむんむんなんじゃが」
藍はリコの無垢な瞳を見なかったことにした。
「いや、だから用もないのに悪魔呼び出すなって」
「はっ！」
藍の発言にピンときたらしい。リコは目を見開いて、手を叩いた
「そうじゃ！山田は願いを叶える仕事をしとるんじゃった」
「なにそれ？パチンコ雑誌の広告ページ作成のお仕事か？」
「むふふ、そうと決まればデーモンの召喚！我にとってのドラゴンボールは山田じゃたとはのう」
「まさか山田に人間にしてもらうのか？そんなうまい話があるか、ぼけ」
「ものは試し、カモン山田！」
リコは万歳するように両手を空に掲げたが、特に何かが起こるわけではなかった。
「変じゃのう。呪文が違うのかのう」
藍はアホらしくなって、再びその場に横になった。
お肉の前でリコはしかめっ面で、身体をくねくねと試行錯誤しているが、当然ながら山田なる人物が現れることはない。
「やーまーだー！！」
「お前の不思議な踊りに少なくとも俺のＭＰは０になったよ。そんじゃお休み」

肉が傷む前に決着をつけるべきだ。夏は食べ物の腐敗が早いから。
薄れゆく藍の意識は深く睡眠の底に沈んでいった。

よろしく駄文3　上

眠気を飛ばす金切り声が覚醒を促す。苦情が来てもおかしくない騒がしさだ。瞼を押し上げてみるとあり得ない現実が目の前にあった。

「おひさしぶりですぅ！リコねー様！！」

見覚えのない金髪の少女がそこにはいた。外見はチンチクリンでリコと同い年くらいだが、実際はどうかわからない。だって、あいつら、は、

「ああ、ねー様ねー様ねー様！！リコねー様！！なんて甘美な響きでしょう！ワタクシはねー様とお話出来るだけで十二分に幸せなのです！」

「それはよかったのう」

「なのにねー様ったら全然連絡をくださらないんですもの！悲しくてワタクシ、毎日枕を濡らしたものです！」

涙が出てくるのはこっちの方だ。

うそ…だろ…？

机の上には試行錯誤の痕跡、芳ばしい香りを放つ焼きたてステーキや卓上ミラー、もうもうと煙をあげるドライアイスなどが、並んでいる　。

あいつ、悪魔召喚に成功しやがったな……。

リコの腰の辺りに彼女はしがみついている。容姿はまさしく悪魔的魅力を放っていたが、完璧過ぎて逆にひく顔立ちだ。服装は外套、というわけではなく、ドクロがプリントされた黒Tシャツに紺色のハーフパンツ、さながら女性パンクロッカーだ。幼すぎる容姿がもやもやとしたギャップを放っている。

「くっつくでない、暑苦しい」

「よいではありませんか？久しぶりの再会なのですよ！ワタクシを

構成するねー様分の充電が必要なのです！」
「うまく言えんが、お主、キモさに磨きがかかったのう」
見たままを述べるのであれば、外人の女の子が和服の少女にベタベタくっつく、なんとも微笑ましい画である。シルフスコープを通してみると魑魅魍魎の異種間交遊だ。西洋妖怪ｖｓ東洋妖怪の一騎討ち。
できることなら、不法侵入を糾弾する気も起こらないくらい可愛らしい二人、そういうことにしておきたい。
「ああ、なんて辛辣なお言葉。でもよいのです。リコねー様からのお言葉はワタクシにとっては天恵に等しいのです。ああ、ねー様、もっとお言葉を！！罵り言葉でも！　」
「ええい、だから会いたくなかったんじゃ！気色悪い！次そんな吐き気を催す台詞吐いたら連絡切るからの」
「なんたること！？非情、放置プレイですか？……きゃ、ワタクシったらプレイなど卑猥な言葉を！？いえよいのです。ねー様相手なら、いつでも」
「切る！絶対連絡切る！絶交！！」
「ああそれだけはお許し下さい！どうかリコねー様！！この卑しい山田・メテオール・ヴァイオレットの血迷い言だと思っていただきご慈悲を！どうかどうか！」
恥も外聞もかなぐり捨てた、美しすぎる空中土下座。俺も頭を抱えて窓から飛び出したい気分だ。
「う、うむぅ。絶交はさすがに言い過ぎたかのう。年賀状くらいならだしてやらんでもない」
「ああ、ねー様！だから好き！！」
ホワホワと長い金髪をなびかせ彼女は再びリコに抱きついた。
「だぁぁあー反省しとらん！でぇい、お主なぞあけおめメールで十分じゃ」
「そんなぁねぇさまぁ」
瞳を閉じて暗闇に身を委ねれば、ゲリラ豪雨の雷鳴が聞こえた気

がした。
寝よう！もう一度眠ればこんな非現実、世界から消えてくれるはずだ！
藍が決心を固めて、睡眠の心地のよい泥に片足を突っ込もうとした時だった。
「お、藍。起きておるな？お早うー」
薄く目を開けて見てみるとキラキラと眩しい笑顔を携えたリコが覗きこんできていた。狸寝入りは通用しないらしい。
「……おはよう」
眉間に深いシワを刻みながら、仕方がないので体を起き上がらせる。
「おお、見よ藍。こやつが山田、職業悪魔じゃ」
そんな職業はない。即刻ジョブチェンジを要求する。
「マッカがよく足りたな……」
「いやはや途中で生き血が必要とわかったときは困ったものよ。藍よ、協力感謝するぞ！」
「まてぇい！！そんな献血協力した覚えないぞ！」
「ほら、お互いに自己紹介する！」
無視しリコは華やかなる笑顔で、二人を向き合わせた。
「……どうも」
静しず挨拶を行う。
ウェーブがかった長い金髪、派手な服装とは対称的な稚児めいた翠の澄んだ瞳、ほんのりと赤いふっくらした頬、将来的に北欧美女になる可能性を秘めた美しい容姿……。悪魔、といえばその通りだが、どちらかといえば天使のような見栄麗しい少女がそこにいた。
とにかくめっちゃ可愛い。筆舌にしがたい。五年後くらいなら土下座してでもお付きあいしたいレベルだ。
「なんですこのブタ」
そんな彼女が醜く顔を歪めそういい放った。
「ヒモですか？いえ、そんなの許しません。そうですね、せいぜい

財布、いや奴隷。うーん、家畜ですね？ねー様！言ってくだされば
ワタクシが提供しますのに」
ああ、やっぱりあいつ（あやめ）と同じ匂いがすると思ったんだ。
罵詈雑言の嵐に外出を申請したくなってきた。というか部屋から
出させてくれ。
「ちゃうぞ、藍は我のカレシぃ（語尾上がる）じゃ」
「はい？」
リコの端的な一言に沈黙が落ちる。
「……は、え？」
立っていられなくなったのか、がたんと彼女は尻餅をついた。
目をしばたかせ、顔を青くし蚊の鳴くような調子で呟く。
「ＮＴＲ……？」
「は？」
「冗談ですよね？」
涙を流しながら震える声でリコに問いかける。
なんだか病的だった。
「お互いにハジメテはヴァージンでいようって誓い合ったじゃない
ですか！？ねー様ねー様ねー様！！嘘だと仰って、あのときと同じ
笑顔でワタクシを慰めてください！」
「誓いあっとらんわボケぇ！そんな記憶微塵もないわい！」
山田は力無くだらりと、藍を指差し、
「このゴミムシですね！？このゴミムシが淫隈な手段を持ってねー
様を手込めに！許しでおくべきか！清純無垢清廉潔白なリコねー様
をピーーーーー（禁止用語）するなんて！！！」
「だまれぃ！」
狂ったように叫び続ける山田に堪忍袋が切れたのか、いつになく
乱暴にリコは彼女をソファに投げ飛ばした。
それでも頭を抱え髪を振り乱しながら彼女は元気一杯に、
「許さない絶対に許さないから。ねー様ねー様ねー様！！ワタクシ
だけを見てください」

尚もぶつぶつ呟いている。正直気持ち悪かった。
「ウザイのう……」
ここまで機嫌悪そうなリコを藍は始めてみた。
「まぁ、よいほら自己紹介」
リコは和やかに藍の背中を叩いたが、
そんな場合ではないことくらい一目瞭然である。　現状を冷静に見てほしいが、彼女にそれは叶わないことくらい藍はすでに理解していた。
「橘藍です。よろしく」
波風たたぬよう極力申し訳なさそうにいう。負い目を感じることなどなにもないが相手は悪魔、怒らせるのは得策ではない。
ソファの上で踞る少女。彼女は頭を抱ながらこちらにちらりと視線をやった。
長い睫毛は涙でしっとりと濡れている。
ぶつぶつぶつ……。返答はなく、プックリした唇を動かしているだけだったが、やがて、ソファぴょんと飛び上がると大きな声で彼女は叫んだ。
「吹っ切れましたぁぁぁぁ！」
あまりのボリュームにびっくりして仰け反ってしまう。
「ええ、ええ！リコねー様の選んだ御仁！それはもうすばらしい殿方に違いありません！ワタクシ、応援します！」
意外な反応に戸惑う。これはいい意味で予想外だ。
そうだ、俺はこういう平和な反応をずっと待っていた！
「そうです！ねー様！！３Ｐも悪くありませんよね！」
「……」
こいつなにいってんだ。
「なにそれ？」
「聞くなリコ、耳を塞いでろ」
思わず真顔でそう言っていた。
「まあ、リコねー様ご存知ありません？スリーピース！三つの幸せ

なのです！」
「ようわからんが認めてくれたようでよかったわ」
「ええ、自己紹介させていただきます！」
ペコリと可愛らしくお辞儀してから
、彼女は続けた。
「山田・メテオール・ヴァイオレットと申します。職業は悪魔。対価次第ではどのような願いも叶えさせていただいております」
「ん？山田・メテオール・ヴァイオレット……さん？」
「ええ、バイオとお呼びください」
「山田さんってよばせてもらうわ」
その敬称じゃ悪魔じゃなくてゾンビみたいだ。
「て、リコ、お前彼女の名前」
「ん？山田・メテオール・ヴィオレット？」
紹介段階ではリコは確かにそう言っていた。
「いや、だからヴァイオレットだろ？」
「む？じゃから山田・メテオール・ヴィオレット」
「いやヴィオレットじゃなくてヴァイオレット」
「む？なにを言うておる？ヴィオレット。あっとるじゃろ」
「いやいやだからー」
耳の穴をかっぽじれ、と命令しようとした矢先に、
「ワタクシの名前は山田・メテオール・ヴィオレットですぅ！ヴィオって呼んでください！」
「お前それでいいのか？」
勝手に改名された瞬間だった。

よろしく駄文3　下

「ワタクシは橘様のことなんとお呼びしたらよろしいですか？」
目映い笑顔で小首を傾げる。外観年齢は色々とアウトだから心を揺らされることはないが、　そっちの思考回路を持っていたらちょっとヤバかっただろう。
「リコねー様に対する藍にー様、でしょうか？」
「呼び捨てでも構わんよ。あやめはようブタと呼んでおる」
なにも言わずにリコの頭を叩く。「いたいのうー」と言いつつどことなく嬉しそうなリコにヴィオは目を丸くする。
「しんっじられません！ＤＶ？ドメスティックバイオレンスですか？ああなんたること！リコねー様！」
叫びながらまた抱き着いたが、か細いリコの足では支えきれなかったらしい、二人して倒れる。
「ああ、ああ！リコねー様のお髪が乱れております！兄様！ワタクシ、そのような愛のカタチ認めません！やるならワタクシを！どうぞワタクシを！リコねー様と一緒にワタクシを！さあさあさあ！」
「お主のせいで余計髪が乱れるわ！はよう離れい！」
「ワタクシは性風俗の乱れのみでございます！」
自覚あったんだ。乱れあいながら、息を切らせてようやく立ち上がると、リコは深いため息をついた。
「よいか？お主をよんだのは用事があったからじゃ。じゃなきゃ、誰が呼び出すか」
「告白？告白ですね！！まっておりました！胸に飛び込んできてくださいまし！！」
「はなしを、最期まできけい！！」
オーラが妖怪モードになっているリコに物怖じしないヴィオは、空気が読めないという点に関しては天才的なのかもしれない。

「よいか！叶えてほしい願いがあって主を召喚したのじゃ」
「ビジネスの話ですね」
「そうじゃ」
やっと落ち着いてくれたらしい。
「いつもにこにこメテオール・ヴィオレット！どんな願いも残りの寿命で取り引きさせていただきますわ！」
「おお、頼もしいのう」
胸を反らせてふんぞり返る様は、可愛らしいの一言につきた。
「ですが、ねー様？ねー様はこの世ならざる人、寿命がないから契約ができませんが……」
「大丈夫。藍のライフポイントがあるから」
「ちょっとまった」
普段温厚（本人談）な藍も待ったをかけずにいられなかった。
「藍のライフを千ポイント払い、ヴィオレットとの契約を発動！我の願い事がすべて叶う！」
「やめろ！」
「可愛い彼女の頼みを聞けぬと申すか？」
「そういう次元の話じゃないだろ！」
増えてしまった妖怪ファミリーだが、これ以上自分の日常に非現実を持ち込みたくない。
ぶっちゃけるなら寿命とかしゃれにならない。
「残念ですが他人の命では願いを叶えることできません」
「むう、そうか仕方ないのぅ」
どうにかなったら、おれはどうにかされちゃうところだったのか！？リコ、恐ろしい娘っ。
腕を組んでなにやら考えていたリコだが、やかて納得がいかないようヴィオに食って掛かった。
「融通をきかせい」
大阪のおばちゃんのようや厚かましさだった（独断と偏見）。
「リコねー様の願いなら叶えてあげたいんですが、上司から叱られ

るのはちょっと……」
「売った恩を仇で返すか？げに悲しきは忘却といったところかのう」
「まさかまさかまさか！とんでもありません！まざまざとねー様の勇姿、思い起こすことができます！忘れもしない今日のように暑い夏の日！数年前の出来事！あれはそう！ＧＨＱが……」
「ちょ、ちょっとまてい」
ポロリと年齢がバレそうになってリコは焦った。
「原宿で複数人のロリコンにほにゃららされそうになったところをねー様が颯爽と現れてけっちょんけっちょんにしてくれたご恩！弱小悪魔のワタクシそれ以来リコねー様に憧れていままでやってきました！！ああ愛しきリコねー様」
「と、ともかく我に感謝しておるなら、どうにかせい！どうにかして願いを叶えい」
話を聞く限り心暖まるエビソードという感じがしなかった。
「うむむぅぅ！わかりました！不肖ながら悪魔ヴィオレット！ねー様の願いとあらばこの身削ってでも叶えて差し上げますわ！」
親指をぐっと立てたヴィオにリコは拍手しながら、
「さすがはヴィオ！我にできないことを平然とやってのける！そこに痺れるゥ憧れるゥ！」
ぶぅお！勢いよくヴィオは鼻血を吹き出した。
「お、おい大丈夫かよ！尋常じゃないぞ！その血の量」
蛇口から溢れる水が如く溢れる鼻血にカーペットが汚されたことよりも、素直に心配の声があがる。ティッシュ箱を持ってあわてて彼女に差し出した。
「ねー様、おほめの言葉有難うございます」
「ちょっ、鼻血止まってないぞ！」
鼻栓を詰め、その美貌を台無しにしながら、彼女は人差し指を一本たてた。
「感謝ついでにこちらからもひとつ条件があります」
「条件？」

ぶぅお！再び鼻血が噴き出す。
「鼻栓かえろ！」
真剣な表情を鼻栓で台無しにしながら彼女は続けた。
「それで条件というのは？」
「簡単ですわ！」
「ほう、申せ」
「ねー様、ワタクシとニャンニャンしてください！！！」
ちょっと意味がわからなかった。
「なんじゃそれ？」
「ニャンニャンはニャンニャンです、姉さま！どうです？いかがなさいます？」
目が血走っていた。怖い。
「ようわからんが、その条件のんだ」
「あああ、ねー様ねー様ねー様！！！」
藍も意味がわからなかったが、ニャンニャンが卑猥の言葉のように聞こえた。
「有難うございます有難うございます！！サンキューシェイシェイディモールトグラッチェ！！世界の挨拶、有難う！！」
「おいまた鼻栓決壊してんぞ」
鼻血がダバダバと滝のように噴き出していた。

「それで、ねー様、お願い事というのは？ワタクシでしたらいつでもねー様のためにこの身を捧げる覚悟がございます！いますぐにでもワタクシの純潔をっ！セットで貞操もプレゼントしております！ご賞味ください！！」
「我を人の子にしてほしいのじゃ」
「……はぃ？」
端正な顔立ちをしたヴィオの表情が崩れた。ここまでいくと顔芸の域だ。
「ねー様？！」

「妖怪を人間に、おぬしならできるじゃろ？」
「どうか正気を！耳！そうかワタクシの耳が狂っているのですね！お待ちくださいねー様！今鼓膜を付け替えますから！！」
正気を保つのはお前のほうだ。
「うるさいのう。いいからはよう我を人間なせい」
「嘘嘘嘘！そんなのまっーーーーかな嘘！ねー様は座敷わらしだからこそねー様であって、人の子のねー様はねー様ではありません！」
「人間になったら我の魅力が無くなると申すか」
「そんなことありませぇん」
親猫に甘える子猫のような声でヴィオは応えた。
切り替えの早さは驚嘆にあたいする。
「人の子になり弱体化なされたねー様をお守りする。悪くありません！但しねー様！時には激しくワタクシを叱咤してください！！！」
「お断りじゃ」
「ああ、流石リコねー様！」
狂ったリズム感で繰り広げられる会話に食傷ぎみになった藍は、めんどくさくなったのでその場でゴロンと横になった。もう勝手にやっててくれ。
「さあ、いきますよ！ねー様！」
「おおーついに悲願の時じゃ！」
二人向きあい、なにやらぶつぶつと唱え始める。どうやら言葉の意味はわからないがなにかしらの呪文のようだった。
「アップクアチリキアッパッパァッ！！」
変化は直ぐにおとずれた。
部屋が暗くなったと思ったら、火がないのにも関わらず煙がリコの身体を包み込んだ。雷鳴に似た音が轟く。
「お、おい、これまじか？」
アンビリーバボーな光景に開いた口が塞がらない。
そこには確かに非現実な世界があった。
「アジャラカモクレンテケレッツノパッ！！」

煙が晴れてきた。音はやみ、部屋の輝度がもとの明るさにもどる。
どうやら儀式は終わったらしい。
「……」
「おい、大丈夫か？」
真っ青な顔で立ち尽くすヴィオの肩に手をおく。リコの様子はまだわからない。
「失敗しました……」
「はあ？」
「原因は対価が無かったことと、荒唐無稽な願いだったため、」
「おまえ！ふざけんなよ！リコは！りこ！おい！」
身体の芯が熱くなっているのを感じる。これが怒りなのか、哀しみなのか、自分の心なのに上手く読み取ることができない。
「ワタクシがあまりにもねー様とのニャンニャンを楽しみにしすぎたせいです！」
「なん、にゃ、この格好は……」
クリアな空気の中、質の悪い猫耳をつけたリコが立っていた。
「お主、いい加減にせいよ？我をバカにしとるのか？」
「滅相もございません！ええ！ですが猫耳姿のねー様もサイコーにキュートです！！」
「誉められたところでにゃんも嬉しくないわ。このにゃにぃにゅにぇにょが、言えなくなる呪いをはよう解いてくれ」
どうやら『な行』が上手く発音できないらしい。
「えー」
「怒髪天をつくとはこのことか」
「しかし、兄様も猫耳をいたく気に入られてるようす！」
「む、そうにゃのか藍」
赤ら顔で聞いてきたが、
「いや別に」
「もどせぇい！」
そんな嗜好はもっていなかった。

「そもそもリコねー様が間違ってるんです。いえ、もちろんねー様のやることに間違いなんてありませんけど、いやむしろワタクシと間違いを起こしてほしいくらいです」
「お主、結局なにがいいたい？」
支離滅裂だった。
猫耳をとったリコにヴィオはしょぼんと落ち込んでいる。
「人間なんてろくなもんじゃありません。考えてること全部が卑しいアホ面ばかりなのです」
「そりゃお主のことじゃろ」
「ああリコねー様！なんて見事な切り返し！ワタクシの言葉がワタクシの胸に深く突き刺さります！自爆？自爆ですか？ああこんなことならもっと激しい言葉をはいておくんだった！！」
この夏でちょっとやそっとじゃ驚かないよう成長した藍もドン引きの狂気だった。
「ようは人間になるなといいたいんじゃろ？しかし、藍とお揃いになるには致し方ない事なのじゃ」
「ああ！ねー様！兄様を愛しておられるのですね！美しい！なんて美しい感情！ワタクシ感動でこの身震える思いです！……でも、人間はクズです」
敵意むき出しの冷たい瞳だった。なるほど確かに、先程語っていたリコとの初対面を鑑みるにその人間に対する負の感情は納得ができる。見てきたわけじゃないので、なんともいえないが、色々あったのだろう。
「しかし、藍は素晴らしい人間ぞ」
「例えばどのあたりが？」
「……」
そこで無言になるな。
「いいですかねー様！人間は生物のクズなのです！」
「しかしお主が慕っておる藍も人間じゃぞ」

それはお前の恋人だからだろ、と藍が声をあげる前に、
「いやだなぁ、ねー様、そんなのねー様の前だからに決まってるじゃないですか！もし二人きりで兄様とお会いしたなら兄様今ごろあの世の住人ですぅ。そもそもワタクシのリコねー様を手込めだなんて不相応にほどがありますわ、あのゴミムシいつか必ずぶち殺す」
「……」
「……はっ」
戦慄、この場を表すのにここまでしっくりくる表現はない。
こえぇぇぇ！
「な、なんーてにゃ！」
可愛らしく言っても誤魔化される藍ではない。
「び、びっくりしたのう。心臓に悪いわおぬし」
リコはごまかされたけど。
「えへへ、サプライズなのです！ねー様にお会いしたときの電撃を少しでも味わってほしくて」
「ふん。なかなかやるではないか」
ヴィオは鼻血を噴き出しながらクールな顔つきで、
「妖怪人間をみれば人間がいかに下賤な生き物かよくわかります」
「なんじゃそれ」
はやく人間になりたーい、だ。
「そうだ！ねー様！今からレンタルショップにいきましょう！そして18禁コーナで、げふんげふん、妖怪人間のビデオ借りて鑑賞会といきましょう！」
「うむ？構わんが」
「うひょひょひょ！！」
藍は生きてきてここまで醜い笑いかたを観たことがない。
玄関から出ていった妖怪二人を見送る。ようやく静けさを取り戻したリビングで藍は一人頭を抱えた。
やべぇ、やべぇよあれ。
もう色々とアウトだよ。

夏の幻

八月下旬のある日のこと。
木製のドアを開けるとともに鐘の音が響き、店員が接客にやって来た。それを「待ち合わせですんで」と断り店内をざっと見渡してみる。
メールで喫茶店に来るよう言われたのだ。禁煙席で待ちぼうけする呼び出し人を見つけ、彼は小走りで駆け寄った。
「おまたせ」
「ん、ああ」
橘藍は読んでいた本から顔をあげ、待ち人が来たことを悟ると無言で鞄に本をしまった。
「なんかドライだね。そこは恋人相手みたいに『全然まってないよー』って言ってくれないと」
「お風呂にする？ご飯にする？それともわたし？」
「喫茶店で使える選択肢は一つしかないよね」
向かい側の席に腰を下ろすと同時に店員が接客に来たので、とりあえずアイスティーをお願いしておく。
「忙しいとこ悪いな」
「大丈夫だよ。別に暇だったし」
半ば強制的に参加させられた夏期講習はとうに終わりを告げ、残すところ１０日足らずの休暇をエンジョイするのみである。
嫌な思い出を外に出さぬよう白江藤吾はアクビを噛み殺した。

それにしても、と藤吾は思う。
目の前でカフェオレを啜る橘藍という人物は人一倍のプライドを持ち合わせたやつだ。それでいてめんどくさがり家でもある。
ただの遊びの連絡で呼び出したとは考えづらい。
「今日お前を呼んだのは他でもない、相談があるんだ」

「へぇ、珍しいね。橘が僕に相談だなんて」
恋愛相談かな。カノジョとの仲がうまくいってないとか。
ゲスな予想で想像を巡らせる藤吾の元にアイスティーが運ばれてきた。小さく会釈をしながら受けとると、伝票を置いて店員は別の客のもとへ小走りで去っていった。それを見届け藍が重々しく口を開く。

「始めにいっておくが、いまから話すことはすべて事実だ」
「なんだよ。もったいつけて」
「一ヶ月ほど前から奇妙なことが起こりだした。いいか？俺は正気だ。病気や妄想なんかではない、マジだ。笑わないでくれよ。
座敷わらしがテレビから出てきたんだ」
学生街の喫茶店。店内に流れるボブ・ディラン。静寂を縫って心地よいメロディが包み込む。
白江藤吾は口を半開きにして、真夏の暑さにやられたらしい（そうとしか思えない）友人、橘藍の顔を伺った。
真剣そのものだった。

「幻覚……？」
「ちげーよ。催眠術とか超スピードとかじゃ断じてねぇ。もっと恐ろしいものの片鱗なんだよ」
「そ、そう。それは、……災難だったね」
絞り出すように藤吾は舌を震わせる。　かけるべき言葉が浮かばない。溶けかけた氷がカランと音をたてた。
「しかもな、それは破滅の序章に他ならなかったんだ」
「ふぅん」
なんとか相づちをうってから、藤吾はテーブルの上で放置されたままだったアイスティーに口をつけ一息ついた。口内が独特の風味に支配される。シロップをいれ忘れていた。
「仲間を呼ぶんだ」

「ぶっ！」
口に含んだ紅茶を吹き出してしまった。ポカンとしながら紙でぬぐう。
鼓膜に問い合わせてみるが、藍は確かにそう言っていた。
「そ、それは、……大変だね」
「わかってくれるか！あの腐れマドハンド！あれほど仲間を呼ぶなと言っているのに」
興奮を抑えるよう捲し立ててから、藍は机の上に放置されていたカフェオレに手をかけそれをぐぐっと飲み干した。
親友はエロＤＶＤの処分を託したりしない、そう茶々をいれたくなったが、そんな雰囲気ではない。
「下半身が蛇の死に神を家に招き入れたり、昨日なんて悪魔召喚に成功しやがった」
「……」
やべぇ、こいつガチだ。藤吾の顔を密かに青くなる。
小学校からの知り合いで、一番仲良く遊んできた友人。可哀想なことに、彼はこの夏の暑さにヤられてしまったらしい。
妄想症、統合失調症か？
「それでだな、白江。お前にお願いがあるんだ」
「……僕ができることなら何でもするよ」
藤吾は未だかつてしたことがないくらい温かな微笑みを持って優しく藍に返事をした。
「頼みってのは他でもない」
脳に閉じ込めた情報の奔流に検索をかけて浮かび上がった妄想症状患者への対応の仕方、それは決して否定はしない、ということであった。温かい瞳で藍を見る。
同意から自覚に繋げ、そこから病院。親友を助けるため、彼に悟られることなく救うんだ。
「魔除けのアイテムを譲ってくれないか？」
「は？」

藤吾の脳内検索窓の予想変換にピーンと『もしかして霊感商法？』と表示される。
壺でも売り付ける気なんじゃ……？
「なんなら金も出す！」
語気を荒らげる少年、買うのは向こう側らしい、意味がわからない。
「聖水でも虫除けスプレーでもホーリィーボトルでも何でもいい！たのむ、白江！お前だけが便りなんだ！」
「そんなもんねーよ」
冷ややかに告げてしまった。

「嘘だろ！お前ならなんとか出来ると蛇女が言ってたぞ！」
「ちょっと意味がわからないんだけど」
「いいか。驚くなよ、白江、お前にはとてつもない霊能力が眠っているんだー」
衝撃だった。『ゼルダの伝説』の剣士の名前がリンクと知った時くらいの衝撃だった。
「だったら妖怪を祓うアイテムの1つや2つお茶のこさいさいだろ」
妄想に僕を巻き込まないでくれ、と心のなかで頭を抱える。
藍はヒートアップしたのか前のめりに藤吾に話しかけていた。
「なあ頼む！あいつらに対抗するにはお前だけが頼りなんだよー」
「君には悪いけど僕はキングオブ一般人だからね。そんな特殊能力ないよ」
「冗談はよせ。なんでもいいから俺に力を貸してくれ！昨日現れた悪魔に命が狙われてるんだ！」
麻薬中毒者めいたことをいい始める藍。一つの可能性として残念な予想がたつ。
「ダメ、ゼッタイ！」
「何がだよ！」
末期も末期、僕の手に終えるだろうか……。

「あのさ、橘」
「おっ、急に顔つきが変わったな！協力してくれる気になったのか？」
「そりゃ夏休みは若い好奇心を擽る誘惑がたくさん溢れてるだろうさ。だけどね、興味があってもそういうのに手を出すってことは人間やめちゃうったことだからね」
「おい、俺を薬中かなんかだとおもってないか？」
「それで橘はなにやってるの？ラッシュ？スピード？覚醒剤とか大麻？ああいうのってどこで手にいれるもんなの？」
「お前のが興味津々じゃねーか！やってねーよ！そんなの！」
数秒間無言で睨み合っていたが、落ち着くためか二人同じタイミングでカップに口をつける。すでに空の藍のカップは味のついた空気しか吸えなかった。
にもかかわらず、先にカップを置いたのは藤吾の方であった。
「そうだなぁ。例えばなんだけど僕がこの夏、超能力者同士のいさかいに巻き込まれて、無い知恵をを絞って必死に通り魔犯と命懸けのバトルをした、と言ったら信じられる？」
「お前バカか？あるはずねーだろ。頭いかれちまったか？」
お前にだけは言われたくない、ぐっと言葉を飲み込んで藤吾は続けた。
「……ともかくだ。僕は超能力なんて持ってないの」
伝えたかったのは、荒唐無稽な話の信憑性と、自分の一般性についてだが、藍にはいまいち伝わらなかったらしい。
「くそ、あのガキにだけはヤられたくないってのに」
苛立た気に藍は背もたれに身体を埋めた。藁にもすがるとはこの事をいうのだろうか、必死さは伝わってきた。
「お祓いでも頼んだら？」
アイスティーをすする。妄想病にとりつかれた人に対して否定を行ってはならない、同意しつつ話題をそらすのが得策だ。
「やってくれるか！？」

「いや、僕じゃなくて」
とはいえこの場合……。適当な演技でもいいから、安心感を与えてやれば、彼の抱えた心の闇は祓えそうだ、短い心理分析で導きだした答えだった。
「五十崎から聞いたことがある。この辺に魔を喰らう神社があるんだって」
「喰らう？妖怪退治って訳か？」
「よく知らないけど元は無病息災が専門らしいよ。それが転じて魔除けも扱ってるらしいし」
「ふーむ、なるほどな。ちょっくら行ってみるか。これから暇だよな？」
「しゃうがないなぁ」
乗りかかった船、藤吾は悟られないよう小さくため息をついた。これで解決してくれればいいんだけど。
「そうと決まれば早速レッツゴーだ。ちなみにどこにあるんだ？」
「蛇籠の森って知ってるかな、なんでも奥に神社があってだね、そこの神使の白い蛇が」
神社、蛇、その２つのワードだけで、藍は不吉な答えを導きだした。胆試しでいったところ、つまり、
「却下ーーー！」
そこは件の蛇女、アヤメのすみかである。

「え？なんでさ」
「あの神社だけは信用してはならん」
有力な情報を握っている村の老人みたいな顔つきで藍は首をふるふると左右にふった。
「魔物が住んどる」
「はあ」
「命が惜しければ、近寄らぬことだ」
「なんだよそのキャラ」

藤吾を無視して藍は通りがかったウェートレスにカフェオレのおかわりを要求していた。
にこやかにオーダーがすんで、こちらを向きなおした藍は人差し指を藤吾のほうにむけ、唇を尖らせた。
「お前んち神社だろ」
夏休み前に五十崎とそのような会話をしていたはずだ。だからこそ俺はこいつを頼っているのだから。
「だったらお前がなんとかしてくれ」
そんな彼の思惑に、藤吾は小さくため息をついた。
「母さんの実家は確かにそうだけど継いだのは叔父さんだよ。僕は一応進学希望だけど、國學院や皇學館は考えてないし」
「なにそれ、大学？」
「簡単にいえば、神主になるための勉強をする気はないってこと」
「ふーん、まあ、進路なんて関係ないんよ。たとえライ麦畑で落ちそうになった子供を抱き抱える夢をとろうと」
「僕の小学校の時の夢をバカにするな」
思い浮かばなかったから、適当に書いただけである。
「本物の霊能力者がここにいるんだからさ」
「ないっての」
「あんの！」
蟹の甲羅の黒いつぶつぶは寄生虫だという事実を教えるかのように、きっぱり言い放つ彼の目には力があった。
「お前にはすげー能力（ちから）があんの！」
うわぁ、この人能力って書いて『ちから』って読ませたよ、いい歳こいて。という辛辣な意見をぐっと飲み込んで藤吾は口を開いた。
「それに僕の家系、そういった才能は女系で受け継がれるらしいんだ。だから僕には無理」
「いやでもなー少なからず存在しているはずなんだよ。あやめがいってたし」
「あやめ、さん？」

誰だっけ、と一瞬頭を捻ったがすぐに答えが浮かんだ。橘のカノジョ（勘違い）だ。
「アヤメさんが僕に霊能力があるって言ったの？」
「おお、ばっちりだ！びびってたぜーあいつ」
少しだけショックを浮ける。ど根性カエルや裸足のゲンがジャンプコミックだと知った時くらいの衝撃だ。
切れ長の目に端正な顔立ち、クールな美人系と言った感じだったが、まさか見かけによらず電波だったとは！
恐らくだが橘の様子がおかしいのも（悪魔とか死神とか座敷わらしとか）、きっとカノジョに影響されたからに違いない。
「橘……」
「ん？」
白江藤吾のスタンスは助けるられるものは助ける。知り合いならばなおさらだ。非常にめんどくさいが、彼は決心を固めた。
「アヤメさんに会わせてくれないか？」
妄想症患者を救うには根本問題を解決しなければならない。橘がアヤメと出会って電波になったのなら、アヤメの電波から改善、それが無理なら関係をたちきる必用があるだろう。酷とはいえ、友達を救うためにはしかたない。原因を取り除くのだ。
勘違いではあるが、彼の心情は妙なヤル気に溢れていた。
「おおっ、さすが白江だぜ！やっぱり頼りになる！」
ただ単純に藍は、厄介者ナンバーワンの蛇な死神を祓ってくれるもんだと思っている。
なんやかんや、お互いに勘違いしたままだった。

夏の幻2

降り注ぐ蝉時雨は静けさとは無縁なものだったが、境内は穏やかな空気に包まれていた。軽い登山のあと蛇籠神社にたどり着いた二人だが、彼らの目的はあくまでアヤメに会う、というものであり、件の神社に来た意味が藤吾にはいまいちわからなかった。

「なぁ、橘。なんだってこんなとこに来たんだよ。まさかホントに御払いでもする気？」

「アヤメん家がここだからよ」

「ふーん、巫女でもやってるの？」

「そうといえばそうだし、違うといえば違う」

ズカズカと拝殿に向かってあるいていく。真ん中は神様の通り道だから歩いちゃいけないよ、と祖母の声が藤吾の耳に蘇ったか、言ったところで聞いてくれないだろう。

藍は賽銭箱の前で立ち止まり大きく息を吸って大声をあげた。

「やーい、お前んちーおっぱっけやしきぃ」

やけにテンションが高く、なんて声をかけるべきか、藤吾にはわからなかった。　普通に考えれば、神社が住居なわけがない。

「まっくろくろすけでておいでー、でないと目玉をほじくるぞぉ！」

勘違いしているのだろうか、ここじゃなくて、たぶん近くに住居としてる場所があるはずだから捜そうよ、と声をかけようとしたところ、

「なによ？」

裏の本殿の方からひょっこりアヤメが現れた。

「来たな！ぶっ飛ばしてくれる」

「のっけから元気はつらつね、身の程をわきまえなさい。喧嘩腰の意味がわからないわ」

藤吾は混乱していた。まず一つとして、あの呼び掛けでアヤメが現れたのもそうだし、彼女はしゃっきりと立っていてとてもじゃないが橘に妄想症を植え付けた人物には思えない、からだ。
「あーはっはっ！手始めにテメーからあの世に送ってやる！」
誰がどうみても頭がおかしいのは橘の方だった。
「やれやれ、調教がたりなかったのかしら」
二人はどうやらアブノーマルな関係らしい、あまり突っ込まないでおこう。
「言わせておけば……。だがな、てめぇの天下も今のうちだ！お願いします、藤吾さん！」
いきなり話を降らても、曖昧に「あ、うん」とどもるだけだった。
「あら、お久しぶりです。白江藤吾さん」
そんな彼に今気づきましたといった風にしれっと頭をさげるアヤメ。普段はおおっぴろげにしている蛇の尻尾の下半身だが、事前に彼が訪れることを察知していた彼女の両脚部はしっかりとした二本の足でカモフラージュしていた。
その事に藍は気づいていない。
「白江、さぁ、そのいかんなき神通力でこの蛇女に正義の鉄槌をくらわせるのだ！」
「だから、僕にそんな力ないっての」
「あんの！」
要領の得ない言い合いを眺めていたアヤメは静かに息をはいた。
「またそんなこと言って……、黄色い救急車のお世話になりたいの？」
その言葉で、ああやっぱり、と白江は密かに納得がいったと頷く。カノジョもやっぱり橘の妄想に辟易してるんだな、と。
「はぁ？てめぇ、なに言ってやがる」
「もういいわ、ゆっくり休みなさい。橘あなた疲れてるのよ」
アヤメからかけられた初めての優しい言葉に藍はためらいがちに頬を赤らめた。

横で白江はゆっくりと手をあげる。
「ちょっといいですか」
「あらどうしたの？」
「橘、少しだけあやめさんと話をさせてくれ」
クルミ割り人形のようにぎこちない頷きを藍から受け取った白江は、こそこそとアヤメに近づき、囁くような声音で彼女に訊ねた。
「すみません、いきなりですが、橘は大丈夫なんですか？」
アヤメはほくそ笑んだ。思ったよりもうまい具合に話は転がっているらしい。
「正直に答えるなら少々マズイ状況ね」
「やっぱり」
「頭がともかく酷いわ。一生治らないかもしれないくらいイカれてる。顔も酷いし、目もあてられないわね」
「え？」
積もった鬱憤を吐き出しすぎたらしい。行きすぎた言葉は猜疑心をあおってしまう。咳払いをしてから、アヤメは続けた。
「……藤吾、突然あなたには霊能力があるとかほざいてなかった？」
「あぁ、言ってました！そんなこと」
「やっぱり……」
舌打ちとともに、「あの豚、調子こきやがって」と呟きそうになったが、どうにか押さえることができた。
「会う人会う人、誰にでも言うみたいだから、気を悪くしないでね」
「えぇ、大丈夫です。あり得ないですよ、僕が特殊能力もってるとか」
口角がにやりと上がる。
アヤメの作戦は、霊能力をもつ白江藤吾を、結局は橘の世迷い言ごとだと勘違いさせることだ。どうやら手を加えるまでもなく上手くいっていたらしい。
「でも、橘は一体どうしたんですか？夏休み前は普通だったのに」
アヤメはしっくりくる言い訳を考えてみたが、何も思い浮かばな

かった、ので、テキトーぶっこくことにした。
「ドラクエ６のセーブデータが消えたらしいの」
「はぁ！？嘘だぁ。いくら橘でも、そんな」
「まぁ、あまり突っ込まないであげて、トラウマになってるみたいだから」
数秒で嘘が見破られたことに若干驚きながらの発言だった。
「おい、まだかよ。なにこそこそしてんだ。白江！敵と馴れ合うなよ！」
痺れを切らしたらしい藍が境内に響き渡るかのような大声で叫んだ。
「あぁ、悪い。話ならすんだよ」
「たくっ、それじゃ悪霊退散お願いしますよ、白江さん！」
まだそんなこと言ってんのかよ。
ため息ついて、橘の肩にそっと手をのせる。
首を小さくふりながら、白江はそっと呟いた。
「帰ろう、橘。お前疲れてるんだよ」
「いや、体力ならありあまってるけど」
「違うよ。精神力の話」
「まぁ、確かに座敷わらしが現れてから疲れることばっかだけどな」
白江は優しい瞳で彼を見つめ、ぽんぽんと彼の肩を叩いた。
「帰って休もう、ゆっくり体を休ませれば、座敷わらしも蛇女も悪魔もきっといなくなるよ」
「いやいやいや、目の前にいるから！蛇女が！」
子供のような声音で叫ばれて無視するわけにもいかず、白江は後ろをちらりと振り向いた。
「違うよ、橘あれは神社だよ」
「その前に立ってるじゃねーか」
「あれは狛犬だよ」
「その横だよ！」
「その人はあやめさんだよ」

「そうそれ！そいつだよ！蛇女！」
「違うよ、坊や、柳の木だよ」
「何で突然『魔王』になるんだよ！」
このままでは家に着いたとき橘は冷たくなってしまうだろう（言ってみただけ）。
「おいこら！シカトしてんじゃねーぞ！白江ー！頼むから成仏させてやってくれよ！」
ズルズル引きずられながら神社を後にする藍。そんな二人を見ながらアヤメは小さく、
「バカばっかりね」
と呟いた。

帰宅。家。
いつもは居間でゴロゴロしている座敷わらしの姿はない。どこかに出掛けたのだろうか、半引きこもりのくせに珍しいことがあるもんだ、と一人ごちた藍を白江はすこしだけ悲しい瞳でソファーに座るように促した。
「いいか、橘。座敷わらしなんて、この世には存在しない」
本気でカウンセル（の真似事）をしよう、密かに白江は決意を固めていた。友情に厚いタイプではないが、それ相応の分別は持っているつもりだ。
仮に座敷わらしという妖怪がこの世にいたとして、あくまでも非化学的ジャンルに分類されるのは間違いない。それなら最初からないものとして考えた方が幾分楽になるだろう。
「いや、いるって」
「どこにもいないじゃん」
「いまはたまたま席をはずして、……そうだな、あいつ妙に勘がよかったりするから、お前から逃げてんのかもな」
余談だが、白江とリコはニアミスこそはあるものの、バッティングは一度もない。それゆえ、四方山話を手放しで受け入れることが

できないのだ。
「ょぅく、胸にてをあてて考えてみてよ」
語気のある静かな言葉で、白江は真っ直ぐに藍を見つめた。
「その座敷わらしが他人に認知されたことがある？」
「たしか五十崎と仲がよかったはずだぞ」
「いや、まぁ、ほら、五十崎はアレだから」
アレに当てはまるのは妖怪好き、というパラメーターである。多くを語ってはいけない。めんどくさいから。
「ほかにいないの？」
「ほかね……あ、おめーの妹とも仲がいいはずだ」
「桃ちゃんと？」
白江は呟きながら、首を軽くひねった。白江桃里とリコはたしか駅前のファンシーショップでお互いに顔合わせしていたはずだ。
「そんなばかな」
「マジだって。滅茶苦茶意気投合してたから」
「うちの子を巻き込まないでくれ」
きっぱりと言い放つ藤吾の瞳は強い意志の炎が灯っていた。
「……ほかは、いないかな。とくに思い付かん」
「そんじゃ、座敷わらしがいたという証拠みたいものはないの？」
白江は責める口調にならぬよう注意しながら質問をした。
「証拠？」
「そう、証拠」
二三度頷く。
「疑ってかかってるわけじゃないけど、絶対に痕跡というものは残ると思うんだ。ここで暮らしていたのなら」
「……」
冷静になって考えてみれば、リコは極端に私物の少ない居候だった。いつか押し入れに入っていたドラえもん型の缶ケースはいつのまにかどこかにいってしまったし、恐らくたが、白江の言う痕跡がこの部屋残されている確率は極端に低いだろう。

「たぶん、ないと思う」
だろ？と言わんばかりの短い息をつかれる。
「だからさ、橘。残りちょっとの夏休み、煩わしいことは考えずに、ゆっくり体を休ませようよ」
「いや、でも、あいつは確かにいるんだよ！」
何回も自問自答してきたのだ。いまさら回答を覆されてたまるか。
「へんな昼ドラに夢中になったり、一緒に出掛けたりもしたんだ！そうだ！こないだは蛇女と６４でゴールデンアイをやってたはずだ！」
それを指し示すように、テレビに接続されたままの　ゲーム機器を指差す。
「肝だめしだって、参加したんだぞ！」
「座敷わらしが肝だめしに参加するわけないだろ」
「うっ」
冷静なつっこみに藍は言葉を失った。妖怪が妖怪相手に度胸だめしなんて、おかしな話、あるはずがない。
「ゲームだって久しぶりにやりたくなってひっぱりだしただけ、橘がね」
「いや、別にやりたいとは」
「にしても懐かしい。マリオパーティーで盛り上がったよね。ふぃにーしゅ！ってさ」
「あぁ！なんか覚えてるわ、あの雪だま転がすやつとか」
「そうそう。って脱線してたね。話を戻すと、だね、誰だって昔のゲーム懐かしんで起動させることはあるってこと」
「むむ、確かに」
頷く、というより頷かされる。
「つまり座敷わらしな橘が勝手に作り上げたイメージなんだよ」
「えー」
納得がいかない、と唇を尖らせる藍。
「おれがあんなキャラクター作り出すとは思えないぞ」

「なんでだよ」
「だって俺、年上のが好きだもん」
リコがこの場にいたなら、藍のけつは蹴りあげられていたことだろう。
白江はその発言を受けとめ、静かに息をはいた。彼の好みこと、アダルトグッズに振り回された夏休みのトラウマが軽くよみがえる。
「ほんとにそうか？」
「む、どういう意味だ」
「昨日は悪魔があらわれたんだっけ？」
「あぁ、金髪碧眼のちんまいのな。裏表が激しそうで怖いんだ」
「仮に悪魔がいた、と仮定してだよ」
人差し指を一本たてて、それを指揮棒のようにふるいながら白江は言葉を続けた。
「悪魔はその人が望む姿で現れると、昔、五十崎に借りた本で読んだことがある」
「は？」
「つまりだよ、橘。悪魔が金髪幼女の姿をしていたのなら、君がそれを無意識のうちに望んでいた、というわけになるんだ。ほんとに悪魔がいたならの話だけど」
「そんなばかな！」
たまらずに叫んだ。
「じゃ、ここで質問。橘は絶対に年上のボンキュボンのおねぇさんの方が好みなのかな」
聞きながら、先程あったばかりのアヤメの均整の取れた、出るとこ出ている可憐な立ち姿を思い浮かべる。スレンダー、性格を無視するならば、アヤメが一番好みの体型だ。
「当たり前だ！」
切実だった。
「だったら悪魔は君が造り上げた想像上の人物になるわけだ」
「む、むむぅ」

首を捻りすぎて一回転しそうな勢いだった。
「そうか、そうなるのか」
「そう。んじゃちゃんと宣言して」
「宣言？」
「年上好きを全世界の人にアピールする感じで」
グッと親指をたてて「おう！」と応じてから、彼は、
「俺はぼいんがだいすきなんだ！！！」
と叫んだ。それはつまり、座敷わらしや悪魔はイメージを造り上げた紛い物ということになる。決別であった。

「そうか、座敷わらしはいないのか」
なんとか納得のいく道に導けたと満足がいったように帰宅のとについた白江の背中を見送ってから、残された橘藍は静かになった部屋で一人立ち尽くしていた。
「座敷わらしはいない……」
そう、この物語はすべて俺の想像上の話であり、実在する人物団体等はいっさい関係なく、
と、モノローグでストーリーの閉めにかかっていた彼の鼓膜が、玄関扉が開かれる音に刺激された。
「だぁぁ、つかれたぁ！」
舌足らずの幼子の声。続けて甘ったるしい少女の、
「おみ足をお揉みしましょうか！？お代やお礼は結構てす、代わりに芳醇な香り嗅がせていただければ、ワタクシはそれでもう！あぁ！」
「でぇぇい、気持ち悪いわ！誰のせいで疲れておると思うとる！？」
金髪パンクの少女とおかっぱ和服の少女は、ふらふらと居間に入ると、
「……」
無言でポカンとする藍に、
「おお、藍。おかえりなさい、帰っておったのか。ちょっと夕飯の

買い出しにのう。今日はすき焼きじゃぞ」
ナチュラルな動作でビニール袋を掲げるリコ。
「ねー様と同じ鍋を箸でつつけるなんて感激ですわ！」
「お主……そういえば、いつ帰るんじゃ」
藍は一回深呼吸してから、全世界の人にアピールする感じで叫んだ。
「いるじゃねーーーか！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1628l/

座敷童は懐かない

2011年10月13日13時49分発行